

なくて、寧ろ資本Aである。

Aの場合に於ける餘剩價值率は $\frac{500}{500}$ 即ち一〇〇パーセントである。然し曩の場合には五週間の産出餘剩價值五百磅をば五千磅なる前貸資本（中、十分の九は此餘剩價值の生産には充用されなかつた）に對して計算したのであるが、今や五千磅なる餘剩價值は、五百磅なる可變資本に對して計算される。この五百磅は五千磅なる餘剩價值の生産上現實的に充用された可變資本の十分の一に過ぎない。蓋し五千磅なる餘剩價值は五十週間に亘つて生産的に消費された五千磅なる可變資本の生産物であつて、五週間といふ一期間内に消費された五百磅なる資本の生産物ではないからである。曩の場合には、五週間に生産された餘剩價值は五十週間に亘つて前貸された資本、換言すれば、五週間に消費される額の十倍に相當する資本に對して計算されたのであるが、今や五十週間に生産された餘剩價值は、五週間に亘つて前貸された資本、即ち五十週間に消費される額の十分の一に相當する資本に對して計算されるのである。

五百磅なる資本Aは、決して五週間以上の期間に亘つて前貸されるものではない。それは五週間目の終末に回流し來たるものであつて、一年間十回の回轉に依り十度び同一の行程を更新し得るのである。此事實に依つて、二つの結論が生じて來る。

第一に、Aの場合に前貸された資本は、一週間の生産行程に絶えず充用される資本部分の五倍に過ぎないのであるが、五十週間に一度しか回轉しない、随つて又五十週間に亘つて前貸されねばならぬ資本Bの方は、絶えず一週間に充用され得る部分の五十倍に相當するのである。即ち資本の回轉なるものは、一年間に亘つて生産行程に前貸される資本と、一定の期間（例へば一週間）絶えず充用し得る資本との比例を變化せしむるものであつて、此事實こそ正に、五週間に生ずる餘剩價值が此五週間に充用された資本に對しては、なく、寧ろ五十週間に充用された其十倍に相當する資本に對して計算されるといふ、上記の第一場合を齎らす所のものである。

第二に、資本Aの五週間なる回轉期間は、一年の十分の一を占むるに過ぎない。随つて一年の中には、五百磅なる資本Aを絶えず新たに充用する所の斯くの如き

回轉期間が十個含まれてゐる譯である。此場合における充用資本は、五週間に亘つて前貸された資本に、一年間の回轉期間數を乗じたものに等しい。一年間に充用される資本は 500×10 即ち五千磅であり、一年間に前貸される資本は $\frac{5000}{10}$ 即ち五百磅である。實際のところ、五百磅なる資本は絶えず新たに充用されるものであるが、如何なる五週間に於いても、此五百磅以上の額が前貸されることはないことである。他方に於いて、資本Bの場合には、五週間に五百磅しか充用されないことは事實であり、而も此五百磅は右の五週間に亘つて前貸されるのであるが、然し回轉期間は五十週間であるから、一年間に充用される資本は、各五週間に對して前貸される資本に等しくはなく、寧ろ五十週間に對して前貸される資本に等しいのである。けれども餘剩價值率が一定して居ると假定した場合、一年間に産出される餘剩價值量の大小は、一年間に充用される資本の大小に懸るものであつて、一年間に前貸される資本の大小に懸るものではない。随つて年に一度回轉する五千磅といふ資本に依つて一年間に産出される餘剩價值量は、年に十度回轉する五百磅といふ資本に依つて一年間に産出される餘剩價值量よりも大ではない。而して

それが斯かる大きさを有するに至るのは、一年間に一度回轉する資本が一年間に十度回轉する資本の十倍に相當してゐる結果に外ならないのである。

一年間に回轉する可變資本——随つて、此資本部分に等しき年生産物部分又は年支出部分——とは、一年の間現實的に充用され生産的に消費される可變資本のことである。そこで斯ういふ結論が生じて来る。即ち一年間に回轉する可變資本Aと一年間に回轉する可變資本Bとが等量であり、且つ等一なる價值増殖條件のもとに充用され、随つて雙方の餘剩價值率が同一であるとするれば、一年間に産出される餘剩價值量も亦同一でなければならぬ。されば 一年間に産出される餘剩價值量なる一年間に回轉する可變資本 比例に依つて言ひ現はされる年計算餘剩價值率も亦同一でなければならぬ。なせならば、充用資本量は雙方同一であるからである。或は又、總括して言ふと次の如くなる。即ち回轉可變資本の相對量は幾許であるにしろ、一年間に産出される餘剩價值の率は、夫々の資本が平均的期間（例へば、平均的に計算した一週又は一日）に運用される所の餘剩價值率に依つて決定される。

以上は、餘剩價值の生産と餘剩價值率の決定とに關する法則から生じて来る唯

一の結論である。

更らに 一年間に回轉する資本
前貸資本 なる比例が（此比例に於いて考慮に入るものが可變資本のみであることは、曩に述べた通りである）、如何なる事實を言ひ現はしてゐるかを觀察しよう。此除法に依つて生ずるものは、即ち一年間に前貸された資本の回轉數である。

それは資本Aの場合には $\frac{5000 \text{磅}(\text{一年間に回轉した資本})}{500 \text{磅}(\text{前貸資本})}$ であり、又資本Bの場合に在つては $\frac{5000 \text{磅}(\text{一年間に回轉した資本})}{500 \text{磅}(\text{前貸資本})}$ である。

此いづれの分數に於いても、分子は前貸資本と回轉數との積を言ひ現はしてゐる。即ちAの場合には 500×10 を、Bの場合には 500×1 を言ひ現はしてゐるのである。或は又、前貸資本と轉倒したる年計算回轉期間との積を言ひ現はしてゐる。Aの回轉期間は一年の十分の一であつて、其轉倒數は一分の十である。そこでAの分子は $500 \times \frac{1}{10} = 5000$ となり、同様にBの分子は $5000 \times \frac{1}{1} = 5000$ となるのである。次に右の兩分數に於ける分母は、回轉資本と轉倒したる回轉數との積を言ひ現はしてゐる。即ちAの場合には $5000 \times \frac{1}{10}$ を、Bの場合には $5000 \times \frac{1}{1}$ を言ひ現はして

ゐるのである。

一年間に回轉する所の兩可變資本に依つて運轉される夫々の労働量（支拂労働と不拂労働との總量）は、この場合相等しい。なせならば、回轉資本そのものが相等しく、其價值増殖率も同様に相等しいからである。

一年間に回轉する所の資本が、前貸可變資本に對して有する比例は、（一）前貸さるべき資本が、一定の労働期間に充用される所の可變資本に對して有する比例を示すものである。回轉數はAの場合と同様に十であるとし、且つ一年は五十週間に等しいと假定すれば、回轉期間は五週間に等しくなる。此五週間に對して、可變資本が前貸されなければならぬ。而して五週間に互つて前貸される資本は一週間に充用される可變資本の五倍に相當すべき筈である。換言すれば、前貸資本（此場合で云へば五百磅）の五分の一だけが、一週間の経過中に充用され得るのである。然るに回轉數が一分の一である資本Bの場合に於いては、回轉期間は一年即ち五十週間であつて、毎週充用される資本に對する前貸資本の比例は $50:1$ となる。若しBの場合に於いても、Aの場合に於けると同一の關係が行はれると

すれば、毎週放下さるべきBの資本は、一百磅ではなく一千磅でなければならぬこととなるであらう。(二) 同一量の可變資本随つて又——餘剩價值率が一定してゐるとすれば——同一量の労働(支拂労働及び不拂労働)を運轉し、かくして一年間に同一量の餘剩價值を生産するために、Bに於いてはAの場合に十倍する資本(五千磅)が充用されるといふ結果が生じて来る。現實的の餘剩價值率なるものは、一定の期間に産出された餘剩價值に對する、同一の期間に充用された可變資本の比例か、又は此期間に充用された可變資本に依つて運轉される所の不拂労働量かの外には何ものをも言ひ現はすものではない。故に此餘剩價值率は、充用されない期間にも尙前貸されてゐる可變資本部分とは絶對に關係する所なきものであり、随つて又種々なる資本の、一定期間中に前貸された部分と、同一期間中に充用された部分との間における回轉期間に依つて變化され分化された比例に對しても、何等關係する所はないのである。

曩に説明せる所に依つて、寧ろ次の結論が生じて来る。それは即ち、餘剩價值の年率なるものが、労働の搾取程度を言ひ現はす所の現實的餘剩價值率と一致する

場合は唯一つしかないといふ事である。前貸資本が年に一度きり回轉しない場合、換言すれば、前貸資本と一年間に回轉せる資本とが相等しく、随つて又餘剩價值生産の目的を以つて一年間に充用された資本に對する、一年間に生産された餘剩價值量の比例が、一年間に前貸された資本に對する、一年間に生産された餘剩價值量の比例と一致し且つ同一である場合が即ちそれである。

(A) 餘剩價值の年率は $\frac{\text{一年間に生産された餘剩價值}}{\text{前貸可變資本}}$ に等しい。所が、一年間に生産される餘剩價值量は、現實的の餘剩價值率と餘剩價值の生産に充用される可變資本との積に等しく、一年間の餘剩價值量の生産に充用される資本は、前貸資本と其回轉數(これをnとしよう)との積に等しいものであるから、公式Aは結局次の形に轉化される。

(B) 餘剩價值の年率は $\frac{\text{現實的の餘剩價值率} \times \text{前貸可變資本} \times n}{\text{前貸可變資本}}$ に等しい。例へば、資本Bの場合には $\frac{100 \times 5000 \times 1}{5000}$ 即ち一〇〇パーセントである。要するにnが一に等しき場合にのみ、換言すれば前貸可變資本が一年に一度しか回轉せず、随つて一年間に充用され又は回轉する資本と相等しき場合にのみ、餘剩價值の年率は現實的の餘剩價

値率と相等しくなるのである。

餘剰價値の年率を示すに M' を以つてし、現實的の餘剰價値率を示すに m' 、前貸可變資本を示すに v 、回轉數を示すに n を以つてするとすれば、 $\frac{M'}{v} = \frac{m'}{n}$ 、 $\frac{M'}{v} = \frac{m'}{n}$ となる。即ち M' は m' に等しいのであつて、 n が一に等しく、随つて $\frac{M'}{v} = m' \times 1 = m'$ なる方程式の成立する場合にのみ M' は m' に等しくなるのである。

更らに斯う云ふ結論が生じて来る。即ち餘剰價値の年率なるものは常に $\frac{m'}{n}$ に等しいといふ事である。換言すれば、一回轉期間に消費された可變資本を以つて其期間内に生産せる餘剰價値の現實率と、一年間における此可變資本の回轉數との積、又は——畢竟同じ事に歸するが——右の現實的餘剰價値率と、一年を單位として計算せる消費可變資本の轉倒した回轉期間との積に等しいといふことである。(可變資本が年に十度回轉するとすれば、其回轉期間は一年の $\frac{1}{10}$ に等しく、随つて其轉倒した回轉期間は $\frac{10}{1}$ 、即ち十に等しくなる)。

更らに、 n が一に等しいとすれば、 $\frac{M'}{v} = m'$ といふ結果が生じて来る。 n が一よりも大である場合、換言すれば、前貸資本が年に一度以上回轉し、随つて回轉資本が前

貸資本よりも大である場合には、 M' は m' を超過することになる。

最後に、 n が一以下である場合、換言すれば、一年間に回轉する資本が前貸資本の一部に過ぎず、随つて又回轉期間が一年以上におよぶ場合には、 M' は、 m' よりも小となる。

暫らく、此最後の場合について述べよう。

回轉期間が五十五週間に延長されるといふ一點を除き、上例の前提條件は總べて其まゝ保存されるものと假定する。勞働行程の爲に、毎週一百磅といふ可變資本を要する。随つて回轉期間に要する可變資本は五千五百磅となる。毎週生産される餘剰價値は一百磅である。故に m' は、曩の場合と同様に一〇〇パーセントである。この場合における回轉期間は $1 + \frac{1}{20}$ 年 (一年は五十週間であるとして)、即ち一年の十分の十一であるから、回轉數 n は五十五分の五十、即ち十一分の十に等しくなる。

M' は $\frac{100\% \times 5500 \times 11}{5500} = 100 \times \frac{10}{11} = \frac{1000}{11} = 90 \frac{10}{11} \%$ に等しい。即ち一〇〇パーセントよりも小である。實際のところ、餘剰價値の年率が一〇〇パーセントであるとすれ

ば、五千五百磅なる可變資本は一年間に五千五百磅なる餘剩價值を生産すべき筈である。所が事實に於ては、此目的のため一年の十分の十一を要するのである。五千五百磅なる可變資本が一年間に生産する餘剩價值は、五千磅に過ぎない。即ち餘剩價值の年率は $\frac{5000m}{5500v} = \frac{10}{11} = 90\frac{10}{11}\%$ に等しくなるのである。

されば餘剩價值の年率なるもの、即ち一年間に生産された餘剩價值と、總じて前貸された可變資本（一年間に回轉せる可變資本からは區別して考へた所の）との比較は、單なる主觀的問題ではなく、寧ろ資本の現實的運動が斯かる對比を生せしめるのである。資本Aの所有者に就て言へば、五百磅なる彼れの前貸可變資本は一年の終末に回流して來る。それ以外に尙、五千磅なる餘剩價值が造り出されるのである。彼れの前貸資本の大小を言ひ現すものは、彼れが一年間に充用する所の資本量ではなく、寧ろ時を切つて彼れの手に回流し來たる資本量こそ、彼れの前貸資本の大小を言ひ現すものである。一年の終末に際し、資本の一部が生産貯藏として存在し、他の部分が商品資本乃至貨幣資本として存在するか否か、又如何なる比率を以つて資本が此等の異なる部分に分割されるかといふことは、當面

の問題にとつては何等關係する所なき事柄である。次に資本Bの所有者に就て言へば、其前貸資本なる五千磅が回流して來る上に尙、五千磅なる餘剩價值が造り出される。また資本B（最後に考察した五千五百磅）の所有者に就て言へば、一年間に、五千磅なる餘剩價值が生産されるけれども（放下資本は五千磅、餘剩價值率は一〇〇パーセントであるから）、前貸資本は尙未だ回流し來たらず、同様に生産餘剩價值も未だ收納されないものである。

$M' = mn$ なる方程式は、一回轉期間の進行中充用可變資本について適用し得べき餘剩價值率 $\frac{M' - m}{m}$ である。此に乘するに、前貸可變資本の回轉期間又は再生産期間の數、換言すれば前貸可變資本が其循環を更新する期間の數を以つてすべき事を言ひ現はしてゐる。

資本價值なるものは、總じて前貸されるものであつて、支出されるものではない事は、すでに第一卷第四章（『貨幣の資本化』）、次いで又第一卷第十一章（『單純なる再生産』）の中に述べた通りである。蓋し資本價值なるものは、其種々なる段階を通過したる後、最初の出發點に——而も餘剩價值を含んで——復歸し來たるもの

であつて、此事實に依り資本價值は前貸されたものとして特徴づけられることになるのである。資本價值の出発點から復歸點迄の間に経過される時間は、即ち其前貸期間たるのである。資本價值の通過する全循環をば、資本價值が前貸されてから回流する迄の期間に依つて秤量したものは即ち其回轉であり、而して此回轉の持續は即ち回轉期間たるのである。此期間を経過して、循環が終了されたとき同一の資本價值は新たに同一の循環を開始し、随つて又新たに自己増殖を遂げ、新たに剩餘價值を造り出し得るやうになる。Aの場合における如く、可變資本が年に十度回轉するとすれば、同一の資本前貸を以つて、一回轉期間分の剩餘價值量が年に十回造り出されることになるのである。

資本前貸の性質は、之れを資本制社會の見地に立つて明かにすべきである。

一年間に十度回轉する所の資本Aは、一年間に十度前貸される。それは新たな回轉期間に入る毎に、新たに前貸されるのである。けれどもそれと同時に、Aは一年間を通じて五百磅以上の資本價值を前貸することなく、實際また茲に考察する生産行程にとり五百磅以上の資本價值を支配することはないのであつて、此五

百磅は一つの循環を終了するや否や、新たに同一の循環を開始せしめられる。要するに、資本が其性質上資本たる特徴を保持するに至るのは、それが反覆的の生産行程内に絶えず資本として作用する結果に外ならぬ。現例について言へば、それは五週間以上に互つて前貸されることはないのである。回轉がより長期間に及ぶとすれば、此資本は不充分となり、回轉が短縮されるとすれば、此資本の一部は過剩となる。各五百磅づゝの十資本が前貸されるのではなく、五百磅なる一資本が連続的の諸期間に十回前貸されるのであつて、餘剩價值の年率は、十回前貸された五百磅なる一資本、換言すれば五千磅に對して計算されるものではなく、一回前貸された五百磅なる一資本に對して計算される事になるのである。蓋し十回流通する一ターレルは十ターレルの機能を盡すに拘らず、それに依つて代表される所のものは、流通内に存する一ターレルに過ぎないからである。流通が行はれる毎に此一ターレルの新たな所有者となる人の手中に於いては、それは依然として一ターレルといふ同一の價值を代表するものである。

同様に資本Aも亦、その毎次の回流、並びに一年末の回流に於いて、それを所有す

るところの人が常に五百磅なる同一の資本価値を運用するに過ぎないといふ事實を示すものである。されば回轉の行はれる都度、彼れの手に回流し來たる資本も亦五百磅であつて、彼れの前貸資本は五百磅を超過することはない。かくて此五百磅なる前貸資本こそ、餘剩價值の年率を言ひ現す分數の分母となるのである。この分數を示す上記の公式は、 $N' = \frac{m'v}{m'}$ である。現實的の餘剩價值率 m' は $\frac{m'v}{m'}$ (換言すれば、餘剩價值を生産した可變資本でその餘剩價值の量を割つたもの) に等しいのであるから、 N' 中の m' なる價值に代ふるに $\frac{m'v}{m'}$ を以つてする事が出来る。而して斯くする事に依り、 $N' = \frac{m'v}{m'}$ なる他の公式が得られるのである。けれども五百磅なる資本は、それが十度回轉することに依り、随つて又その前貸が十度更新されることに依つて、自己の十倍に相當する五千磅なる一資本の機能を盡すのであつて、それは丁度、年に十回流通する所の五百ターレルなる個貨が、年に一回きり流通しない五千磅なる個貨と同一の機能を盡すのと同じである。

(二) 個別的可變資本の回轉

『生産行程は其社會的形態の如何を問はず、連續的のものでなくてはならぬ。換

言すれば、時を切つて絶えず新たに同一の諸段階を通過するものでなくてはならぬ。……故に社會的の各生産行程は、之れを其不斷の聯絡と更新の絶え間なき流動との方向から觀察するならば、同時に又再生産行程となるのである。……餘剩價值なるものは、資本價值の周期的加量、換言すれば運用資本の周期的果實たる資格に於いて、資本より生ずる所の収入なる形態を受ける』(第一卷、第二十一章、邦譯本第三册、第四及五頁)。

資本Aの場合には、五週間づゝの回轉期間が五つあつて、其第一の期間には五百磅なる可變資本が前貸される。語を換へて云へば、毎週一百磅なる資本が勞働力に轉化されるのであつて、第一次回轉期間の終末には五百磅なる資本が勞働力の購買に支出されることになるのである。その結果、本來前貸總資本の一部であつた此五百磅は、もはや資本ではなくなる。それは、勞銀として拂ひ渡されてしまふのである。所で勞働者は又、此五百磅をば生活資料の購買に支出し、かくして五百磅の價值ある生活資料を消費する。即ちこの價值だけの商品量が滅失されることになるのである。(勞働者が貨幣などの形で貯蓄する所の部分も亦商品ではな

い)。此商品量は資本家の缺くべからざる要具である労働者の労働力をば、作用し得る状態に保存するものであるが、此一點を除けば、それは労働者の立場から見て不生産的に消費されるものとなるのである。

次に資本家の立場から見れば、此五百磅はそれと同一なる価値（又は價格）の労働力に轉化される。資本家は此労働力を労働行程内に於いて生産的に消費する。かくて第五週の終末には、一千磅なる価値生産物が生ずることになる。此価値生産物の一半（五百磅）は労働力の購買に支出された可變資本価値の再生産されたものであり、殘餘の一半（五百磅）は新に生産された餘剩価値である。然るに五週間分の労働力——その購買に依つて、資本の一部が可變資本に轉化する所の——も、同様に支出され消費される。尤もそれは生産的に消費されるのである。昨日作用した労働は、今日作用しつゝある労働と同一のものではない。昨日作用した労働の価値は、其労働に依つて造り出された餘剩価値と合して、今や労働力それ自體とは異つた物である生産物の価値として存在することになる。けれども生産物が貨幣に轉化されるといふ原因によつて、前貸可變資本の価値に等し

き生産物価値分は新たに労働力と交換され、かくして又新たに可變資本たる機能を盡し得るやうになるのである。單に再生産されたと云ふだけではなく、尙また貨幣形態に再轉化された資本価値を以つて、同一の労働者、換言すれば同一の労働力負擔者が雇傭されると云ふ事は何うでもいい問題であつて、第二次の回轉期間に於いては、資本家は舊來の労働者の代りに新たな労働者を雇傭することも出来るのである。

實際のところ、各五週間より成る十個の回轉期間内に逐次的に勞銀として支出されるものが、五百磅ではなく五千磅なる一資本であることは、以上説く所に依つて明かである。而して此勞銀は又、労働者に依り生活資料の購買に支出されるものであつて、右の如くに前貸された五千磅なる資本は、かくして結局消費されてしまひ、もはや存在しなくなるのである。

他方に又、五百磅ではなく五千磅なる価値を有する労働力は相踵いで生産行程に合體せしめられ、かくして五千磅といふ夫れ自身の価値を再生産する上に、尙ほ五千磅なる餘剩価値をも生産するのである。第二次の回轉期間に前貸される五

百磅といふ可變資本は、第一次の回轉期間に前貸された五百磅と同一のものではない。後者は消費されてしまひ、勞銀の支拂に支出されてしまつたのである。けれどもそれは、第一次の回轉期間に商品として生産され、貨幣形態に再轉化された五百磅なる新規の可變資本に依つて代位される。即ちこの五百磅といふ新規の貨幣資本は、第一次の回轉期間中に新たに生産された商品量の貨幣形態なのである。資本家の手中には五百磅といふ同一の貨幣額、即ち——餘剩價值を問題外に置いて考へるならば——最初に彼れが前貸した所のものと丁度等額の貨幣資本が存在することになるのであるが、これが爲、彼れの運用する所のものが新たに生産された資本であるとの事實は隠蔽されることになる。(不變資本部分を補償する他の商品資本價值分について言へば、其價值は新たに生産されるものではなく單に此價值の存在形態が變化するに過ぎないのである)。

次に第三次の回轉期間について觀察しよう。この場合前貸される三度目の五百磅なる資本は、舊來の資本ではなく、新たに生産された資本であることは明かである。なせならば此資本は、第二次の回轉期間(第一次の回轉期間ではなく)に

生産された商品量の貨幣形態、換言すれば、かゝる商品量中の、前貸可變資本價值に等しき價值を有する部分の貨幣形態であるからである。第一次の回轉期間に生産された商品量は既に販賣されたのであつて、此商品量の價值の中、前貸資本の可變價值分に等しい部分は、第二次回轉期間の新たななる勞働力に轉化され、かくして新たななる商品量を生産することになつたのである。而して此新たななる商品量も亦、更らに販賣されたのであつて、其價值の一部こそ、第三次の回轉期間に前貸さるべき五百磅なる資本を構成するものとなるのである。

而して此事實は、十個の回轉期間を通じて行はれる所である。即ち此期間の進行中、五週を経過する毎に、新たななる勞働力を生産行程に合體せしむる目的を以つて、新たに生産された商品量(其價值も亦、可變資本を補償する限りに於いては新たに生産されるのであつて、不變流通資本分の場合に於ける如く單に再現するだけのものではないのである)が市場に投せられるのである。

要するに、五百磅なる前貸可變資本が十度回轉することに依つて得られるものは、此五百磅なる資本が十度生産的に消費され得るといふ事でもなく、又五週間分

の可變資本が五十週間に亘つて充用され得るといふ事でもない。寧ろ、五百磅の十倍に相當した可變資本が此五十週間に充用されるのであつて、五百磅なる資本は常にただ五週間分の必要を充たすに足るだけであり、五週間の終末になると、それは新たに生産された五百磅なる資本に依つて代位されるのである。これは資本Aの場合にも、Bの場合にも、等しく行はれる所であるが、然し又此點から兩者の區別が始まるのである。

第一の五週間なる期間の終末には、Aの場合にもBの場合にも、五百磅といふ可變資本が前貸され支出されてゐる。此等の價值は何づれも勞働力に轉化され、此勞働力を以つて新たに造り出した生産物價值の中、五百磅なる前貸可變資本の價值に等しき部分に依つて代位されるのである。此勞働力は單に五百磅なる支出可變資本の價值に代ふるに、それと等額なる新價值を以つてするのみでなく、其上に尙一つの餘剩價值——曩の假定に依れば、同一の大きさを有する所の——を追加するのであつて、此點はAの場合にもBの場合にも差異はないのである。けれどもBの場合には、前貸可變資本を回収し、且つそれに一つの餘剩價值を追

加する所の價值生産物は、新たに又生産資本若くは可變資本として作用し得べき形態を採るものでないが、Aの場合には、それは斯かる形態を採つて存在するのである。而して又一年の終末に到る迄の間、最初の五週間、次いで又他の各五週間に於いて逐次的に支出されたBの可變資本は、新たに生産せる價值（餘剩價值を含む）に依つて代位されるとは云へ、生産資本又は可變資本として新たに作用し得べき形態を採るものではない。此可變資本の價值は、新たなる價值に依つて代位されるものであり、随つて更新されるものであることは事實であるが、然し其價值形態（此場合で言へば、絶對的の價值形態たる貨幣形態）は更新されるものではないのである。

第二の五週間なる期間（續いて又、其後における一年間の各五週間）についても、更らに五百磅を利用し得るやうに準備して置かねばならないことは、第一期間の場合と同様である。即ち信用上の事情は暫く措き、一年の初頭に五千磅なる資本を伏能的な前貸資本として準備して置かねばならぬ。尤も此五千磅は、一年の経過中に漸次現實的に支出され、勞働力に轉化されてゆくのである。

然るにAの代位價值は第一次五週間の經過後に於いて既に、五週間分の新たな労働力を運轉し得る形態、換言すれば本來の貨幣形態を採ることになる。

第二の五週間なる期間に於いては、Aの場合にもBの場合にも、新たな労働力が消費され、この労働力の代價として五百磅といふ新資本が支出される。第一次の五百磅を以つて購買された労働者の生活資料は、最早消滅してしまつたのである。いづれにしても、其價值は資本家の手の中から消失されたことになる。第二次の五百磅を以つて、新たな労働力が購買され、新たな生活資料が市場から引き上げられる。約して言へば、此場合支出されるものは、新たな五百磅であつて舊來の五百磅ではない。けれどもAに於ける此五百磅なる新資本は、曩に支出された五百磅に取つて代はるべき新たに生産された價值の貨幣形態である。然るにBの場合には、此の代位價值は可變資本としては作用し得ざる形態を採つてゐる。それは存在してゐることは事實であるが、然し可變資本なる形態を以つて存在してゐるものではない。されば次の五週間に互つて生産行程を繼續せしむる爲には、五百磅なる追加資本が此場合に缺くべからざる貨幣形態を採つて存在し

且つ前貸されることを要するのである。

かくてAの場合にも、Bの場合にも、五十週間に等額の可變資本が支出され、等量の労働力が購買されて消費されるのであるが、Bに於いては、此労働力の總價值たる五千磅に等しき前貸資本を以つて、其代價が支拂はれぬばならぬに反し、Aに於いては、各五週間に對して前貸された五百磅なる資本の價值に取つて代はるべき各五週間に生産された價值の其都度更新される貨幣形態を以つて、逐次的に右の労働力の代價が支拂はれてゆくのである。随つてAの場合には、五週間分以上の貨幣資本が前貸されることはなく、換言すれば、最初の五週間に前貸された五百磅よりも大なる貨幣資本が前貸されることはないのであつて、此五百磅だけで一年全體の必要を充たすことが出来る。故に労働の搾取程度と現實的の餘剩價值率とが等一であるとするれば、Aの餘剩價值年率とBの餘剩價值年率との比例は、一年間に同一量の労働力を運轉する爲に前貸さねばならぬAの可變貨幣資本量とBの可變貨幣資本量との比例に反對すべきものとなる事は明かである。つまりAの年率は $\frac{5000m}{500v}$ 即ち一〇〇パーセントであり、Bの年率は $\frac{5000m}{5000v}$ 即ち一〇〇パーセ

ントであつて、 $500v:5000v=1:10=100\%:1000\%$ となるのである。

此區別は、回轉期間の差異に基くものである。換言すれば、一定の期間内に充用された可變資本の代位價值が、資本機能を更新し新たなる資本として作用し得る期間の差異に基くものである。同一の期間に充用された可變資本の價值代位はAの場合にもBの場合にも同一である。又同一の期間における餘剩價值の生成も雙方同一である。けれどもBに於いては、五週毎に五百磅なる代位價值と五百磅なる餘剩價值との生ずることは事實であるが、此價值は尙いまだ新なる資本を構成するものではない。なせならば、それは貨幣形態を採つて居らないからである。然るにAの場合には、舊來の資本價值は新たな價值に依つて代位される上に、尙その貨幣形態をも回復する。即ちそれは、作用能力ある新資本に依つて代位されるのである。

代位價值の貨幣化、換言すれば、可變資本として前貸さるべき形態への、代位價值の轉化が、急速に行はれるか、緩慢に行はれるかといふ問題は、餘剩價值の生産それ自身の立場から見れば全く何うでもいい事である。蓋し餘剩價值の生産なるも

のは、充用可變資本の大小と勞働搾取程度の如何とに懸るものであるに反し、上記の事情は寧ろ、一年間に一定量の勞働力を運轉する目的を以つて前貸さるべき可變資本の大小を變化せしむるものであつて、その結果餘剩價值の年率を決定することになるからである。

(三) 社會的見地から觀察した可變資本の回轉

右の問題を暫らく社會的見地から觀察してみよう。一人の勞働者を雇傭するには毎週一磅を要し、而して勞働日は十時間であると假定する。Aの場合にも、Bの場合にも、一年間に一百人の勞働者が雇傭され（けだし一百人に支拂はれる勞銀は毎週一十磅であつて、五週間分は五百磅、五十週間分は五千磅となるからである）。而して其各は一週（六日間）に六十時間勞働する。即ち一百人の勞働者は毎週六千時間勞働する譯であつて、五十週間には三十萬時間勞働する事になる。此勞働力はA及Bの手に抑置され居るものであつて、社會は之れを他の如何なる目的の爲にも支出する事は出来ない。それだけの意味に於いて、Aの場合もBの場合も、社會的見地から觀察すれば差異は無いのである。更らにAもBも、夫々一

百人の労働者に對して一年間に五千磅（即ち合計一萬磅）の賃銀を支拂ふ。かくて此賃銀額に相當しただけの生活資料が、社會の手から取り去られることになる。これだけの意味に於いては矢張り、Aの場合もBの場合も、社會的に見て差異は無いのである。いづれの場合にも、労働者は毎週賃銀を支拂はれるので、随つて毎週社會の手から生活資料を取り去り、又毎週それに相當した貨幣等價を流通内に投ずることになるのである。けれどもまた、この點から兩者の區別が始まつて來る。

即ち第一に、Aの労働者が流通内に投ずる貨幣は、Bの労働者の場合における如く單に彼れの労働力の價値の貨幣形態（實際のところ、既に給付された労働についての支拂要具）たるに止まるものではない。それは又、營業開始後における第二次の回轉期間から計算しても、すでに第一次回轉期間における彼れ自身の價値生産物（労働力の價格プラス餘剩價値）の貨幣形態たるのであつて、第二次回轉期間における彼れの労働の代價は、此價値生産物を以つて支拂はれるのである。所がBに於いてはさうではない。勞銀として支拂はれる貨幣は、Bの労働者に於

いても彼れが既に給付した労働の支拂要具たることは事實であるが、然し此給付された労働は、それ自身に依る貨幣化した價値生産物（それ自身の生産した價値の貨幣形態）を以つて代價を支拂はれるものではない。かゝる支拂が行はれるのは、二年目に入つてからのことで、此とき初めてBの労働者は、彼れ自身の貨幣化した價値生産物（前年に造り出されたる）を以つて賃銀を支拂はれることになるのである。

資本の回轉期間が短小であればある程、随つて又、一年の範圍内に於いて資本再生産期の更新される期間が短縮されるればされる程、最初資本家が貨幣形態を以つて前貸した可變資本は益々迅速に、労働者が此可變資本の補償として造り出した價値生産物（ほかに餘剩價値をも含む）の貨幣形態に轉化され、かくして又資本家が自己の基金中から貨幣を前貸すべき期間は益々短縮され、随つて彼れが前貸する所の資本は、與へられたる生産規模に比較して益々小額となるのである。然し又それに比例して、彼れが與へられたる餘剩價値率を以つて一年間に打出する所の餘剩價値は益々大となる。なせならば、かゝる場合、彼れが労働者自身の造り

出した價值生産物の貨幣形態を以つて新たに此労働者を購買し労働せしめ得る事は、益々頻繁に反覆されるからである。

生産の規模が與へられてゐるとすれば、回轉期間が短縮されるに比例して前貸可變資本（竝に流通資本一般）の絶對量は減少し、餘剩價値の年率は増進する。また再生産期間が短縮されて、その結果餘剩價値の年率が増進するとすれば、前貸資本の大きさが與へられてゐる場合には、同時に生産の規模が擴大され、随つて與へられたる餘剩價値率のもとに於いては、一つの回轉期間に造り出される餘剩價値の絶對量が同時に増大することとなる。以上説くところに依つて、労働の搾取程度が同一である場合、同一量の生産的流通資本と同一量の労働とを運轉する爲に前貸すべき貨幣資本の量は、回轉期間の大小に従つて種々なる差異を來たすといふ總括的の結論が生じて来る。

第二に、又、以上の區別に伴つて左の區別が生じて来る。元來、Aの労働者もBの労働者も、其購買せる生活資料の代價を支拂ふには、彼等の手中に於いて流通要具に轉化した可變資本を以つてするのであつて、彼等は何づれも、例へば小麦を市場

から引き上げるのみでなく、尙また貨幣等價を以つて其位置に代へるのである。けれども、Bの労働者が其生活資料を購買して市場から引き上げる爲に使用する所の貨幣は、一年間に彼れが市場に投じた價值生産物の貨幣形態ではないのであつて、此點はAの労働者の場合とは違ふのである。随つてBの労働者は其生活資料の販賣者に貨幣を供給することは事實であるが、然し斯く供給された貨幣を以つて此販賣者の購買し得る商品——生産機關にしる、生活資料にしる——を供給するものではない。（所がAの労働者は、かゝる商品を供給するのである。即ち労働力や、労働力の爲の生活資料や、Bに於いて充用される労働要具といふ形態を採つた固定資本や、生産材料などが市場から引き上げられ、其補償として貨幣等價が市場に投せられるのであるが、市場から引き上げられた生産資本の素材的要素に取つて代るべき何等の生産物も、一年間を通じて市場に投せられることはないのである。

社會が資本制的ではなく共産制的に組織され居るものとして考へるならば、先づ貨幣資本なるものは悉く消滅に歸し、随つて又貨幣資本に伴ふ取引上の假面も

消滅することになる。かくして問題は單純に次の一點に歸することゝなるのである。即ち例へば鐵道敷設の如き、一年又は一年以上に及ぶ長期間中、生産機關も生活資料も、其他如何なる利用品をも供給することなくして、而も年々の總生産中から勞働や、生産機關や、生活資料などを引き上ぐる營業部門のため、社會は何等の損害をも醸す事なくして幾許の勞働と生産機關と生活資料とを充用し得るかを豫め計算しなければならぬといふ事である。然るに社會的理性が事後に始めて作用する所の資本制社會に在つては、此點に絶えず大なる攪亂が生じ得るものであり、又生じなければならぬのである。即ち一方には金融市場の逼迫が生じて來る。反對に金融市場の緩慢なる場合には又、上述の如き企業が簇々發生して來る。かくして、後に至り金融市場の逼迫を齎らす所の事情が與へられることとなるのである。何ゆえ金融市場の逼迫が生ずるかと云ふに、この場合長期間に亘つて絶えず大規模の貨幣資本前貸をなすことが必要になるからである。これは産業資本家や商人などが自己の營業の執行に必要な貨幣資本をば鐵道投機や其他の方面に投じて、それを償ふために貨幣市場から資本を借り受けて來るとい

ふ事實を全く問題外に置いて、言ひ得ることである。

他方に又、社會の利用し得べき生産資本の上にも逼迫が生じて來る。生産資本の要素は絶えず市場から引き上げられ、其代りに貨幣等價のみが市場に投せられるのであるから、その結果、みづからは何等の供給要素をも齎らす事なき支拂能力ある需要が増進して、生活資料並びに生産材料の價格が昂騰することになる。しかのみならず、かゝる時期には詐偽的計劃が常に行はれて、大規模の資本移轉を招致することになるのである。投機師、請負師、工事設計者、辯護士等の一團は富を得て、それがため強烈なる消費的需要が市場に生じて來る。同時に勞銀は昂騰することになる。その結果、榮養資料について言へば、農業が刺戟を受くるに至ることは言ふ迄もない。けれども此榮養資料なるものは、同一年間に突如増殖し得るものではないから、其輸入は勢ひ増大を來たすことになる。(これは總じて、珈琲、砂糖、葡萄酒などの如き外國產榮養資料や、其他奢侈品などの輸入について見られる所である)。かくして此輸入部面には、超過輸入と投機とが生ずることになるのである。所が生産を急激に増大し得る産業部門(採鑛業や嚴密なる意義の製造業な

ど)に於いては、價格が昂騰すれば生産は突如擴大され、而して此急激なる生産擴大は又懸て崩壊を伴ふものであつて、労働市場は此場合にも同一の影響を受けることになるのである。即ち單に潜伏的なる相對的過剰人口のみではなく、また就業中の労働者までが、簇々新たなる營業部門に吸収されてゆくのである。

總じて鐵道敷設の如き大規模の企業は、労働市場から一定量の労働力を引き上げるに至るものであつて、かゝる労働力は、専ら強壯者のみを使用する所の農業などの如き一定の生産部門に依つてのみ供給され得る。斯様な現象は、新たに起つた企業が既成の經營部門となつて、此企業に必要な流浪的の労働者階級が既に形成された後にも尙引き續き行はれる。これは例へば、既に著手された鐵道敷設が暫行的に平均水準以上の規模を以つて經營される場合などに見られる所である。かゝる場合には、勞銀低下の壓迫原因となつてゐた労働豫備軍の一部は、此産業に依つて吸収され、勞銀は一般に——從來需要の良好であつた労働市場部面に於いてさへも——昂騰して来る。而して此傾向は、營業上の避くべからざる逼迫に依つて労働豫備軍が再遊離せしめられ、かくして勞銀が其最低水準又はそれ以

下の點に低減せしめらるゝに至るまで持續するものである(三十二)。

(三十二) マルクスの草稿には、將來における手入れの參考として此所に次の註が挿入されてゐる。「資本制生産方法の矛盾——商品の購買者といふ方面から見た労働者は市場にさつて重要なものであるが、商品(労働力)の販賣者といふ方面から見た労働者は、資本制社會のまさに於いては最低の價格水準に低下せしめられる傾きがある。更らに又、斯う云ふ矛盾もある。——資本制生産が全力を傾倒する時代は、つれに過剰生産の時代たる結果を見るものである。蓋し、生産上の能力なるものは、より多くの價値を生産するのみではたく又實現することの出来る程度まで利用され得ることはないからである。然るに商品の販賣、換言すれば、商品資本隨つて又餘剩價値の實現なるものは、社會全般の消費的需要に依つて制限されるものではなく、寧ろ成員の大多數が常に貧困であり又あらねばならぬことを特徴とする一社會の消費的需要に依つて制限されるのである。然し此問題の攻究は次篇に譲ることとする。」

回轉期間の長短といふことは、それが嚴密の意義における労働期間、即ち生産物を市場で取引し得る迄に完成するに必要な時間の如何に依つて左右される限り種々なる投資における各場合に與へられた物的生産條件を基礎とするものである。而して此生産條件は、農業の内部に於いては寧ろ生産の自然條件たる性質を有し、製造業と抽出的産業の大部分とに於いては、生産行程その者の社會的發達の

如何に依つて變動するものである。

労働期間の長短が配送の大小（即ち生産物が通常商品として市場に投せられる量的範囲の大小）を基礎とする限りについて言へば、かゝる事實は習俗的の性質を有するものである。けれども習俗その者は又生産の規模を物質的基礎とするものであつて、ただ個別的に観察した場合にのみ、それは偶然的のものと思はれるのである。

最後に、回轉期間の長短が流通期間の長短に懸る限り、市況の間斷なき變動や、販賣上の難易や、又その結果として生産物の一部を遠近いづれかの市場に投ずることが必要になるといふ事實などが、一部分に決定條件となることは確かである。需要全般の大小を問題外に置いて考へるならば、此場合には價格の騰落運動といふ事が主なる役割を演ずる。蓋し價格の低落せる場合には、生産が進行を續けてゐるとき、販賣は故意に制限されるのであるが、反對に價格の昂騰せる場合には、生産と販賣とは歩調を揃へて進むものであり、或は又豫め販賣を行ふことも可能であるからである。けれども、此問題に對する眞の物質的基礎と目すべきものは、生

産場所と販路との間における現實的の距離如何といふ問題である。

一例として、英國製の綿織物又は綿絲が印度に販賣される場合を考へて見る。この場合、英吉利の木綿製造業者は、輸出商人から支拂を受けるであらう。（輸出商人は金融市場の好況なる場合にのみ進んでこの支拂をなすのであつて、製造業者自身が其貨幣資本に代ふるに信用取引を以つてするやうになると、事態は早くも悲境に瀕して來るのである）。輸出商人は後に及んで、其の木綿品を印度市場に販賣する。彼れの前貸資本は、此市場から回流して來るのである。斯くの如き回流が行はれる迄の間における事態は、與へられたる規模の下に生産行程を進行せしむるに當り、新たに貨幣資本を前貸することが、労働期間の繼續上必要になる場合と全く同様のものである。製造業者が其労働者に對する賃銀の支拂と、流通資本の他の諸要素の更新とに使用する所の貨幣資本は、彼れの製造する綿絲の貨幣形態化したものではない。それが斯く貨幣形態化するのには、製造綿絲の價值が貨幣又は生産物の形を採つて英吉利に回流し來たとき初めて行はれ得ることである。右の貨幣資本は、曩の場合における如く矢張り追加貨幣資本たるものである。

つて、ただ異なる所は、此場合には製造業者ではなく商人がそれを前貸するといふ一點のみである。而して此貨幣資本が商人の手に入ること、また恐らく信用取引に依る所であらう。同様に、此貨幣が市場に投せられる以前、又はそれと時を等しうしては、同一の貨幣を以つて購買され、かくして生産的乃至個人的消費に入り得る所の追加生産物は英吉利の市場に投せられるものではないのであつて、かゝる状態が長期間に互り大規模に持続するとすれば、曩に述べた労働期間延長の場合と同一の結果が生じなければならぬことになる。

所で印度に於いても、同様に綿絲が信用販賣される場合は生じ得るのであつて、斯様な場合には同一の信用を以つて、印度で生産物を購買し、それを英吉利に返送するか、又は當該金額に相當した爲替手形を以つて英吉利に送金するのである。此状態が長引くことになる、印度の金融市場は壓迫を受け、其反應作用に依つて英吉利にも恐慌が生じ得る。而して此恐慌は又、印度への貴金屬輸出を伴ふ場合にも、印度國內に新たななる恐慌を喚び起すに至るものであるが、かゝる現象の生ずるは、畢竟英吉利の商店と印度における其支店——印度の銀行に依つて信用を興

へられてゐる所の——とが破産する結果である。かくして貿易の差額が逆である市場と、順である市場との雙方が同時に恐慌の襲來を定けることになる。此現象は更らに一層複雑のものとなり得るのである。英吉利から地金銀が印度に輸送される場合の如きは其一例である。この場合、印度に對する英吉利の債權者たちは、今や印度國內に於いて其債務を取り立てるので、印度に到着した地金銀は懸て又英吉利に返送されねばならぬことになるであらう。

印度からの輸入貿易の範圍が（棉花騰貴などの如き特殊の事情を除き）印度への輸出貿易に依つて決定され刺戟されるに拘らず、此輸出入の雙方が殆んど平均に歸するといふ場合も生じ得る。かゝる場合には、英吉利及び印度間に於ける貿易の差額は平均に歸したかの如く見えるか、又は何づれか一方に對する微弱な動搖を示し得るに過ぎないのである。けれども英吉利に恐慌が襲來するや否や一方には賣れ残りの（換言すれば、商品資本から貨幣資本に轉化することなく、随つて過剰生産を意味する所の）木綿品が印度に山積してゐると同時に、他方に又英國内には、印度生産物の賣れ残りが山積してゐるのみでなく、すでに販賣され消

費された生産物について言へば、其少なからざる部分は尙未だ毫も代價を支拂はれてゐないといふ事實が明かになつて来る。要するに、金融市場における恐慌として現はれる所のは、實際のところ、生産行程並びに再生産行程それ自身における變則的狀態を言ひ現はすものである。

第三に、充用流通資本そのもの（可變分と不變分との雙方を含む）に就いて言へば、労働期間の長短に起因する方面から見た回轉期間の長短は、次の差異を齎すものである。即ち一年間に何度も回轉の行はれる場合には、可變資本乃至不變流通資本の一要素は、石炭の生産や、裁縫業などに於いて見られる如く、それ自身の生産物を以つて供給され得るものであるが、然らざる場合には——少なくとも同一年内に就いて言ふ限り——かゝる供給は行はれ得るものではないと云ふ事である。

第十七章 餘剩價値の流通

一年間に造り出される餘剩價値量は不變であるとしても、回轉期間の如何に依つて餘剩價値の年率に差異の生ずることは、既に述べた通りである。

が、そのみでなく、餘剩價値の資本化、換言すれば資本の蓄積の上にも必然的に差異が生じ、随つて又——餘剩價値率は不變であると假定して——一年間に造り出される餘剩價値量の上にも差異が生じて来る。

所で、我々は先づ斯ういふ事實を認める。即ち前章の例解に假定したAなる資本は、周期的の時下収入を有するものであつて、營業開始當時における回轉期間を除いて考へるならば、爾後一年間の消費については、之れを特別の基金中から支辨することなく、産出餘剩價値の中から支辨するといふ事である。反對に、Bなる資本の場合には、斯様な基金が必要になつて来る。同一の期間について言へば、此資本も亦Aに依つて産出される所と同一量の餘剩價値を産出することは事實である。然し此餘剩價値は實現さるゝに至らず、随つて個人的にも生産的にも消費さ

れ得ないのである。個人的消費について言ふ限り、剰余価値は豫め支出されるものであつて、其目的のために基金を前貸することが必要になるのである。

生産資本中の分類困難なる一部、即ち固定資本の修繕及保存に要する追加資本も亦、今や新たななる色彩を採つて現はれる。

この資本部分の全部或は少なくとも大部分は、Aの場合には生産の開始當時に前貸されるものではない。かゝる資本部分は利用し得べきものであることを要せず、甚しきは存在することを要しないのである。それは剰余価値を直接資本に轉化せしむることに依り、換言すれば剰余価値を直接資本として充用することに依つて、營業それ自身の中から生じて來るのである。即ち一年間に時を切つて生産され且つ實現される剰余価値の一部が、修繕其他の目的に必要な費用の支辨に充用され得るのであつて、營業を其本來の規模通りに執行してゆく上に必要な資本の一部は、斯様にして營業の持続中剰余価値の一部を資本化する事に依り、營業それ自身の中から造り出されることになるのである。

然し之れは、Bなる資本家にとつては不可能な事である。此資本家にとつては

問題の資本部分は本來前貸された資本の一部でなくてはならぬ。勿論、此資本部分は、Aの場合にもBの場合にも、前貸資本として資本家の帳簿に記入される。それは事實に於いても、斯様な前貸資本として作用するのである。蓋し我々の假定したところに依れば、それは與へられたる規模を以つて營業を執行してゆく上に必要な生産資本の一部であるからである。けれども此資本部分は果して如何なる基金の中から前貸されるか、それに依つて大なる區別が生じて來るのである。Bの場合には、それは現實に於いて、最初前貸すべき、又は利用し得る形に準備し置くべき資本の一部であるが、Aの場合に於けるそれは、寧ろ剰余価値の一部が資本として充用されたものである。この後の事實に依つて我々は、蓄積された資本のみではなく、最初前貸された資本の一部も亦、資本化された剰余価値に過ぎないといふ場合の在り得ることを教へられるのである。

信用の發達といふ現象が介在するやうになると、最初前貸された資本と資本化された剰余価値との關係は更らに複雑なものとなつて來る。例へば、Aは其營業を開始し、又はそれを一年間繼續せしむる爲に必要な生産資本の一部をCなる

銀行業者から借り受ける。彼れは其營業の執行に充分なる自己の資本を最初から所有して居ないのである。Cなる銀行業者は、D E F其他の産業資本家に依つて預入された餘剩價值より成る一つの貨幣額をAに貸し付ける。Aから見れば蓄積された資本のことは尙いまだ問題とならないのであるが、D E F其他の資本家にとつては、Aなる資本家は實際のところ、彼等の占有した餘剩價值を資本化する所の代理人に外ならないのである。

資本の蓄積、換言すれば餘剩價值の資本化は、之れを其實質的方面から見れば、規模の擴大された再生産行程——此擴大が舊來の工場に新たなる工場を追加するといふ外延的の形に言ひ現はされるにしろ、又は從來の經營規模の内包的擴張といふ形に言ひ現はされるにしろ——であることは、第一卷第二十二章に述べた通りである。

生産規模の擴大は、充用労働の生産力を増進せしめるといふだけの範囲内に止まる諸改善、又は同時にそれを内包的にも利用することを得せしむる諸改善の爲に、餘剩價值の一部を充用するといふ方法に依つて、少量づゝ進行し得るものであ

る。或は又、法律上労働日の制限されて居らぬ所に在つては、生産規模を擴大する爲に固定資本を増大せずして、流通資本（生産材料と労働者に使用すべき）の支出を追加して行けばいいのである。斯様な場合には、固定資本の日々の使用時間が延長されるだけであつて、固定資本の回轉期間は寧ろそれに應じて短縮されることになる。或は又、市況の良好なる場合について言へば、資本化された餘剩價值は原料に關する投機——此目的の爲には、最初前貸された資本のみでは充分でないであらう——を可能ならしむるものである。（以下準す）。

けれども、回轉期間が數多く反覆されるに伴つて、一年間に於ける餘剩價值の實現も亦頻々と行はれるやうになる所では、労働日を延長することも個々の改善を施すことも共に不可能となる時期に達著することは明かである。他方に又、一部分的には營業の全計劃例へば建物の如きを改造することに依り、一部分には更らに——農業上に行はるゝ如く——労働基金を擴大することに依つて、全營業を均衡した規模に擴張してゆくことは、大なり小なりの範圍を有する一定の限界内に於いてのみ可能なるものであり、且つ此目的のためには多年に互る餘剩價值の蓄積

を以つてするのほかは供給し得ざる如き追加資本量を必要とすることも明かな事實である。

かくの如く、現實的の蓄積、即ち餘剩價值の生産資本化（及それに應當せる規模の擴大された再生産）と竝んで、貨幣の蓄積が行はれることになる。換言すれば一定の程度に達したとき初めて現實的の追加資本たる機能を盡すべき伏能的貨幣資本として、餘剩價值の一部が蓄積されることになるのである。

個々の資本家の立場から見れば問題は右の如くに表現されるのであるが、資本制生産の發達と同時に又信用制度が發達して来る。かくて尙いまだ資本家自身の營業に充用し得ざる貨幣資本は、他の資本家たちに依つて充用されることになり、之れが報酬として前者は後者から利子の支拂を受けるのである。此貨幣資本は、前者にとつては特殊の意義における貨幣資本、即ち生産資本から區別された種類の一資本たる機能を盡すものである。然しそれが資本として作用するのは、他人の手で行はれることである。餘剩價值の實現が頻繁に行はれ、餘剩價值の產出される規模が上進するにつれて、新たな貨幣資本即ち資本としての貨幣が貨幣

市場に投せられ、而して其主要の部分だけでも此市場から更らに又擴大された生産の爲に吸收されてゆく比例も増進するに至ることは明かである。

斯様な伏能的の追加貨幣資本を表現し得る最單純の形態は、即ち退藏貨幣なる形態である。此退藏貨幣が、貴金屬產出國との間の交換に依つて直接又は間接に確保される追加的の金又は銀に依つて代表されることも可能である。一國內の退藏貨幣は、かゝる場合にのみ絶對的の増大を來たすことになるのである。他方に又、此退藏貨幣は、國內の流通から引き上げられた貨幣が個々の資本家の手の中で退藏貨幣なる形態を採つたものに外ならないといふ場合も生じ得る。斯様な場合が一番多いのである。更らに右の伏能的貨幣資本が、單なる價值表章——この場合、信用貨幣のことは問題外に置く——又は資本家が第三者に對して有する法定文書に依つて確證された單なる請求權（權利名義）に外ならないといふ場合も可能である。此等すべての場合を通じて右の追加的貨幣資本は、其存在形態の如何を問はず、それが豫期の資本である限りは、將來與へらるべき社會の追加的な年生産について資本家の有する、追加的の且つ準備状態に置かれた權利名義以

外の何ものでもないのである。

『現實的に蓄積された富の量は、之れを其大小の上から見れば……此富の所屬する社會——それが如何なる文明段階に在るにしろ——の生産力に比し極めて微々たるものである。それは又、僅か數年間における此社會の現實的消費に比較しても、至つて微々たるものとなるのである。そこで立法者並びに經濟學者の注意は、主として生産力と其將來における自由なる發達との上に向けらるべきであつて、從來なされたる如く、人目を驚かす所の單なる蓄積された富の上に向けらるべきではない。……蓄積された富と稱せらるゝ所の者の極めて大部分は、單に名目上だけのものであつて、現實物たる船舶や、家屋や、木綿品や、土地に施された改善なごから成るものではなく、單なる權利名義、即ち將來與へらるべき社會の年産生力に對する請求權——保障なき計劃又は制度に依つて造り出され且つ永久化された權利名義——から成るものである。……かゝる物件（蓄積された有形物即ち現實的の富）をば將來における社會の生産力に依つて初めて造り出さるべき富を占有せんが爲の單なる手段として使用する權利は、何等の強力を用ゐることな

く、分配の自然律に依つて次第に其物件所有者たる人々の手から取上げられることになる。彼等は共同組合的勞働の力に依つて、數年を出でざる中に此使用權を剝脱されることになるであらう』（ウヰリアム・タムソン 『富の分配原理に關する研究』倫敦一八五〇年刊、第四五三頁。此書は最初一八二七年に刊行されたものである）。

『社會の現實的蓄積なるものは、之れを人類の生産力に比すれば——甚しきは又僅々數年間における人類一代の通例の消費に比較してさへさうであるが——量の上から見ても、效力の上から見ても、如何に微々たるものであるかは、殆んど理解せられざる所であり、又大抵の人々に依つては想像だにされてゐないのである。之れが理由は明々白々である。而も其影響する所は極めて有害なのである。年々消費される富は、使用されると同時に消滅する。それは僅かに一瞬間我々の眼前に存在するだけであつて、我々がそれを享樂し消費してゐる時以外には印象を與ふるものではないのである。然し又富といふ中には、たゞ徐々にのみ消費し得る部分も含まれてゐるのであつて、家具や、機械や、建物などは即ちそれであるが、此

等の物は我々の幼時から老年期に至るまで絶えず眼前に存在するものであつて人間努力の永續的記念碑たるのである。社會的富の中の、かゝる固定永續的な、ただ徐々にもみ消費される部分、即ち土地や、勞働を受ける原料や、勞働する爲の器具や、勞働中風雨を防ぐところの家屋などを所有することに依つて、其所有者たる人は——假令、これらの物が右の勞働の不斷反覆的な生産物に比し極めて微々たるものであり得るとは云へ——社會における凡らゆる現實的生產勞働者の年生産力を支配するといふ利益を與へられるのである。大英國及び愛蘭の人口は二千萬であつて、各成年男女並びに兒童の消費は平均約二十磅であるから、年に消費される勞働生産物は合計四億萬磅に達する譯である。これ等の諸國における蓄積資本として計算された總額は、十二億（即ち一年間における勞働生産物の三倍）を超過するものではない。之れを平等に割り當てる、一人當りの蓄積資本は六十磅となる。而して茲では斯かる計算額の多かれ少なかれ不正確なる絶對量よりも、寧ろ富と生産力との比例の方が問題となるのである。此資本の利子について言へば、それは一年の中約二個月間、現在の儘の生活状態のもとに人口の總てを

維持してゆくに充分であらう。又蓄積された總資本その者について言へば、それは（購買者を見出し得る限り）全三年間に互り人口の總てを無勞働にて生存せしめ得るであらう！此期間の終末になると、人口の總ては衣食住なくして餓死するに至るか、然らずんば右の三年間、彼等の生存を維持せしめた人々の奴隸とならねばならぬであらう。最富裕國について見ても、その現實的の富、換言すれば蓄積された資本の大きさと重要とが、その生産力、換言すれば人類一代の生産力に對して——均等の保障を與へる巧妙に仕組まれた制度の下に、特に共同組合的の勞働に依つて、彼等の生産し得るであらう所の物に對しては、はななく、寧ろ保障なき、不完全にして且つ意氣阻喪的なる姑息策の下に、彼等が現實に於いて生産する所の物に對して——有する比例は、三年といふ期間が壯健なる人類一代の生存期間（即ち四十年）に對して有する比例の如くである！……而して表面莫大の量に達してゐる如く見えるこの現存資本を、或は寧ろ年々の勞働生産物に對する管理と獨占とを、強制的割り當の現状の儘に維持する爲には、此仕組の全體を構成する所の惡徳や、犯罪や、無保障に伴ふ苦痛などを永久に保存せしめる事が必要である。

必要なる欲望を先づ充足せしめずしては何物も蓄積され得るものではない。而して人の願望の大なる潮流は、享樂を求めて走るものである。さればこそ、如何なる瞬間を採つて見ても、社會における現實的富の量は比較的微々たるものとなるのである。要するに、生産と消費との永久止むことなき循環が行はれるのであつて、一年間における此巨額の生産及び消費に比すれば、僅かばかりの現實的蓄積などは殆んど問題とならないのであるが、而も尙世人の主なる注意の的となるものは、かの多大なる生産力ではなくて寧ろこの僅少なる蓄積資本である。けれどもこの僅少なる蓄積資本は僅々數人の手に占有されてゐるのであつて、大多數の人の勞働が年々絶えず齎らす所の生産物を占有すべき要具に轉化されるのである。随つて此要具は、かゝる少數の人々にとつては決定的に重要なものとなるのである。……國民的生産物の約三分の一は、今や公税なる名義のもとに生産者の手から取り去られ、其等價たるべき何物をも、換言すれば生産者が等價として承認すべき何物をも提供せざる人々に依つて、不生産的に消費されることになつてゐる。……群集は驚きの眼を以つて、蓄積された富を眺める。而して此傾向は、富が

少數の人々の手に集積されてゐる場合には特に著しく現はれるのである。けれども年々造り出される生産物の量は、大河の永久止むことなき無數の波浪と同様に、絶えず波動しつゝ忘れられた消費の大洋中に消滅し去るのである。而も永久絶ゆることなき此消費は、單に凡らゆる享樂を決定するのみではなく、又人類の生存その者をも決定するのであつて、先づ第一に研究の對象となるべきものは、かゝる年生産物の量と分配とでなくてはならぬ。現實的の蓄積は寧ろ、第二義的に重要なものに過ぎないのであつて、此重要でさへも殆んど、年生産物の分配に及ぼす影響に依つてのみ得られるのである。……現實的の蓄積及分配は、茲（タムソンの著書）では常に生産力に關聯し從屬したものとしてみ之れを考察するのであるが、他の殆んど總ての學者の説に於いては、生産力の方が却つて蓄積と現存せる分配方法の永久化とに關聯し從屬したものとしてみ之れを考察されてゐた。かゝる分配方法の維持に比較すれば、全人類の不斷反覆さるゝ窮乏又は福祉の如きは、一顧の價なきききと見做されてゐたのである。彼等は暴力と、詐偽と、偶然とに伴ふ結果を永久に保存する目的を以つて右の事實を保障と呼び、而して此虚偽の保障を

維持する目的の爲に、人類の全生産力をば容赦なく犠牲に供してしまつたのである』(前掲第四四〇——四四三頁)。

與へられたる規模における再生産をも阻止する所の、諸種の妨害を問題外に置いて考へるならば、再生産について可能なる正常の場合には二つしか無いことになる。

即ち單純なる規模における再生産の行はれる場合か、又は餘剩價値の資本化、換言すれば資本蓄積の行はれる場合かの、いづれか一方のみが可能なのである。

(一) 單純なる再生産

單純なる再生産の場合には、一年毎に、又は——一年間に數度の回轉が行はれるとすれば——周期的に産出され實現される餘剩價値は、其所有者たる資本家に依つて個人的に、換言すれば不生産的に消費される。

生産物價値の一部は餘剩價値より成り、他の一部は、生産物價値を通して再生産される可變資本と生産物價値の爲に消費された不變資本との和に等しき價値部

が少ない。然し同時に多數の生徒に對する教授に於て發問により全體の生徒を活動せしめようとする時には、個々の生徒に其の考察に必要な時間を與へることが困難であり、従つて慎重に考慮する習慣の養成に缺くる所あるを免れぬ。故に生徒に其の連続した行動作業を要求する課題を與へることは此の點から見ても層有效である。

課題を與へて之を成就し解決せしめることは別に新らしい方法ではないが、唯學んだ所のものゝ反復でなく、新たに考察し推理することを要する問題の付與を貴重するやうになつたのは發展法の採用と共に近世に於ける教育法改良の運動に由るものである。殊に最近に於ては創作の働を進める目的で諸種の作業に従事せしめ、自力により之を成就せしめようとする傾を生じ、更に進んで自學の獎勵となり、生徒自身が問題を選択し、或は図書室に於て、或は工作場に於て、或は實驗室に於て、自ら調査し、考察し、試験することの必要を高唱するやうになつた。之は大體に於て正常な傾向であるけれども、程度の如何を顧みないで極端な主張をなし、殆ど教師を要しないものゝやうに考へるのは固より不當である。兒童は次第に多く自學の習慣を得るやうに導かれねばならぬ、最初から全く自ら問題を選定し

存在する金屬貨幣の量は、單に商品を流通せしむるに充分でなくてはならぬのみでなく、尙また一部分には流通速度の動搖に基き、一部分には商品の價格變動に基き、一部分には更らに貨幣が支拂要具又は嚴密の意義における流通要具として作用する比例の差異及變化に基き、その流通貨幣の動搖についても充分でなくてはならぬ。現存貨幣量が退藏貨幣と流通貨幣とに分割される比例は絶えず變化してゐるけれども、貨幣の量は常に、退藏貨幣として存在する分と流通貨幣として存在する分の和に等しいのである。而して此貨幣量（貴金屬の量）なる者は、要するに漸を逐ふて蓄積された社會の退藏貨幣に外ならないのである。かかる退藏貨幣の一部は、それが磨滅に依つて消耗される限り、他の總ての生産物と同様に年々新たに補償されねばならぬ。これは現實に於いては、一國における年生産物の一部をば金銀産出國の生産物と直接又は間接に交換することに依つて行はれる事である。然るに取引上の斯かる國際的性質は、取引の單純なる経過を隠蔽するものである。そこで問題を其最も單純にして透徹したる言ひ現はしに約元する爲には、金銀の生産が自國內に於いて行はれ、かくして金銀の生産は自國內

に於ける社會的總生産の一部たるに至るものと假定することが必要になつて來る。

奢侈品用として生産される金銀を問題外に置いて考へるならば、金銀年生産の最低限は、年々の貨幣流通に基く貨幣金屬の磨滅量に等しくなくてはならぬ。尙また、年々生産され流通せしめられる商品量の價值高が増大するとすれば、かかる場合には、流通商品の價值高の増大と、この商品の流通（及それに應當した貨幣退藏）に必要な貨幣量とが、貨幣流通の速力増進と貨幣が支拂要具として盡す機能の擴大（換言すれば、現實的貨幣の媒介に依らざる賣買の相互清算の増進）とに依つて償はれるとなき限り、金銀の年生産も亦同様に増大しなければならぬ。かくて金銀の生産上、年々社會的勞働力の一部と社會的生産機關の一部とを支出することが必要になつて來る。

金銀の生産をば、茲に假定する單純なる再生産のもとに考へられる如く、年々の平均磨滅と、それに基く金銀の年平均消費との限界内に於てのみ經營する所の資本家たちは、その餘剩價值——我々の假定する所に依れば彼等は之れを毫も資本

化することなく、年々消費してしまふのであるが——をば、彼等から見れば生産物の現物形態であつて、他の生産部門における如く轉化したる生産物形態ではない貨幣形態のまゝ直接流通内に投するのである。

更らに、可變資本の依つて前貸さるべき貨幣形態である勞銀について見ても、それは此場合やはり生産物の販賣、換言すれば生産物の貨幣化に依つて補償されるものではなく、寧ろ最初より貨幣形態を現物形態とする所の生産物に依つて補償されるのである。

最後に時を切つて消費される不變資本（不變流通資本と一年間に消費される不變固定資本との雙方）の價值に等しき貴金屬生産物部分についても、同一の事が言ひ得るのである。

貴金屬の生産に投せられた資本の循環又は回轉をば、先づG—W……P……Gなる形態について觀察して見よう。G—WにおけるWが單に勞働力及び生産機關から成るのみではなく、またPに於いて價值の一部だけを消費される所の固定資本からも成るものである限り、生産物たるGは、勞銀の支拂に投せられた可變資本と

生産機關に投せられた流通不變資本と、磨滅した固定資本の價值部分と、餘剩價值との和に等しき一つの貨幣額である事は明かである。金の一般的價值に變化なき場合、Gが右の貨幣額よりも小であることすれば、鑛山投資は不生産的であつたことになる。或はまた、此現象が普遍的に行はれることすれば、金は價值不變なる諸商品に比して將來價值の増勝を來たすことになるであらう。換言すれば、諸商品の價格は低落して、G—Wに投せられる貨幣額は將來に於いてはより小なるであらう。

先づG—W……P……Gの起點Gとして前貸された資本の流通部分のみについて見れば、此場合には勞働力の代價を支拂ひ生産材料を購買する爲に、一定の貨幣額が前貸されて流通内に投せられることになる。けれども斯様な貨幣額は、此資本の循環に依つて再び流通内から引き上げられ、かくして又新たに流通内に投せられるものではない。生産物は其現物形態の儘で既に貨幣である。随つてそれは、交換に依り、流通行程に依つて、初めて貨幣に轉化されることを要するものではないのである。それは貨幣資本に轉化される所の商品資本なる形態を以つて、生

産行程から流通部面に移行行くものではなく、寧ろ生産資本に再轉化される所の貨幣資本、換言すれば、新たに勞働力と生産材料とを購買すべき貨幣資本として斯く流通部面に移動して行くのである。勞働力及び生産機關として消費される流通資本の貨幣形態は、生産物の販賣に依つて回復されるものではなく、寧ろ生産物それ自身の現物形態に依つて回復されるのである。語を換へて云へば、此回復は右の資本の價值が貨幣形態を以つて更らに流通内から引き上げられることに依つて行はれるものではなく、寧ろ追加的の、新たに生産された貨幣に依つて行はれるのである。

流通資本は五百磅、回轉期間は五週間、而して勞働期間は四週間、流通期間は僅かに一週間であると假定しよう。此五週間に要する貨幣の一部は最初より生産貯藏として前貸され、他の一部は又最初より、漸次に勞銀として拂出すべく準備して置かれなければならぬ。六週目の初めには、四百磅が回流して一百磅が遊離されてゐることになる。此行程は間斷なく反覆されるのである。曩の場合に於ける如く、此場合にも亦、回轉の或る期間中には絶えず一百磅といふ貨幣額が遊離され

た形態を採つて存在する。けれども此一百磅は、追加的の新たに生産された貨幣から成るものであつて、その意味に於いては他の四百磅と毫も異ならないのである。此場合一年間の回轉數は十であり、而して一年間に造り出される生産物は五千磅の金である。(流通期間なるものは此場合、商品の貨幣化に要する期間に依つてではなく、寧ろ貨幣の生産要素化に要する期間に依つて與へられるのである)。

右と同一なる條件のもとに回轉する他の總ての五百磅なる資本に在つては、不斷に更新される貨幣形態は寧ろ産出商品資本の採る轉化した形態である。此商品資本は四週毎に流通内に投せられるものであつて、それは他人の手に販賣されることに依り、換言すれば最初それが行程の中に入つた當時の形態である貨幣量を周期的に流通内から引き上げることによつて、絶えず新たに貨幣形態を與へられるのである。然るに茲に問題となる場合に在つては、回轉期間毎に五百磅といふ新たなる追加貨幣量が生産行程それ自身の中から流通の内部に投せられ、其處から絶えず生産材料と勞働力とを引き上げるのであつて、流通内に投せられる斯くの如き貨幣は、此資本の循環に依つて更らに流通の内部から引き上げられるもの

ではなく、寧ろ絶えず新たに産出される金の量に依つて増殖せしめられることになるのである。

今、此流通資本の可變部分を觀察し、而してそれが曩の場合に於ける如く一百磅に等しいと假定すれば、通例の商品生産に於いて此一百磅は——一年に十度の回轉が行はれるものとして——絶えず労働力の代價を支拂ふに充分であらう。貨幣生産の行はれる現在の場合に於いても、矢張り之れだけの可變資本で充分である。けれども五週毎に労働力の代價として支拂はれる右の一百磅なる回流貨幣は、此場合には轉化した生産物形態ではなく、寧ろ不斷に更新される生産物その物の一部たるのである。金の生産者は、その使用労働者自身に依り生産された金の一部を以つて直接に労働力の代價を支拂ふ。随つて年々斯く労働力の購買に放下せられ、労働者に依つて流通内に投せられる一千磅なる資本は、流通に依つて其起點に復歸するものとはならないのである。

更らに、固定資本の場合になると、營業開始の際より大なる貨幣資本の支出を要するのであつて、此貨幣資本は流通内に投せられることとなるのである。それは

年経るうちに断片的にのみ回流し來たるものであつて、此點は總ての固定資本に共通する所であるが、然し茲に固定資本として支出される貨幣資本は生産物たる金の直接の断片として回流し來たるものであつて、生産物が販賣されて貨幣となる結果回流し來たるものではない。即ちそれは、流通内から貨幣を引き上げることに依つてではなく、寧ろ回流に相應した生産物部分を累積することに依つて、次第に貨幣形態を與へられるのである。斯様にして回収される貨幣資本は、最初固定資本として流通内に投せられた貨幣額を償ふ目的を以つて、次第に流通内から引き上げられる所の貨幣額を意味するものではない。それは追加的の貨幣量を意味するのである。

最後に餘剩價値について言へば、之れまた新たな金生産物の一部である。この金生産物部分は、新たな回轉期間毎に流通内に投せられるものであつて、我々の假定した所に依れば不生産的に、即ち生活資料並びに奢侈品の代價として支出されることになるのである。

一年間に與へられる斯くの如き金生産は、労働力と生産材料とを不斷に市場か

ら引き上げしめるけれども貨幣を引き上げしめることなく、寧ろ絶えず追加貨幣を市場に供給して行くものであるが、曩の假定に依ると、此金生産の全部は、一年間に磨滅する所の貨幣を補償する上に役立つのみである。換言すればそれは、比率の點に異同はあるにしろ兎にかく絶えず退藏貨幣並びに流通貨幣なる二形態を採つて存在する社會的貨幣量をば、缺くる所なく保存せしめることに役立つのみである。

商品流通の法則に従へば、貨幣量なるものは流通に必要な貨幣量と、退藏貨幣の形態を採つた貨幣量との和に等しくなくてはならぬ。而して此後ちの貨幣量は、流通の伸縮如何に應じて増減を來たし、特に又支拂要件について必要な準備金の形成に役立つものである。各支拂間の相殺が行はれないと假定する限り、貨幣を以つて支拂はれねばならぬ所のものは即ち商品の價值である。此價值の一部が餘剩價值より成るものであつて、商品の販賣者に何等の費用をも負擔せしめないといふ事實は、問題の上に些かも影響する所はないのである。假りに、生産者が何づれも其生産機關の獨立した所有者であり、隨つて流通は直接生産に従事す

る人々自身の間に行はれるものとして見る。然る場合——彼等の資本の不變分は暫く措き——年々與へられる彼等の餘剩生産物は、資本制状態のもとに於ける如く矢張り二つの部分に分割し得るであらう。即ち單に彼等の生活必需品を補償するだけのaなる部分と、一部的には奢侈品の爲に消費され、一部的には又生産の擴張に充用されるbなる部分とである。この場合、aなる部分は可變資本を代表し、bなる部分は餘剩價值を代表する事になる。然し斯様な區分は、彼等の總生産物の流通に要する貨幣量の大小の上には些かも影響する所はないであらう。他の事情に變化なき限り、流通商品量の價值は不變であり、隨つて又此價值の爲に要する貨幣量も不變であらう。尙また、回轉期間の區分に差異なき限り、彼等は資本制生産の場合における同一の貨幣準備を有さなければならぬであらう。換言すれば同一の資本部分をば絶えず貨幣形態のもとに保存することを要するであらう。蓋し我々の假定する所に依れば、彼等の生産も亦商品生産たることに變りはないからである。かくの如く、商品價值の一部が餘剩價值より成るといふ事實は、營業の進行上に必要な貨幣量の上に何等の變化をも與ふるものではない

いのである。

トツクの反對論者にしての——M——なる形式を固守する或學者は、トツクに問ふて言ふ。——然らば資本家は如何にして、流通内に投ずるよりも多量の貨幣を絶えず流通内から引き上げ得るのであるかと。よく注意せよ。茲では餘剰價値の形成といふことが問題なのではない。此問題は唯一の秘密を構成する所のものであるが、資本制度の立場から見ればそれは自明の事柄である。充用價値量は餘剰價値を以つて増殖せしめられない限り、資本たるものではないであらう。然るに我々の假定する所に依れば、此價値量は資本なのであるから、餘剰價値の問題は自明の事實となるのである。

即ち問題は、餘剰價値が何處から來るか云ふことではなく、餘剰價値の轉化せらるべき貨幣が何處から來るか云ふことである。

然るにブルジョアの經濟學に於いては、餘剰價値の存在は自明のものとしてゐる。單に餘剰價値の存在が假定されてゐるのみではなく、それと共に又、流通内に投せられる商品量の一部は餘剰生産物より成る者であつて、資本家の資本とし

ては流通内に投せられなかつた價値を代表するといふ假定も與へられてゐる。即ち資本家は其生産物を以つて資本以上に出づる超過價値をも流通内に投じ、更に之れを流通内から引き上げるといふ事が同時に假定されてゐるのである。

資本家が流通内に投ずる商品資本は、彼れが勞働力及び生産機關として流通内から引き上げた生産資本よりも大なる價値を有してゐる。(此事實が果して何處より來たるかは、ブルジョアの經濟學の説明せざるところであり、又理解せざるところであつて、それは一つの完成されたる事實と見做されてゐるのである)。かかる前提を以つてすれば、單にAなる資本家のみではなく、更らにBCD其他の資本家も亦、其商品の交換に依つて、彼等が最初に且つ絶えず新たに前貸した資本の價値よりも大なる價値を、何故不斷に流通内から引き上げ得るかといふことは明瞭な事實である。ABCD其他の資本家は、彼等が生産資本として流通内から引き上げた所よりも大なる商品價値をば、絶えず商品資本なる形態を以つて流通内に投するのであつて、此作用は獨立して機能を盡す諸資本と同様に多方面のものである。即ち彼等は其それらの前貸生産資本の價値總額に等しき價値高を絶え

す相互の間に配分しなければならぬと同時に、換言すれば、それごとく一つの生産資本を流通内から引き上げなければならぬと同時に、又彼等がそれごとく商品形態——生産要素の価値を超過した商品価値を代表する所の——を以つて流通内に投ずる価値高をも、絶えず相互の間に配分しなければならぬのである。

けれども商品資本なるものは、それが生産資本に轉化されるに先だち、又其中に含まるゝ剰剰価値が支出されるに先だつて、貨幣化される事を要するのである。然らば此目的に必要な貨幣は抑も何處から來るか？ 一見したところ、之れは難問であるやうに思はれる。而してトツクも、他の經濟學者も、未だ嘗て之れが解答を與へなかつたのである。

貨幣資本として前貸される五百磅といふ流通資本は、其回轉期間の如何を問はず、今や社會の（換言すれば資本家階級の）流通總資本を代表するものであり、而して剰剰価値は一百磅であると假定する。所で、全資本家階級は如何にして絶えず五百磅を流通内に投じて、絶えず六百磅を流通内から引き出し得ることになるのであるか？

五百磅なる貨幣資本は、それが生産資本に轉化したる後、生産行程の内部に於いて六百磅なる商品資本に轉化する。かくして流通の内部には、最初前貸された貨幣資本に等しき五百磅なる商品資本が存在する上に、尙一百磅といふ新たに産出された剰剰価値が存在することになるのである。

此一百磅といふ追加的の剰剰価値は、商品形態を以つて流通内に投せられたものであつて、此點には何等の疑ひも存しない。けれども此作用は、かゝる追加的の商品価値の流通に必要な追加貨幣を齎らすものではないのである。

今や尤もらしい遁辭を以つて、此難關を避けようとしてはならない。

一例として不變流通資本について言へば、必ずしも總ての資本家が同時に此資本を放下するものでないことは明かである。Aなる資本家が其商品を販賣して其前貸資本に貨幣形態を附與しつゝある時、反對に購買者たるBは、貨幣形態を以つて存在せる彼れの資本に、Aの生産にかゝる生産機關なる形態を附與してゐるといふ場合が生じ得る。即ちAの産出商品資本に貨幣形態を回復せしむる同一の取引に依つて、Bの資本は生産形態を回復せしめられ、貨幣形態から生産機關及

び勞働力に轉化して行くのである。即ち總ての單純なる購買力 M — 1 —における如く、同一の貨幣額は二重の行程内に作用することとなるのである。他方に又、Aが其貨幣を生産機關に再轉化する場合について言へば、彼れはそれをCから購買しCは其代價として得た貨幣を以つてBに支拂ふと云ふ風に以下連續してゆく。斯くして取引の進行は説明されたことになるであらう。

けれども商品流通を取扱ふ際（第一卷、第三章）流通貨幣の量について述べた一切の法則は、決して生産行程の資本制的性質に依つて變化を受くるものではないのである。

されば貨幣形態を以つて前貸さるべき社會の流通資本が五百磅であると説く場合には、一方に此資本が同時に前貸される貨幣額であるといふ事、他方に又、それは種々異なつた生産資本の貨幣基金として交々役立つものであるから、五百磅以上の生産資本を運轉することになるといふ事が、豫め考慮に入れられてゐるのであつて、此説明方法は、説明を要すべき貨幣の存在を却つて前提することになるのである。

更らに又、斯うも言ひ得るであらう。——Aなる資本家は、Bなる資本家が個人的に、不生産的に消費する所の物品を生産する。換言すれば、Bの貨幣に依つてAの商品資本は貨幣に轉化せしめられる。されば同一の貨幣額はBの餘剩價值とAの流通不變資本とを貨幣化することに役立つと云ふ事である。けれども此説明に於いては、解決すべき問題の解決は尙一層直接に前提されることとなる。それは即ち、Bは其収入の支出に充用すべき貨幣を何處から得て來るか、其生産物の斯かる餘剩價值分をば、如何にして彼れ自ら貨幣化したかといふ問題である。

更らに斯うも言ひ得るであらう。——Aが絶えず其勞働者たちに前貸する流通可變資本部分は、間斷なく流通内から彼れの手に戻流して來る。而して其中の相互交代する一部分のみが、勞銀支拂用として絶えず彼れ自身の手拘束されてゐるに過ぎない。然るに支出から回流迄の間には一定の期間を経過するのであつて、勞銀として支拂はれた貨幣は、此期間中に餘剩價值を貨幣化することにも役立つと云ふのである。けれども第一に、此期間が大なればなるほど、Aなる資本家が絶えず準備して置かねばならぬ貨幣貯藏の量も亦益々大となるを要する

ことは我々の知る所である。第二に、労働者は貨幣を支出し、それを以つて商品を購入する。かくて此商品の中に含まれてゐる剰余価値は、それだけ貨幣化されることになる。換言すれば、可變資本として前貸される貨幣は、それだけ剰余価値を貨幣化することにも役立つのである。茲では斯かる場合を更らに立ち入つて考察することなく、ただ之れだけの事を述べて置きたい。即ち全資本家階級並びに其隷従者たる不生産的人士の消費は、労働者階級の消費と時を等しうして進行する。されば労働者が貨幣を流通内に投ずると同時に、資本家もまた其剰余価値を収入として支出せんがため、貨幣を流通内に投じなければならぬ。かくて此目的のために、貨幣を流通内から引上げる必要があるといふ一事である。右の説明は、此目的に必要な貨幣量の節減を論證するのみであつて、その廢除を論證するものではないのである。

最後に斯うも言ひ得るであらう。——最初固定資本の放下される場合には、常に多額の貨幣が流通内に投せられる。而して此貨幣量は、最初それを流通内に投じた人に依つて、何個年かの経過中に、ただ漸次的、断片的にのみ、再び流通内から引

き上げられるのである。それで此の貨幣額を以つてすれば、剰余価値を貨幣化せしむるに充分ではないかと云ふのである。これに對しては次の如く答ふべきである。即ち五百磅なる貨幣額（必要な準備金に充用すべき退藏貨幣をも含む）といふ概念の中には恐らく、最初それを流通内に投じた人でないにしても、少なくとも他の何人かが、之れを固定資本として充用するといふ意味が含まれてゐるであらう。尙また、固定資本として役立つ生産物の購買に支出する貨幣額といふ概念の中には、此商品の中に含まれてゐる剰余価値についても同様に代價が支拂はれるといふ意味が既に含まれてゐる。所で此目的に充用すべき貨幣は、そもく何處がら來るかといふ事が正に問題となるのである。

これに對する概括的の解答は、曩に與へた通りである。即ち $M \times 1000$ 磅なる價值の商品量を流通せしめようとする場合、此商品量の價值の中に剰余価値が含まれてゐるか否か、換言すれば此商品量が資本制度のもとに生産されたか否かといふことは、之れが流通に要する貨幣量の上に些かも影響するものではない。即ち右の問題そのものが存在して居らないと云ふことになるのである。他の事情――

—貨幣の流通速度などの如き——に變化なき限り、 $M \times 1000$ 磅なる商品價值を流通せしめるには一定量の貨幣を要するのであつて、此事實は、斯かる商品價值の中當該商品を直接に生産する人々の手に歸する部分の大小如何といふ問題からは全く獨立して行はれる。この場合何等かの問題が存在するとすれば、それは一國における商品の流通に必要な貨幣總額は抑も何處から來るかといふ一般的问题と一致するのである。

勿論、資本制生産の立場から見ると、特殊の一問題たる外觀が存することは事實である。蓋し資本制生産のもとに於いて、貨幣が流通内に投せられる起點として現はれる所のものは資本家である。労働者が其生活資料の購買に支出する貨幣は、豫め可變資本の貨幣形態として存在せるものである。即ちそれは本來、資本家が労働力の購買要具又は支拂要具として流通内に投じたものである。尙また資本家は、本來その不變資本（固定分と流動分を含む）の貨幣形態たる貨幣を流通内に投ずる。彼れはそれを、労働要具と生産材料との購買要具又は支拂要具として支出するのである。然し此點を越え、もはや資本家は流通内に存する貨

幣量の起點として現はれるものではない。然るに之れが起點となるものは、資本家と労働者との二者あるのみであつて、資本家及び労働者以外の第三者部類に屬する人々は皆、勤勞の報酬として此兩階級から貨幣を受けなければならぬ人々か然らずんば——反對給付を與へずして貨幣を受くる場合について言ふ限り——地代利子等の形で餘剩價值の占有に與かる人々かの何づれかである。餘剩價值なるものは全部産業資本家の懐ろに残る譯ではなく、寧ろ他の人々との間に分割されねばならぬものであるが、かゝる事實は當面の問題とは何等關係する所がないのである。問題は、彼れが如何にして其餘剩價值を貨幣化するかといふ事であつて、貨幣化したる餘剩價值が後に至つて如何様に分割されるかといふ事ではない。されば、此場合、資本家は尙、餘剩價值の唯一の所有者と見做し得るのである。然るに労働者なるものは、彼れが流通内に投じた貨幣の第二義的起點たるに過ぎず、其第一義的起點となるものは寧ろ資本家である事は、既に述べた通りである。最初可變資本として前貸された貨幣は、労働者がそれを生活資料の購買に支出する時には既に其第二の流通を通過してゐるのである。

要するに、貨幣流通の唯一の起點となるものが資本家階級であることには變りがない。資本家階級が生産機關の代價として四百磅を要し、労働力の代價として一百磅を要する場合には、五百磅といふ貨幣額が此階級に依つて流通内に投せられる譯である。ところで餘剰價值率が一〇〇パーセントであるとするれば、生産物の中に含まれる餘剰價值は一百磅なる價值に等しいことになる。資本家階級は絶えず五百磅しか流通内に投じないのに、如何にして絶えず六百磅を流通内から引き出し得るか？ 無から何物も生ずるものではない。資本家階級全體について言へば、豫め流通内に投じなかつたものを流通内から引き出し得る譯はないのである。

年に十度回轉が行はれるとすれば、四百磅なる貨幣額は恐らく四千磅の價值ある生産機關と、一千磅の價值ある労働とを流通せしむるに充分であらうし、また餘の一百磅も一千磅なる餘剰價值を流通せしむるに充分であらう。貨幣額とそれに依つて流通せしめられる商品價值との間の斯かる比例は、この場合些かも影響する所なく、いづれにしても問題は不變なのである。同一の個貨が種々なる流

通を遂げないとするれば、かゝる場合には五千磅なる一資本を流通内に投ずることが必要となり、而して餘剰價值を貨幣化する爲に一千磅を要することゝなるであらう。一千磅であるにしろ、一百磅であるにしろ、兎にかく右の後者たる貨幣が何處から來たかといふ事が問題となるのである。いづれにしても、それが流通内に投せられた貨幣資本以上に出づる超過額であることは疑ひを容れない。

一見逆説的に思はれることではあるが、商品の裡に含まれてゐる餘剰價值の實現に役立つ貨幣が、資本家階級自身に依つて流通内に投せられることは事實である。けれども茲に注意を要する事は、資本家階級はそれを前貸資本即ち貨幣として流通内に投ずるものではないといふことである。それは資本家階級の個人的消費を行ふ上に必要な購買要具として支出される。随つてそれは資本家を流通起點とするものではあるが、資本家に依つて前貸されるものとはならないのである。

新たに營業を開始する個別的の一資本家として、茲に一人の小作農業者を例に採らう。最初の一年間に、彼れは例へば五千磅なる貨幣資本を前貸する。その中、

四千磅は生産機關の代價として、一千磅は勞働力の代價として、支拂はれる。餘剰價值率は一〇〇パーセントであり、隨つて彼れの占有餘剰價值は一千磅であると假定する。右の五千磅といふ中には、彼れが貨幣資本として前貸した貨幣の全部が包含されてゐるのである。けれども人はまた生活しなければならぬ。而も其年の終末にならなくては、毫も貨幣が收納されない。彼れの消費額が一千磅に上るものと假定しよう。彼れは此貨幣を所有して居らなければならぬ。彼れは言ふかも知れない。——此一千磅は彼れ自身が最初の一年間に前貸せねばならぬ所のものである。然し斯様な前貸は單に、主觀的の意義を有するのみであつて、要するに最初の一年間における彼れの個人的消費に必要な費用が、勞働者の無料生産に依つて支辨される代りに、彼れ自身の懐ろから支辨されるといふ事を意味するに過ぎないのである。彼れは此貨幣を資本として前貸するのではない。それは支出されるのである。換言すれば、彼れ自身の消費に歸する生活資料の等價として支拂はれるのである。此價值は貨幣の形で支出されて流通内に投せられ、商品價值として流通内から引上げられる。彼れは此商品價值を消費する。か

くして彼れは此價值との間に、最早何等の關係もなきものとなる。彼れが此價值の代價として支拂つた貨幣は、今や流通貨幣の要素として存在してゐる。けれども此貨幣の價值は生産物として流通内から引き上げられるのであつて、其存在形態たる生産物が破壊されると同時に、價值も亦破壊されて消滅に歸するのである。然るに其年の終末になると、彼れは六千磅なる商品價值を流通内に投じて販賣する。かくして（一）五千磅なる前貸貨幣資本と（二）一千磅なる貨幣化された餘剰價值とが彼れの手に戻流して来る。彼れは五千磅を資本として前貸し、流通内に投入したのであるが、今や六千磅を流通内から引き上げる。その中、五千磅は彼れの資本を代表し、一千磅は餘剰價值を代表するのである。此後ちの一千磅は彼れ自身が資本家としてではなく、消費者として流通内に投じた貨幣、換言すれば前貸したのではなく寧ろ支出した貨幣に依つて貨幣化されたものである。それは今や、彼れの生産した餘剰價值の貨幣形態として彼れの手に戻歸して来る。而して此時以後、同一の作用は年々反覆されるのである。けれども第二の年からは彼れの支出する一千磅は常に、彼れの生産した餘剰價值の採る轉化された形態と

なり、貨幣形態となるものであつて、それは年々彼れに依つて支出され、同様に又年々彼れの手に戻流して來るのである。

彼れの資本が一年間に屢々回轉するとしても、斯様な事は問題の上に何等の變化をも與ふるものではないが、然しそれは期間の大小と、彼れが前貸貨幣資本以上の分として自己の個人的消費のため流通内に投入せねばならぬ貨幣額の大小との上に影響を及ぼすことは事實である。

此貨幣は、資本家に依り資本として流通内に投せられるものではない。然しながら、餘剩價值が回流して來る時まで自己所有の資力を以つて生活し得るといふことは、資本家たる資格の中に含まれてゐるのである。

我々は此場合、最初の資本回流が行はれる時まで資本家の個人的消費に必要な費用を支辨する目的を以つて流通内に投せられる貨幣額が、彼れの生産にかゝる随つて彼れの手で貨幣化さるべき餘剩價值と、嚴密に相等しきものであると假定した。これは個々の資本家について言へば、專擅的の一假定であることは明かである。然しそれは、單純なる再生産が行はれる限り、資本家階級全體について考へ

るならば、當を得た假定と云はなくてはならぬ。それは此單純なる再生産が示す所と同一の事實——即ち餘剩價值の全部、而も單にそれだけのものが不生産的に消費されるのであつて、原資本の如何なる部分も不生産的に消費されるものではないといふ事實——を言ひ現はすに過ぎないのである。

我々は曩に、貴金屬の總生産（それは五百磅に等しいと見たのであるが）は貨幣磨滅を償ふに足るのみであると假定した。

金の生産に従事する資本家は、其生産物の全部を金として所有するものであつて、其生産物の中、不變資本を償ふ部分も可變資本を償ふ部分も、更らに餘剩價值から成る部分も、すべてみな金として所有されるのである。（要するに、社會的餘剩價值の一部は金から成るものであつて、流通の内部に於いて初めて貨幣化する所の生産物から成るものではない。それは最初より金として存在するものであつて、流通内から諸生産物を引き上げる目的を以つて流通内に投入されるのである。）

これは、當面の場合で言へば、可變資本たる勞銀についても、前貸不變資本を償ふ部分についても、等しく當て嵌る事である。かくて資本家階級の一部が自己の前貸

した貨幣額よりも剰余価値に相當した分だけ大きい商品価値を流通内に投入する時、他の資本家部分は、金の生産上絶えず流通内から引き上げる商品価値よりも剰余価値に相當した分だけ大きい貨幣価値を流通内に投入することとなる。即ち資本家の一部は流通内に注ぎ込む所よりも多量の貨幣を絶えず流通内から汲み出すのであるが、金の生産に従事する資本家部分は是れに反して、生産機關の形で流通内から引き出す所よりも多量の貨幣を絶えず流通内に注ぎ込むのである。此五百磅なる金生産物の一部は、金の生産に従事する人々の剰余価値であるとは云へ、而も此生産物の總額は諸商品の流通に必要な貨幣の補償にのみ使用せらるべきものである。其中の幾許を以つて諸商品の剰余価値分を貨幣化し、幾許を以つて諸商品の他の價值分を貨幣化するかといふことは、此場合どうでもよい問題である。

以上の説明に於いては、金生産が國內に行はれるものと假定したのであるが、之を國外に移して考へても、問題の上には何等の變化も生じないのである。Aなる

る一國における社會的勞働力と社會的生產機關との一部は、例へば五百磅の價值あるリンネルの如き一生産物に轉化され、而して此生産物はBなる國に輸出されて該國の金と交換される。Aなる國に於いて此方面に使用された生産資本は貨幣から區別した意味の商品を此國の市場に供給するものでない事は、同一の資本が直接金の生産に使用される場合と異ならないのである。Aに於ける右の生産物は、五百磅の金に依つて代表される。而してそれは、單に貨幣の形を以てのみAなる國の流通内に入るのである。此生産物の中に含まれてゐる社會的剰余価値部分は、直接貨幣の形を採つて存在し、Aなる國から見れば決してそれ以外の形を以て存在するものではない。金の生産に従事する資本家の立場から見れば、剰余価値を代表するものは生産物の一部だけであつて、殘餘の生産物部分は回収すべき資本を代表することになるのであるが、此金の中、幾許が流通不變資本以外に尙可變資本を回収せしめ、幾許が剰余価値を代表するかといふ問題は、一に勞銀と剰余価値とが流通商品の價值の上に占むる夫々の比率に依つて定まる事である。剰余価値を代表する部分は、資本家階級の種々なる成員の間に配分される。此部

分は絶えず彼等の個人的消費に支出され、新たな生産物の販賣に依つて回復されるとはいへ（而して斯様な賣買は總じて、餘剩價値の貨幣化に必要な貨幣を彼等自身の間に通せしむるに過ぎないものである）、而も社會的餘剩價値の一部は、不定の比率を以てゞはあるが兎にかく貨幣の形を採つて、資本家の懐ろに保留されてゐる。それは丁度、勞銀の一部が、一週中の少なくとも若干期間、貨幣の形を採つて勞働者の懐ろに保留されてゐるのと同じである。而して此餘剩價値部は、金の生産に従事する資本家の餘剩價値に本來相當した貨幣生産物部分に依つて制限されるものではなく、寧ろ曩に述べた如く、五百磅なる上記の生産物が資本家一般と勞働者一般との間に分割される比率、並びに流通すべき商品在荷が餘剩價値と他の價値要素とより成る比率に依つて制限されるのである。

けれども他の諸商品の裡に存在することなく、貨幣の形を採つて他の諸商品と並び存する餘剩價値部分は、年々産出される金の一部が餘剩價値實現の目的を以つて流通する限りに於いてのみ、年々産出される金の一部から成るものである。比率は不定であるにしろ、兎にかく餘剩價値の貨幣形態として絶えず資本家階級

の手に保留されてゐる貨幣部分は、年々産出される金の要素ではなく、寧ろ従前國內に蓄積されてゐた貨幣量の要素なのである。

曩の假定に依れば、年々産出される五百磅といふ金は、丁度年々の貨幣磨滅分を償ふに足るだけである。そこで此五百磅だけを念頭に置き、而して年々生産される商品量の中、従前蓄積された貨幣に依つて流通せしめられる部分を抽象し去るとすれば、商品形態を以つて生産された餘剩價値は、其貨幣化に必要な貨幣を流通内に見出すこととなるのであるが、それは一面に於いて、餘剩價値が年々金の形で産出される結果なのである。同一のことは又、五百磅なる金生産物の中、前貸貨幣資本を補償する他の部分についても、等しく言ひ得る所である。

所で茲に二つの注意すべき事項がある。

第一に、斯ういふ結論が生じて来る。即ち資本家が貨幣の形で支出する餘剩價値も、また貨幣の形で前貸する可變資本並びに其他の生産資本も、實際のところ勞働者（即ち金の生産に従事する勞働者）に依る生産物である。此勞働者は、勞銀として『前貸された』金生産物部分以外に尙、金生産に従事する資本家の餘剩價値

を直接代表する所の金生産物部分をも新たに造り出すのである。

最後に、生産上前貸された不變資本を償ふだけの金生産物部分について言へば、それが貨幣（總じて又一つの生産物）なる形態を以つて再現するのは、労働者が年々與へる所の労働を通してのみ行はれることである。それは本來、營業開始の際資本家に依り貨幣の形を以て支出された所のものである。而して此貨幣は、新たに生産されたものではなく、寧ろ既に流通しつゝある社會的貨幣量の一部なのである。反對にそれが新たな生産物、即ち追加的の金に依つて代位される限り、それは取りも直さず、労働者が年々造り出す所の生産物となるのである。此場合にも亦、資本家側における前貸は、労働者が其生産機關の所有者でもなれば、また生産の進行中、他の労働者に依つて生産された生活資料を支配することも出来ないといふ事實に基く一形態として現はれるに過ぎないのである。

第二に又、五百磅なる貨幣が年々斯様に代位されるといふ事實からは獨立し、一部的には退藏貨幣、一部的には流通貨幣なる形態を採つて存在する貨幣量については、此五百磅に於いて尙引續き年々行はれてゐる所と正に同一の關係が行はれ置く。

て居らねばならず、或は寧ろ本來行はれてゐたに違ひないのである。此問題の論究は本節の終末に譲り、茲には前以つて尙他の方面に關する若干の叙述を與へて置く。

他の事情に變化なき限り、回轉期間の大小に變化が生ずるとすれば、同一の規模を以て生産を執り行ふに必要な貨幣資本量の上にも亦差異の生ずることは、曩に回轉を攻究せる際述べた通りである。随つて貨幣流通の伸縮は、かくの如き伸張と收縮との變動に適應し得るに充分大なるものでなくてはならぬ。

更らに他の事情に變化なく、労働日の大小も、能率も、生産力も共に不變であつて、たとへば労働と餘剩價值との價値、生産物の分割に變化が生じ、労働が増進して餘剩價値が低減するか、又はそれと反對の結果が與へられると假定しても、流通貨幣の量は斯かる變動に依つて影響を受くるものではない。斯様な變動は、流通貨幣量の何等の伸縮をも伴ふ事なしに進行し得るのである。就中、労働が一般的に増騰して、その結果、我々の假定する所に従ひ、餘剩價值率が一般的に低減する事となり、

而もそれ以外には——矢張り我々の假定する所に従ひ——流通商品量の價值の上には何等の變動も生じないと云ふ場合を考察して見よう。この場合、可變資本として前貸されねばならぬ貨幣資本、随つて又かゝる機能に役立つ所の貨幣量が增大することは事實である。けれども、可變資本の機能に必要な貨幣量が斯く増大する結果、それと嚴密に同一の比例を以つて餘剩價值は減少し、随つて又餘剩價值の實現に必要な貨幣量も減少する事になるので、商品價值の實現に必要な貨幣總額は——此商品價值それ自體と同様に——右の事實に依つて影響を受けるものではない。個々の資本家から見れば、商品の費用價格は増大するが、然し商品の社會的生產價格の上には何等の變化も生じないのである。變化を受くるものは、商品の生產價格が勞銀と利潤とに（不變價值分のことは暫く措き）分割される比率のみである。

けれども論者或は謂ふであらう。可變資本支出の増大は、（貨幣の價值は言ふ迄もなく不變であると假定して）勞働者の手に在る貨幣量がそれだけ増大することを意味するものであつて、その結果、勞働者の側における商品需要は増大し、か

くして商品價格は昂騰することになると。或は又斯うも謂ふであらう。勞銀が昂騰すれば、資本家は其商品の價格を釣り上げることになると。此いづれの場合にも、勞銀の一般的増騰は商品價格の昂騰を伴ふ。かくて、右のいづれの方面から商品價格の昂騰を説明するにしても、商品を流通せしむる爲には、より大なる貨幣量が必要となるべき筈である。

右の第一論に對する答辯——勞銀の増騰に伴ふ特に著しき現象は、生活必需品に對する勞働者の需要が増大する事である。又より小なる程度に於いては、あるが、奢侈品に對する勞働者の需要も増大する。或は又、従前勞働者の消費圏内に屬して居らなかつた物品に對する需要が新たに生ずることにもなる。生活必需品に對する需要が突發的に且つ大規模を以て増大すると、其價格が瞬間的に昂騰を來たすに至ることは、無條件的に斷定し得る所である。その結果、社會的資本のより大なる一部は生活必需品の生産に充用され、より小なる一部は奢侈品の生産に充用される事になる。蓋し餘剩價值が減少し、随つて奢侈品に對する資本家の需要も減少する結果、奢侈品の價格は勢ひ低落を來たすことになるからである。反

對に、勞働者自身が奢侈品を購買する限り、勞銀の増騰はそれだけ生活必需品の價格昂騰には影響しなくなり、寧ろたゞ奢侈品購買者の位置を移動せしむるに過ぎなくなるのである。従前におけるよりも多量の奢侈品が勞働者の消費に歸し、資本家の消費に屬する分は相對的により小となる。それだけの事である。若干の動搖が過ぎ去ると、従前通りの價值ある商品量が流通するやうになる。瞬間的の動搖について言へば、従前株式取引所における投機的企業なり又は外國なりに投資口を求めてゐた不使用貨幣資本が、國內の流通に投せられるやうになるといふこと以外には、何等の結果も生ずるものではないであらう。

右の第二論に對する答辯——任意に商品の價格を昂騰せしめることが資本家的生産者の權限に屬する所であるとすれば、彼れは勞銀の増騰せざる場合にも斯く爲し得るであらうし、又事實に於いてもさうするであらう。商品價格の低落するときは、勞銀は決して増騰するものではないであらう。資本家階級なるものは、決して勞働組合に反對するものではない。なせならば、資本家階級が現在に於いて、一定の特殊の謂はゞ局部的なる事情のもとに、例外的に實行しつゝある所の事——

即ち勞銀が昂騰する毎に、其機に乗じて商品價格をより著しく増騰せしめ、かくしてより大なる利潤を收納するに至るといふ事——は、つねに、又如何なる事情のもとにも、此階級に依つて實行せられ得る所であるからである。

奢侈品の需要が減少するので（奢侈品の購買に支出すべき資本家の貨幣が減少する結果、此物品に對する資本家の需要も同様に低減することになる）資本家は其價格を釣り上げ得るといふ主張は、需給律の極めて斬新なる適用であらう。奢侈品に對する購買者の位置が移動して、資本家に代り勞働者が奢侈品の購買者になるといふ事實が生じないとすれば——而して斯かる轉位の行はるゝ限り、勞働者側の需要は生活必需品の價格騰貴に影響するものではない。なせならば、奢侈品の爲に支出される賃銀増加分は、勞働者の生活必需品の爲に支出され得るものではないから——奢侈品の價格は需要の減少する結果低落することになるのである。その結果、資本は奢侈品の生産部面から引き上げられて、奢侈品の供給は此物品が社會的生產行程の上に演ずる所の變化した役割に適應した程度迄縮小される。奢侈品の價格は——他の方面から價值の變化を來たす事なき限り——

生産が斯く収縮すると共に平常の水準に復歸する。かくの如き収縮、かくの如き均衡過程が行はれる限り、生活必需品の價格昂騰に伴ひ、他の生産部門から引き上げられるだけの資本が又絶えず生活必需品の生産面に供給される。而して此供給は、生活必需品に對する需要が充たされる點に達するまで引續き行はれるのである。かくして均衡は回復されることになるのであるが、この全過程の歸する所は、要するに社會的資本、随つて又貨幣資本が變化したる比率を以つて、生活必需品の生産と奢侈品の生産との間に分割されるやうになるといふ一事である。一要するに上記の全異論は、資本家並びに其經濟學上の阿諛者たちに依つて放たれ警砲に過ぎないのである。

斯様な警砲の論據となる事實には三種ある。

(一) 流通商品の價格總高が増大するとすれば——價格總高の斯かる増大が不變の商品量について行はれるか、それとも増加した商品量について行はれるかに論なく——他の事情に變化なき限り、流通貨幣量も亦増大するに至ることは、貨幣流通上の一般的法則である。所で上記の主張に於いては、結果が却つて原因と見

做されてゐる。生活必需品の價格が昂騰するから、勞銀も亦増騰するのである。

(尤も之れは稀に行はれる現象であり、且つ勞銀の増騰が生活必需品の價格昂騰と同一の比率を以つて進行することは、例外的にのみ見られる所である)。勞銀の増騰は、商品價值昂騰の結果であつて原因ではない。

(二) 勞銀が一部の、局部的に、換言すれば若干の生産部門内に在つてのみ、増騰する場合には、その結果、此等の生産部門における生産物の局部的なる價格昂騰が行はれ得る。然し此事實でさへも、幾多の事情に依つて左右されるのである。例へば、此等の生産部門における勞銀が異常に引き下げられて居らず、随つて異常に高き利潤率が行はれて居らなかつたといふ事情や、價格が昂騰しても、此等生産部門に依つて與へられる商品の販路は狭ばめられないといふ事情(換言すれば、價格昂騰に先だつて商品供給が縮小されることを必要とするものでないといふ事情)などが即ちそれである。

(三) 勞銀が一般的に増騰する場合には、生産商品の價格は可變資本の優勢なる産業部門に在つては昂騰するが、反對に、不變資本又は固定資本の優勢なる産業部

門に在つては低落することになる。

一定量の各商品が其流通内部に於いて採る貨幣形態は、瞬過的のものに過ぎないとは云へ、一方の人の手に於いて商品が轉形を遂ぐる際消滅する所の貨幣は、必然の結果として又他方の人の手に移動しゆくものであるから、商品が到る處で交換され相互に代置せしめられるといふ第一次的現象の外に尙、此代置は貨幣が到る處に沈澱するといふ事實に依つて媒介され随伴されるものであることは、曩に（第一卷第三章第二節）單純なる商品流通を攻究せるとき述べた所である。「商品を以つてする商品の代置は、同時に又第三者の手に貨幣商品を取り附かせる。流通は不斷に貨幣を發汗するのである」（第一卷、邦譯本第一册、第一六一頁）。同一の事實は、資本制生産を基礎として考へるならば、次の形に言ひ現はされる。即ち資本の一部は絶えず貨幣資本なる形態を採つて存在し、同様に餘剩價值の一部も亦、絶えず貨幣資本なる形態を採つて其所有者の手に在留してゐるといふ事である。

以上の事實は暫く措き、貨幣の循環——換言すれば、起點への貨幣の回流——なる

るものは、それが資本回轉の一要素である限り、貨幣の流通とは全く異なる、甚しきはそれに對立した現象である（三十三）。蓋し貨幣の流通なるものは、貨幣が幾人もの手を経て絶えず其起點から遠ざかる事を言ひ現はすからである（第一卷、邦譯本第一册、第一六六頁）。而も回轉速度の増進は、又當然、流通速度の増進を含むものである。

（三十三）重農派の學者たちも此等の兩現象を混同してゐるが、然し彼等は起點への貨幣の回流をば資本流通の本質的形態として、再生産を媒介する流通の形態として強調した最初の論者である。「經濟表」に一瞥を投ぜよ。然らば諸君は次の事實を見出すであらう。即ち、生産階級以外の諸階級が生産階級から生産物を購買するため使用する貨幣は、生産階級に依つて與へられるもので、此等の購買階級は翌年また同一の購買を爲すとき、右の貨幣をば生産階級の手に返還することになるといふ事實である。……所で此事例に示さるゝ循環なるものは、支出に次ぐに再生産を以つてし再生産に次ぐに支出を以つてする循環に外ならないことは諸君の認める所である。而して斯くの如き循環を畫くものは、即ち貨幣の流通であつて、此流通は實に支出及び再生産の尺度となるのである」（ケネー著「經濟學上の諸問題」テイル編、ギョーマン全集、フィジオクラット、第一卷、第二〇八—九頁）。「資本の斯かる間斷なき前貸及回取」

そ、貨幣の流通と稱せられればならぬものであり、而して又此有用にして多産なる流通こそ、社會の有らゆる労働に生命を附與し、社會體の活動と生命とを維持し、且つ當然の理由を以つて動物體の血液流通に比類せらるべきものである」(チルゴリ著「富の形成及分配觀」テイル編マギョーマン全集チルゴリ全集第一卷、第四五頁)。

先づ可變資本について考へて見る。假りに五百磅なる貨幣資本が可變資本の形を以つて年に十度回轉するとすれば、かゝる場合、流通貨幣量の此可除分が自己に十倍する價值(五千磅)を流通せしめることは明かである。それは年に十回、資本家と労働者との間を流通する。労働者は流通貨幣量の此可除分を以つて、年に十回支拂を受け、又支拂を爲るのである。生産の規模に變化なきものとして、此可變資本が年に一度回轉するだけであるとするれば、五千磅なる資本が一年に一度しか回轉しないことになるであらう。

更らに、流通資本の不變分が一千磅であると假定する。資本が年に十度回轉するとすれば、資本家は年に十回その商品を販賣し、随つて又年に十回その商品の價値の不變流通分を販賣することになる。流通貨幣量中の同一なる可除分(一千

磅)は、年に十回その所有者の手から資本家の手に移動してゆく。即ち此貨幣は、年に十回一方の人の手から他方の人の手に轉位することとなるのである。第二に、資本家は年に十回生産機關を購買する。此場合にも亦、貨幣は年に十回、一方の人の手から他方の人の手に流通するのである。一千磅なる貨幣を以て、産業資本家は一萬磅の價值ある商品を販賣し、更らに一萬磅の價值ある商品を購買するのであつて、一千磅なる貨幣が二十回の流通を遂ぐる結果、二萬磅の價值ある在荷商品が流通することになるのである。

最後に、回轉の速度が増進すると、餘剩價值を實現せしむる貨幣部分の流通速度も亦同様に増進して來る。

反對に、貨幣流通の速度増進は、必ずしも資本回轉随つて又貨幣回轉の速度増進を含むものではない。換言すれば、それは必ずしも再生産行程の短縮と其更新速度の増進とを含むものではないのである。

同一の貨幣量を以つてより、多量の取引が行はれる毎に、貨幣流通の速度は増進する。此現象は、資本の再生産期間に變化なき場合にも、貨幣流通の技術的設備に

變化が生ずれば行はれ得るのである。更らに、貨幣が現實における商品交換の言現はしとならないで流通する所の取引（株式取引所における空相場などの如き）が数多くなることもあり得る。他方に又、貨幣流通なるものが全く削除されることもあり得る。例へば農業經營者自身が土地所有者である場合には、小作農業者と土地所有者との間には何等の流通も行はれず、又産業資本家自身が資本所有者である場合には、産業資本家と債権者との間には何等の流通も行はれないのである。

退藏貨幣なるものが本來一國內に成立する事實と、それが僅少の人々に依つて占有される事實とについては、茲に尙立ち入つて論究する必要はない。

資本制生産方法は賃銀労働を基礎とするものであつて、賃銀を以つてする労働者への支拂、總じて又現物給付の貨幣給付への轉化なる事實も、同様に其基礎となるのであるが、此生産方法は流通及それに伴ふ退藏貨幣成立（準備金などの形成）の目的に充分なる貨幣量が一國內に存存する所に於いてこそ、初めて大なる規模

と深き完成とを以つて發達し得るのである。之れは歴史的の前提である。尤も之れは先づ充分なる退藏貨幣量が成立して、然る後資本制生産が開始されるといふ風に解すべきではない。寧ろ資本制生産は、其條件の發達と同時に發達するものである。而して斯かる條件の一つたるべき事實は、即ち貴金屬の充分なる供給といふことである。十六世紀以降における貴金屬供給の増大が、資本制生産の發達史上本質的の一要素となつた所以は茲に在る。然しながら資本制生産方法の基礎上行はれる貴金屬の尙それ以上の必要なる供給が問題となる限り、一方には生産物の形を採つた餘剩價值が其貨幣化に必要な貨幣なくして流通内に投せられ、他方には金の形を採つた餘剩價值が生産物の貨幣化なる豫備段階を經過せずして流通内に投せられるといふ事實が考慮に入るのである。

要するに、貨幣に轉化せらるべき追加的の商品が其目的の爲に必要な貨幣量に達するものは、他方に於いて、商品に轉化せらるべき追加的の金（及び銀）が交換に依ることなく、寧ろ生産それ自身に依つて流通内に投せられる結果なのである。

(二) 蓄積並びに擴大された再生産

蓄積なるものは、それが規模の擴大された再生産と云ふ形を採る限り、貨幣流通について何等の新たな問題をも提供するものでないことは明かである。

先づ、増大しつゝある生産資本の機能に必要な追加的の貨幣資本について見るに、それは實現された剰餘價值の中、資本家が収入の貨幣形態としてではなく、寧ろ貨幣資本として流通内に投ずる所の部分に依つて供給されるのである。此貨幣は豫め資本家の手に存在してゐるのであつて、單に其充用が異なるのみである。

然るに追加的の生産資本は、其生産物たる追加的の商品量を流通内に投せしむるものであつて、此追加的商品量と同時にまた、其實現に必要な追加的貨幣の一部も流通内に投せられることとなる。(之れは斯かる商品量の價值が、其生産上に消費される生産資本の價值に等しき限りに於いて言ひ得ることである)。斯様な追加貨幣量は正に、追加的の貨幣資本として前貸される。随つてそれは、資本の回轉を通じて資本家の手に回流することとなるのである。かくて此場合にも亦、疊に述べた所と同一の問題が生じて來る。即ち此場合商品形態を以つて存在して

ゐる剰餘價值を實現せしむべき追加貨幣は、そもく何處より來るかといふ問題である。

此問題に對する大體の解答も、上記の場合におけると同一である。即ち流通商品量の價格總高は今や増大することになるのであるが、それは與へられたる商品量の價格が増騰する結果ではなく、寧ろ此場合流通する商品の量が従前流通した商品の量よりも大であり、而もそれが商品價格の低落に依つて相殺されることのない結果なのである。斯くの如きより、大なる價值を有する増大した商品量の流通に必要な追加貨幣は、各支拂間の清算其他の方法なり、又は同一個貨の流通速度を増進せしむる方法を以つて、流通貨幣量の節約を大ならしむることに依るか、然らずんば退藏形態における貨幣を流通形態に轉化せしむることに依つて得られなければならない。此後ちの方法は、單に、休用状態に置かれてゐた貨幣資本が購買要具又は支拂要具たる機能を盡し始めるといふ事實、もしくは既に準備金として作用しつゝある貨幣資本が、其所有者の爲には準備金なる機能を盡しつゝ、又社會の爲には現實的に作用し(絶えず貸出される銀行預金に於ける如く)以つ

て二重の機能を盡すといふ事實を含むのみではない。それは更らに、停滯しつゝある鑄貨準備が節約されるといふ事實をも含むのである。」

『貨幣を鑄貨として絶えず流通せしめる爲には、鑄貨が絶えず貨幣として凝結することを要する。鑄貨の間斷なき流通は、鑄貨が絶えず大なり小なりの比率を以つて、流通内到處に生じ、且つ流通の存立條件たる鑄貨準備として滯溜せしめられる事を基礎とするものである。此鑄貨準備の形成と配分と、分解と、再形成とは不斷に流轉しつゝあるものであつて、其存在は絶えず消滅し、其消滅は又絶えず存在してゐるのである。アダム・スミスは、此間斷なき鑄貨の貨幣化と貨幣の鑄貨化とを次の形に言ひ現はした。即ち如何なる商品所有者も、自己の販賣する特殊商品の外に尙、自己が依つて購買すべき普遍的商品の一定量を常に準備して置かなければならないと言ふのである。W—G—Mなる流通の第二段 G—M は、多數の購買に分割されるものであり、而して此等の購買は同時に行はれるものではなく、寧ろGの一部が貨幣として休止状態に買かれてゐるとき、他の部分は鑄貨として流通してゐると云ふ風に、時間的に相連続して行はれるものであることは、既に述べ

た通りである。實際のところ、此場合における貨幣は停止された鑄貨に外ならないのであつて、流通鑄貨量の個別的部分は、或時は貨幣形態、或時は又鑄貨形態を採るといふ風に、絶えず其形を換へて現はれるのである。随つて流通要具の經驗する斯くの如き最初の貨幣化は、貨幣流通それ自身の單なる技術的方面を代表するものに過ぎないことになる』(カール・マルクス著『經濟學批評』一八五九年刊第一〇五及六頁。茲に貨幣と對立させた『鑄貨』といふ言葉は、他の諸機能から區別した單なる流通要具としての機能を盡す貨幣を示す爲に用ゐたものである)。以上すべての手段を以つてしても尙充分でないとすれば、其場合には金の追加生産が行はれなければならぬ。或は——畢竟同じ事に歸するが——追加生産物の一部を以つて、貴金屬産出國の生産物なる金と直接又は間接に交換することゝなるのである。

流通要具として使用さるべき金銀の年生産に支出される勞働力と社會的生産機關との總量は、資本制生産方法、總じて又商品生産を基礎とする生産力法のもとに存する空費の重要部分を構成するものである。それは自己に相當した高の可

能的追加的な生産機關及び消費資料、換言すれば現實的の富をば、社會的利用の手から奪ひ取るのである。生産の規模が一定不變であるか、又は生産の伸張程度が一定してゐる場合、斯様な價高き流通機關の費用が節減されることすれば、その結果社會的勞働の生産力は増進することになる。されば、信用制度に伴つて發達する諸種の補助具が、此方面に何等かの影響を及ぼす限り、社會的なる生産行程並びに勞働行程の少なからざる部分は、之れがため現實的貨幣の介在を毫も俟たないで遂行されるやうになるか、又は現實的に作用する貨幣量の作用能力が増進されるやうになるのであつて、いづれにしても資本制度のもとに於ける富は直接に増殖することゝなるのである。

單に此見地から觀察しただけでも、今日の如き範圍に達した資本制生産が、信用制度なくして（換言すれば、單なる金屬貨幣の流通のみに依つて）可能であるか否かといふ馬鹿々々しい問題も亦、以上の説明を以つて落著したことになる。それが可能でないことは明かである。寧ろ資本制生産なるものは、信用制度が無かつたとすれば、貴金屬生産の制限された範圍の裡に發達の障壁を見出したであらう。

一方に我々は、貨幣資本を供給し又は流通せしむる信用制度の生産力について神秘的な觀念を抱いてはならぬ。此問題に關する尙これ以上の説明は、茲に掲ぐべきではない。

我々は今や、現實的の蓄積、換言すれば生産規模の直接の擴大が行はれないで、寧ろ實現された餘剩價値の一部をば、將來生産資本に轉化する目的を以つて、大なり小なりの期間貨幣準備として蓄積して置く場合を考察すべきである。

かく蓄積された貨幣が追加的のものである限り、問題は自明である。即ち此貨幣は、金の生産國から供給される過剰金の一部たり得るのみである。これについて注意すべきことは、斯様な輸入金と交換された國民的生産物は、最早國內には存在して居らないと云ふ事實である。それは金の交換品として、外國へ輸出されてしまつたのである。

反對に、従前と同一量の貨幣が國內に存在してゐると假定すれば、其場合におけ

る蓄積された貨幣、蓄積されつゝある貨幣は、流通内から流れ来たつたものであつて、たゞ其機能が轉化されるといふ一點が異なるのみである。即ちそれは流通貨幣たる状態から、次第に形成されつゝある伏能的貨幣資本たる状態に轉化されるのである。

この場合蓄積される貨幣は、販賣された商品の貨幣形態であつて、かゝる商品の價值の中、所有者から見れば餘剩價値に相當した部分の貨幣形態を代表するものである。(この場合、信用制度は存在しないものと假定する)。而して此貨幣を蓄積する資本家は、それだけ購買せずに販賣することゝなるのである。

此事實を局部的の現象として見れば、其處には何等説明を要することも無いのである。資本家の一部は、其生産物の販賣に依つて實現された貨幣の一部をば市場から生産物を引き上げることなしに保有する。反對に他の資本家部分は、其生産の經營に必要な絶えず回歸する所の貨幣資本を除く以外の全貨幣をば生産物に轉化させるのである。餘剩價値の負擔者として市場に投せられる生産物の一部は、生産機關なり、又は可變資本の現實的要素たる生活必需品なりから成るも

のであり、随つてそれは直接生産の擴大に役立つのである。蓋し茲には、資本家中の一部の者が其餘剩價値を全部消費しつゝある時、他の資本家部分は貨幣資本を蓄積してゐると假定するのではなく、寧ろ前者が現實的に蓄積を行ひ、換言すれば其生産規模を擴大し、生産資本を現實的に増大せしめつゝある時、後者は貨幣形態を以つてする蓄積(即ち伏能的貨幣資本の形成)に従事してゐると假定するに過ぎないからである。かく資本家中の一部の者が生産規模を擴大しつゝある時、他の資本家部分が貨幣を蓄積してゐる場合にも、また其反對の場合にも、流通の必要を充たすには現存の貨幣量だけで充分であるといふ事實には變りがないのである。尙又、一方の側における貨幣蓄積なるものは、現金に依らず單に債務請求權を蓄積するといふだけの方法を以つてしても行ひ得るのである。

けれども資本家階級に依つて爲される局部的な貨幣資本蓄積ではなく、一般的な貨幣資本蓄積の存在を假定する段になると、茲に難問題が生じて来る。我々の假定する如く資本制生産が普遍的に且つ專制的に支配してゐる状態のもとに在つては、資本家階級を除けば労働者階級以外には總じて何等の階級も存在して居

らないこととなる。而して労働者階級が購買する所の一切は、此階級の手に在る労働の總額、換言すれば資本家階級全體に依つて前貸された可變資本の總額に等しいのである。此貨幣は労働者階級に生産物を販賣することに依つて、資本家階級の手に回流して来る。かくして資本家階級の可變資本は、其貨幣形態を回復するのである。今、可變資本の總額が $M \times 100$ 磅(換言すれば、一年間の前貸可變資本ではなく充用可變資本の總額)に等しいと假定する。此可變資本のため一年間に前貸される貨幣量は、回轉速度の如何に従つて大小の差を生ずるものであるが、かかる事實は、茲に攻究する問題の上には何等の變化をも與ふるものではない。資本家階級は右の $M \times 100$ 磅を以つて、一定量の労働力を購買し、換言すれば一定數の労働者に賃銀を支拂ふ。之れは第一の取引である。然る後、労働者は同一の貨幣額を以つて、資本家から一定量の商品を購入する。かくして $M \times 100$ 磅なる貨幣額は資本家の手に回流するのである。之れは第二の取引である。而して以上の取引は不斷に反覆されるのである。要するに $M \times 100$ 磅なる貨幣額を以つてしては、労働者階級は決して、不變資本を代表する所の生産物部分を購入し得るものではない。

ない。況や、資本家階級の餘剩價值を代表する所の生産物部分については尙更らである。労働者階級が此 $M \times 100$ 磅なる貨幣額を以つて購買し得る所のは、つねに前貸可變資本に等しき價值を體現してゐる社會的生産物部分のみである。

そこで、此全般的な貨幣蓄積が、異つた各資本家間への、追加的に輸入された貴金屬の配分——それが如何なる比率を以つて行はれるにしろ——といふ事實以外には何ものをも言ひ現はさないといふ場合を問題外に置いて考へるとき、全資本家階級は抑も如何にして貨幣を蓄積することになるであらうか？

かかる場合、資本家階級に屬する人々は、何づれも皆、其生産物の一部をば、更らに購買せずして販賣せねばならぬことにならぬことになるであらう。彼等が何づれも、其消費の流通要具として流通内に投すべき一定の貨幣準備を所有し、而して此貨幣準備の一定部分が又流通内から各自の手に回流して來るといふ事實は、決して神秘的のものではない。たゞ此場合における貨幣準備は、正に流通上の準備金として餘剩價值の貨幣化に依り生ずるものであつて、伏能的な貨幣資本として生ずるものではないのである。

現實上に現はれた形の上から此問題を考察する時、我々は將來の使用を目的として蓄積される伏能的貨幣資本なるものが、次の諸要素から成ることを見出すのである。

(一) 銀行預金。現實に於いて銀行の支配に屬する貨幣は、比較的少額のものである。此場合における貨幣資本の蓄積は、單なる名目上のものに過ぎない。此場合現實的に蓄積されるものは、貨幣請求權である。而して此貨幣請求權なるものは、それが貨幣化されることある限り、拂出貨幣と預入貨幣との間に均衡が存すればこそ貨幣化され得るのである。貨幣として銀行の手に保留されてゐる金高は、相對的に言へば僅少のものに過ぎない。

(二) 國債權。これは何等の資本でもなく、寧ろ國民の年生産物に對する債務請求權に外ならないのである。

(三) 株式。これは詐偽的のものでない限り、一つの法人に屬する現實的資本についての所有名義であり、且つ又此資本から年々流出し來たる餘剩價值についての支拂命令書である。

以上すべての場合を通じて、貨幣の蓄積は毫も行はれることなく、寧ろ一方に貨幣蓄積として現はれる所のもは、他方から見れば、間斷なき現實的の貨幣支出として現はれるのである。貨幣が其所有者自身に依つて支出されるか、それとも彼の債務者たる他の人々に依つて支出されるかといふ事は、問題の上に何等の變化をも與へるものではない。

資本制生産の基礎上に於いては、退藏貨幣の形成といふ事は夫れ自體として見れば決して目的ではなく、寧ろ流通の停止なり——通例以上に大なる貨幣量は退藏貨幣なる形態を採るから——又は回轉に伴ふ蓄積なりの結果である。或は又、最後に、貨幣の退藏といふ事は、一時は伏能的の形態を採るとは云へ、結局は生産資本として作用すべき貨幣資本の形成といふ事に外ならないのである。

されば一方に於いて、貨幣に實現された餘剩價值の一部が流通内から引き上げられ、退藏貨幣として蓄積されてゐるとき、他の餘剩價值部分は又絶えず生産資本に轉化されるのであつて、追加貴金屬が資本家階級の間に配分される場合を除いて考へるならば、貨幣形態を以つてする蓄積が、凡らゆる個所に同時に生ずるとい

ふことは決してないのである。

商品形態のもとに剰余価値を代表する所の年生産物部分については、他の年生産物部分について行はるゝ所と同一の事が言ひ得る。即ち其流通には、一定額の貨幣が必要である。而して此貨幣額は、剰余価値を代表する所の年々生産される商品量と同様に資本家階級の所有に属するものである。それは本来、資本家階級自身に依り、流通内に投入されたものであつて、流通その者を通して間断なく資本家階級の間配に再配分される。鑄貨一般の流通における如く、此貨幣額についても亦、其一部が此處彼處に絶えず所在を換へて休止しつゝある時、他の部分は又絶えず流通してゐるのである。かゝる蓄積の一部が、貨幣資本形成の目的を以つて故意に生せしめられるか否かといふ事は、問題の上に何等の變化をも與へるものではない。

流通上の冒險に依つて、或る資本家が他の資本家の剰余価値（甚だしきは又資本）の一部を挽ぎ取る結果、貨幣資本についても、生産資本についても、一方に局限された蓄積並びに集積の生ずることはあるが、斯かる事實は此場合問題外に置く

こととする。此事實の一例を擧げるならば、Aなる貸本家が貨幣資本として蓄積する所の占取剰余価値部分は、Bなる資本家の所有に属し、而も彼れの手には回流しない所の、剰余価値の一部であるといふ場合が生じ得るのである。

第三篇 社會的總資本の再生産並に流通

第十八章 緒論 (三十四)

(三十四) 第二稿より。

(一) 研究の對象

資本を以つてする直接の生産行程は、即ち労働行程並に價值増殖行程である。換言すれば、商品生産物を結果とし、餘剩價値の生産を決定動機とする所の行程である。

資本の再生産行程なるものは、斯くの如き直接の生産行程と嚴密の意義における流通行程の兩段階を含む。語を換へて云へば、それは周期的の行程——即ち一定の期間を経る毎に絶えず新たに反覆される行程——として資本の回轉を構成する所の總循環を含むものである。

さて、資本の循環をば「……」なる形態のものとして觀察するにしろ、又は P……P

なる形態のものとして観察するにしろ、いづれにしても直接の生産行程なるものは、常に此循環の一節を成すに過ぎない。前の形態について言へば、直接の生産行程は流通行程を媒介するものとして現はれ、後の形態について言へば、流通行程が直接の生産行程を媒介するものとして現はれる。此生産行程が不斷に更新される事、換言すれば、資本が絶えず生産資本なる形態に再現される事は、右の何づれの場合に在つても流通行程への轉化を條件として行はれるものである。他方に又、不斷に更新される生産行程は、資本が流通部面に於いて絶えず新たに通過する所の轉化、即ち貨幣資本なる形態と商品資本なる形態とを交々資本に附與する轉化の條件となるのである。

然るに各個の資本は、社會的總資本の個別化したる謂はゞ個別的生命を附與せられたる一片に過ぎない。それは丁度、各個の資本家が資本家階級の個別的一分子たるに過ぎないのと同じである。社會的資本の運動は、此資本の個別化した各斷片に依つて爲される運動（各個の資本の回轉）の總和から成るものであつて、各個の商品の轉形が商品界の轉形列（商品流通）の一節たると同様に、個別の資

本の轉形（回轉）は又、社會的資本の循環の一節たるのである。

この總行程は、生産的消費（直接の生産行程）並びにそれを媒介する所の形態轉化（素材の上から見れば交換）と、個人的消費並びにそれを媒介する所の形態轉化（即ち交換）とを含む。それは一方に、可變資本を勞働力たらしむる轉化を含み、随つて又資本制生産行程への勞働力の合體をも含むものである。而して此場合、勞働者は其商品たる勞働力の販賣者として現はれ、資本家は之れが購買者として現はれる。他方に又、商品の販賣といふ中には、勞働者階級に依る商品の購買、換言すれば此階級の個人的消費なる事實が含まれてゐる。此場合には、勞働者階級が購買者として現はれ、資本家は寧ろ勞働者に對する商品販賣者として現はれるのである。

商品資本の流通は、餘剩價値の流通を含む。随つて又それは、資本家の爲に其個人的消費を、餘剩價値の消費を媒介する所の購買並びに販賣をも含むことになるのである。

されば個別的諸資本の循環なるものは、各個の資本が相合して社會的資本を構

成するといふ見地から之れを観察する限り、(換言すれば、此循環をば總體の上から観察する限り)、單に資本の流通を含むのみではなく、又一般的の商品流通をも含むものである。而して此商品流通は、本來たゞ二つの要素のみから成り得るものである。即ち(一)資本それ自身の循環と、(二)個人的消費に歸する商品、換言すれば、労働者が其賃銀を支出し、資本金が其餘剰價値の全部又は一部を支出して得る商品の循環とがそれである。資本の循環なるものは又、餘剰價値の流通(餘剰價値が商品資本の一部である限り——を含み、同様に可變資本の勞働力化(勞銀の支拂)をも含むことは事實である。然しながら商品を目的とする此餘剰價値及び勞銀の支出は、資本流通上の何等の連節ともなるものではない。尤も他は兎にかく、勞銀の支出だけは資本流通の條件となるのである)。

第一卷に於いては、個別的の行爲並びに再生産行程としての両面から資本制生産行程を分析した。即ち餘剰價値の生産と、資本それ自身の生産との兩事實を分析したのである。資本が流通部面の内部に經驗する形態上並びに素材上の變化については深く立ち入ることなく單に其事實だけを假定した。即ち資本金は一

方に、生産物をば其價値通りにて販賣すると同時に、他方にはまた、生産行程の更新と繼續とに必要な物的生産機關をば流通部面の内部に見出すと假定したのである。その場合我々の叙述を要した唯一の取引(流通部面における)は、資本制生産の根本條件としての勞働力の賣買であつた。

本卷第一篇に於いては、資本が其循環中に採る諸種の形態と、此循環自體の種々なる形態とを考察した。かくて第一卷に考察した勞働時間のほかに、尙ほ流通時間なる一要素が加へられることになつたのである¹⁾。

更らに本卷第二篇に於いては、周期的行程としての、換言すれば回轉としての循環を考察した。我々は一方に、異つた資本成分である固定資本と流通資本とが、如何にして異つた期間と異つた様式とを以つて形態上の循環を全うするかを明かにすると同時に、他方には又、勞働期間並びに流通期間の持續上の差異の條件たるべき事情をも攻究したのである。我々は又、循環期間と其各分子間の比率の差異とが、生産行程その者の範圍と餘剰價値の年率との上に及ぼす影響をも明かにした。實際のところ、第一篇に於いては、資本が其循環中に間斷なく採つては捨つる

逐次的の各形態をば主として攻究したのであつたが、第二篇に於いては、形態上の斯かる流動と連続との内部に在つて、與へられたる大きさの一資本が、比率は不定であるにしる、兎にかく時を等しうして、生産資本、貨幣資本及び商品資本なる各種の形態に分割される事實、随つて單に此等の諸資本が相互交代するといふのみではなく、また總資本價值の種々なる部分は絶えず相竝んで、斯くの如き異つた諸状態のもとに存在し作用することになるといふ事實をも考察したのである。就中、貨幣資本については、第一卷に示されなかつた所の特色を以つて之れを表現した。更らに又與へられたる大きさの生産資本を間斷なく作用せしむるために一定資本の若干部分——其大きさは回轉條件の如何に従つて差異を生ずる所の——をば絶えず貨幣資本の形で前貸し更新することを必要ならしむる一定の法則をも見出したのである。

然し第一、第二兩篇に於いて我々の問題となつた所のものは、つねに個別的の一資本のみであり、社會的資本の個別化した一部分に依つて爲される運動のみであつた。

けれども個別的諸資本の循環は相互に錯交し、相互に前提となり條件となるものであつて、それは正にかくの如き錯綜を通して社會的總資本の運動を構成するのである。單純なる商品流通に於いては、一商品の總轉形は商品界の轉形列の連節として現はれたのであるが、それと同様に、個別的資本の轉形は、今や社會的資本の轉形列の連節として現はれるのである。尤も單純なる商品流通は、資本制的にあらざる生産を基礎としても行はれ得るのであつて、必ずしも資本の流通を含むものではないが、社會的總資本の循環は曩にも述べた如く、個別的資本の循環に屬せざる商品流通、換言すれば資本を構成することなき商品の流通を含むものである。

これより——社會的總資本の成分としての個別的諸資本の流通行程——其總體の上から見れば、再生産行程の形態を構成する所の——随つて又此社會的總資本の流通行程を考察することにする。

(二) 貨幣資本の役割

〔以下に掲ぐる問題は、本篇中の尙後に來たる部分に於いて取扱ふべきであるが、

取り敢えず茲に論究して置く。それは即ち、社會的總資本の成分として見た貨幣資本に關する問題である。」

個別的資本の回轉を攻究せる際、我々は貨幣資本をば二つの方面から觀察した。第一に、貨幣資本なるものは、各個の資本が舞臺に現はれ、資本として其行程を開始するとき採る所の形態である。即ちそれは、全行程に動力を供すべき原動機として現はれるのである。

第二に、回轉期間の長さ、其兩成分たる勞動期間及び流通期間相互の比率との如何に従ひ、前貸資本價值中の絶えず貨幣形態を以つて前貸し更新されねばならぬ部分は、其運轉する生産資本に對し、換言すれば連續的の生産規模に對して、異つた比例を保つことになる。然し此比例の如何に拘らず、現實的資本價值中の絶えず生産資本として作用し得る部分は、如何なる事情のもとにも、生産資本の外部に絶えず貨幣形態を以つて存在せねばならぬ前貸資本價值部分に依つて制限される。茲に問題となるものは、抽象的の一平均たる通例の回轉のみである。流通傳滯の補償たるべき追加的貨幣資本のことは、この場合問題外に置く。

右の第一點——商品生産なるものは商品流通を前提し、商品流通は又商品が貨幣として表現される事、即ち貨幣流通の存在を前提する。商品が商品並びに貨幣としての二重存在を與へられることは、生産物を商品として表現せしむる一法則の作用である。同様に、資本制商品生産なるものは、之れを社會的に見ても、個人的に見ても、新たに開始される各營業の原動機たり連動機たるべき貨幣形態における資本即ち貨幣資本の存在を前提する。特に流通資本は、短期間に貨幣資本が絶えず發動機として反覆的に現はれることを前提する。前貸資本價值の全部、換言すれば商品より成る一切の資本成分（勞働力や、勞働要具や、生産材料など）は、絶えず貨幣を以つて購買され再購買されねばならぬ。この場合、個別的資本について言ひ得る事は、又社會的資本についても言ひ得るのである。蓋し此社會的資本なるものは、多數の個別的資本といふ形態を以つてのみ作用するからである。然し右の如く言へばとて、資本の機能範圍の大小が生産規模——資本制度に立脚するものであつても——の大小が、その絶對的制限の上から見て連用貨幣資本量の如何に懸るといふ結論が生ずるものでない事は、第一卷に通へた通りである。

資本には生産上の諸要素が合體せしめられてゐる。而して此等の生産要素の範圍は、一定の限界内について言へば、前貸貨幣資本の大小からは獨立してゐるのである。其利用は勞働力に關する支拂が不變である場合にも、外延的又は集約的に之れを増進することが出来る。かゝる利用増進と同時に、所要貨幣資本が増大する事はあるとしても（換言すれば、勞銀が増騰する事はあるとしても）、それは利用の増進に比例して行はれるものではなく、其意味に於いて貨幣資本は毫も増大しないことになるのである。

生産的に利用されて而も資本の價值要素とはならない自然素材、即ち土地や、海や、生鏝や、森林などは、貨幣資本の前貸を増大しないでも同一數の勞働力の緊張を大ならしむることに依つて、集約的又は外延的により著しく利用される。生産資本の現實的要素は斯くの如く、貨幣資本の追加を必要とすることなしに増殖せしめられるのである。追加的助成材の爲に貨幣資本の追加が必要となる場合にも、資本價值の前貸形態たる貨幣資本は、生産資本の効力の増大に比例して増加するものではなく、其意味に於いて貨幣資本は毫も増大しないことになるのである。

同一の勞働要具、随つて又同一の固定資本は、其日々の使用時間を延長することに依つても、また其充用上の能率を増進せしめることに依つても、固定資本の爲の貨幣支出を追加することなくしてより、有効に利用し得るものである。かゝる場合には、固定資本の回轉がより迅速となるのみであるが、これと同時に又、固定資本の再生産要素もより迅速に供給されるのである。

自然素材のことは暫く措き、何等の費用をも要せざる自然力をば、或時は強大、或時は又微弱なる效力を以つて、生産行程に要素として合體せしめることも出来る。而して此場合における効力の程度は、資本家に對し何等の費用をも負擔せしめざる諸種の方法と科學上の進歩とに依つて左右されるものである。

生産行程上における勞働力の社會的結合と、個別的勞働者における累積された熟練とについても、やはり同一の事が言ひ得るのである。ケレーの計算せる所に依れば、土地所有者の得る所は決して充分ではない。なせならば、土地が現存の如き生産能力に達する迄には、何時とも知れぬ頃から資本又は勞働が其處に投せられて來たのであるが、土地所有者の手には斯かる資本又は勞働の必ずしも全部が

支拂はれるものではないからと云ふのである。(土地から奪ひ取られる生産能力のことは、勿論話頭に上つてゐないのである)。此論法で行くと、個々の労働者は、野蠻人をば近世の機械工にまで仕上げられるため全人類の要した労働を標準として、支拂を受けなければならぬことになる。それで、我々は寧ろ斯う考ふべきである。即ち従来土地に加へられ、而も土地所有者及び資本家に依つて占有された一切の不拂労働を計算するならば、過去に於いて土地に投せられた總資本は幾度も幾度も高利を附して返還されたことになり、随つて社會は久しき以前に幾度も幾度も土地所有を買ひ戻したことになるのである。

「労働生産力の増進なるものは、それが資本価値の追加支出を前提せざる限り、先づ生産物の量を大ならしむるのみであつて、生産物の価値を大ならしむるものではないことは事實である。(尤も労働生産力が斯く増進すると、同一の労働を以つてより多量の不變資本を再生産し、随つて其価値を保存し得ることになる)。けれども同時に又、それは新たな資本素材を形成するものであつて、その結果、資本蓄積の増大の基礎を生せしむることになるのである。」

社會的労働の組織その者と、随つて又労働の社會的生産力の増進とが、大規模の生産と、随つて又個々の資本家に依る大量の貨幣資本前貸とを必要ならしむる場合について言へば、此等の結果は或程度まで、僅少者の手に資本が集中することに依り生ずるものであつて、それがため運用資本価値の量、随つて又その前貸形態たる貨幣資本の量の絶對的増大を必要とするものでない事は、本書第一卷中に述べた通りである。個々の資本量は、その社會的總額が増大しないでも、僅少者の手に集中される結果増大し得るものであつて、要するに個別的資本の分割が變化するに過ぎないのである。

最後に、回轉期間が短縮されると、より僅少の貨幣を以つて、同一の生産資本を運轉し、又は同一の貨幣資本を以つて、より多額の生産資本を運轉し得るやうになることは、前篇に述べた通りである。

然し以上すべての事實は、嚴密の意義における貨幣資本問題とは何等關係する所なきものであつて、單に左の事柄を示すに過ぎないのである。即ち前貸資本——其自由形態について言へば、一定の貨幣額より成る所の與へられたる價值高——

高なるものは一度生産資本に轉化されると、此前貸資本自身の價值制限に依つては制限せられざる、而して寧ろ一定の範圍内に於いては、外延的に集約的に、種々異つた作用を爲し得べき生産的なる可能性を含むやうになるといふことである。

生産要素たる生産機關及勞働力の價格が與へられてゐるとすれば、その場合、商品の形を以つて存在する此等生産要素の一定量を購買するに必要な貨幣資本の大きさは一定してゐる。或は又、前貸すべき資本價值の大きさが一定してゐることになる。けれども此資本が價值及び生産物の形成者として作用する範圍は、伸縮自在の可變的なものである。

右の第二點——社會的勞働及び生産機關の中、磨滅貨幣の補充を目的として年々貨幣の生産又は購買に支出されねばならぬ部分は、それだけ社會的生産の範圍を減損せしむるものであることは論を俟たない。然るに一部分は流通要具、一部分は又退藏貨幣として作用する貨幣價值になると、それは既に取得されて存在し居るものであり、勞働力や、生産機關として産出された生産物や、自然的の富源など

の外部に在つて此等の物と並存してゐるのである。

かゝる貨幣價值は、此等の物に對する制限とは見做し得ない。それが生産要素に轉化され、他國民の生産物と交換されるとすれば、生産の規模は擴大され得ることになるであらう。然し斯くする爲には、貨幣が依然として世界貨幣たる役割を演ずべきことを必要とするのである。

生産資本の運轉に要する貨幣資本の量は、回轉期間の長短に従つて大小の差を生ずるものである。同様に又、勞働期間と流通期間とへの分割が、貨幣形態を採つて潜伏状態又は機能停止状態に在る資本の増殖を必要とすることも曩に述べた通りである。

回轉期間が勞働期間の大小に依つて決定されるといふ方面から見れば、他の條件に變化なき限り、回轉期間なるものは生産行程の物質的性質に依つて決定されるものであつて、生産行程の特殊な社會的性質に依つて決定されるものではない。然しながら資本制生産の基礎の上に立つ限り、長期間に互つた廣範圍の作業を行ふには、長期間に互つた多額の貨幣資本前貸を要するのである。随つて斯くの如き

方面に行はれる生産は、個々の資本家が貨幣資本を支配する限界に依つて左右されることになる。此制限は、信用制度と、それに關聯した社團（例へば株式會社）とに依つて打破される。されば貨幣市場の攪亂は、斯種の營業を休止せしめるが、それと同時にまた斯種の營業は貨幣市場の攪亂を喚び起すことにもなるのである。

社會的生産の基礎上に於いては、次の問題を決定することが必要である。即ち長期間に亙り、利用上の効果を與ふべき生産物を供給することなくして生産部面から勞働力及び生産機關を引き上げる此等の作業は、一年間連續的にもしくは數回にわたつて、生産部面から勞働力及び生産機關を引き上げるのみではなく、尙また此等の物を其處に供給する所の生産諸部門をば毀損することなしに、如何なる程度まで執行せられ得るかといふ問題である。勞働期間の短き營業部門の勞働者が生産物を引き上げるのみで供給しないといふ現象は、短期間にしか互らぬのであるが、勞働期間の長き營業部門に在つては、生産物は供給される前に長期間引き上げられることになるのであつて、此點は社會的生産のもとに於いても、資本

制生産のもとに於いても、變りはないのである。蓋し此事實は、當該勞働行程の物的條件に基くものであつて、社會的形態に基くものではないからである。貨幣資本は、社會的生産のもとに於いては廢除される。勞働力及び生産機關は、社會に依つて種々なる營業部門に配分されるやうになる。思ふに生産者は、社會的消費資料の在荷中から自己の勞働時間に相當した量の分配を受くべき小切手券を與へられることになる。この小切手券は貨幣ではない。それは流通するものではないのである。

貨幣資本の必要が勞働期間の長期持續に基く場合について言へば、之れは左の二事實を條件として成立するものであることは、我々の認める所である。第一に、總じて貨幣なるものは、各個の資本が（信用のことは暫く措き）生産資本に轉化せんとする場合に採る所の形態であるといふ事。而して此事實は、資本制生産の本質に、商品生産全般の本質に基くものである。第二に、長期間に亙り絶えず勞働力及び生産機關が社會の手から引き上げられるに拘らず、貨幣に再轉化され得べき何等の生産物も、此期間を通じて社會の手に返還されないといふ事實に依つて、

多額の貨幣前貸が必要になる事。

・資本の前貸は貨幣形態を以つてしなければならぬと云ふ上記第一の事情は、貨幣その者の形態の如何に依り、換言すれば、それが金屬貨幣であるか、信用貨幣であるか、乃至はまた價值表章其他であるかの如何に依つて廢除されるものではない。また上記第二の事情は、勞働、生活資料並びに生産機關をば、流通内に等價を返還せずして引き上げしむる所の貨幣媒介若しくは生産形態の如何に依つて、何等の影響をも受くるものではないのである。

第十九章 過去に於ける本問題の論究 (三三六)

(三三六) 茲から第八稿は始まつてゐる。

(一) 重農派

一年間に於ける國民的生産の、價值に於いて一定した結果は、他の事情に變化なき限り、單純なる再生産（換言すれば、規模不變なる再生産）が行はれ得るやうに流通に依つて配分されることは、ケネーの『經濟表』の中に大掴みに概括されてゐる所である。彼れは前年期の收穫を以つて此生産期間の起點に該當せしめ、而して無數の個別的流通取引をば、直接に其特徴的な社會的集團運動——經濟上の機能に依つて限定された大なる社會階級間の流通——の方面から觀察してゐるのである。是れについて我々の興味を惹くことは、總生産物の一部は他の總ての生産物部分と同様に、之れを**使用上の對象**として見れば、前年期に於ける**勞働**の新たな結果であるが、同時に又それは**従前通り**の現物形態を以つて再現する**舊資本價值**の負擔者に過ぎないといふ事實である。それは流通するものではなく、其生産

者たる小作農業者階級の手に保留されて、此階級の爲に資本奉仕を再開することになるのである。ケネーは年生産物の斯くの如き不變的な資本部分の中に、尙他の不當要素をも含ませてゐるが、然し其眼界の局限されてゐたお陰で問題の要點を掴むことが出来た。即ち彼れに依れば、人間労働が餘剩價值を生産する唯一の投資部面は農業であり、随つて資本制度の立場から見れば、農業こそ現實に於いて生産的なる唯一の投資部面であること云ふことになるのである。經濟上の再生産行程なるものは、其特別社會的な性質の如何に拘らず、此農業部面に於いては常に自然的の再生産行程と錯交するものである。而して此自然的再生産行程の一目瞭然たる條件は、社會的再生産行程の條件を明瞭ならしめ、流通の魔術にのみ基く思想混亂を防止することになるのである。

學說の符票は單に購買者を欺瞞するのみではなく、又しばしば販賣者をも欺瞞するものであつて、就中此點に於いて、それは他の物品の符票から區別される。ケネー自身並びに彼れの直弟子たちは、彼等の封建的看板に示された所を信じてゐた。此傾向は今日に至る迄、我が机上學者たちの間に存續してゐるのである。が、

實際のところ、重農派學說なるものは、資本制生産について興へられた最初の組織的説明を意味するものである。此學說によれば、經濟上の全運動は産業資本の代表者たる小作農業者階級に依つて指導され、農業は資本制的に、換言すれば、大規模なる資本家的小作農業者の企業として經營される。直接の土地耕作者たるものは、賃銀労働者である。生産は單に使用物品を造り出すのみではなく、また其價值をも造り出す。而して生産の起動動機となるものは、即ち餘剩價值の獲得である。餘剩價值の生ずる所は、生産部面であつて流通部面ではない。流通に依つて媒介される社會的再生産行程の負擔者たる職分を盡す三階級の中、「生産的」労働の直接の搾取者たり、餘剩價值の生産者たる資本家的小作農業者は、餘剩價值を占有するのみに止まる人々から區別されてゐるのである。

重農派學說の資本主義的性質は、此學說の盛時に於いても既に、一方にはリングゲ及びマブリー、他方には自由なる小土地所有の辯護者たちの間に反對を喚び起したのである。

アダム・スミスはケネーの與へた正確なる分析に細工を加へて、例へば後者の區別した『原前貸』と『年前貸』を『固定資本』と『流通資本』(三十一)とに普遍化したのであるが、單にそれのみではなく、また全く重農派的の錯誤に陥つた點も此處彼處に見受けられるのであつて、再生産行程の分析上における彼れの退歩(三十七)は、それだけ益々顯著となるのである。一例を擧ぐれば、彼れは小作農業者が他の如何なる種類の資本家に依るよりも大なる價值を生産するとの自説を論證する爲に、斯う言つてゐる。——『他の如何なる資本も、資本家的小作農業者の資本を以つてする以上に多量の生産的勞働を運轉するものではない。單に彼れの勞僕のみではなく、勞働家畜も亦、生産的勞働者から成るものである。』勞僕にとつては、氣持のいい御挨拶である！』『農業に於いては、人類のほかには尙自然も亦勞働するのであつて、此勞働には何等の費用もかゝらないのであるが、其生産物は最大の費用を要する、勞働者の生産物と同様に、價值を有するものである。農業上の最も重要な作用は、自然の豊度を増進すると云ふことよりも——それも爲ない譯ではないが——寧ろ之れを人類にとつて最も有用なる植物の生産に利導してゆくと云ふ點に、目

的を置いてゐるやうに見える。荆棘や雜草の生ひ茂つた田野からでも、耕耘の此上なく行き届いた葡萄園や穀物畑におけると同様に、多量の作物が供給されることは屢々見受けられる所である。栽培及び耕耘は屢々、自然の現實的豊度を刺戟するよりも寧ろ調節することに役立つものである。而して此調節上の勞働が爲し盡された後にも、尙刺戟の方面に於いて爲すべき事が澤山に残されてゐるのである。されば農業上に使用される勞働者及び勞働家畜(一)は、製造業方面の勞働者に依つて爲さるゝ如く、彼等自身の消費額と、彼等を使用する所の資本と、資本家の受くべき利潤との和に等しき價值を再生産するのみではなく、それよりも遙かに大なる價值を再生産することになる。即ち彼等は、小作農業者の資本及び全利潤以上に尙、土地所有者の地代をも再生産することを常とするのである。地代なるものは、土地所有者が小作農業者に使用を貸與する自然力の産物と見るこゝが出来ぬ。それは此自然力の推定程度の如何に従ひ、換言すれば土地の自然的なる、又は人爲的に確保されたる推定豊度の如何に従つて、大小の差を生ずるものである。要するに地代なるものは、人爲の結果と見做し得べき一切のものを控除又

は補償したる後に尙殘存する所の自然の結果であつて、それが總生産物の四分の一を下ることは滅多になく、三分の一を超過することは屢々見受けられる所である。製造業方面に使用される如何なる等量の労働も、斯く多大の生産を全うし得るものではない。蓋し製造業に於いては、自然は何事をも爲さず、人間が一切を爲すからである。而して再生産なるものは常に、それを遂行する能因の力に比例しなければならぬのである。されば農業上に投せらるゝ資本は、製造業方面に充用さるゝ如何なる等額の資本に比しても、より多量の生産的労働を運轉するのみではなく、尙又その使用する生産的労働の量に比例して、土地の年生産物と、一國の労働と、其住民の現實的なる富及收入との上にも遙かに大なる價值を附け加へることになるのである』(『諸國民の富』第二部、第五章、第二四二頁)。

(三十六) 是れについても、若干の重農派學者、殊にチユルゴーは、スミスの爲に路を開いたのであつた。チユルゴーはケネーや其他の重農派學者に比して、より屢々、前貸なる語の代りに資本なる語を使用し、而して更に著しく、製造業者の前貸即ち資本をば、小作農業者の夫れと同一視したのである。一例を擧ぐれば、『此等の人々(製造企業者)と同様に、彼等(資本金的小作農業者)も亦、其資本の回收に相當する以上の額を確保し

なければならぬ』云々(テール編、ギョーマン全集、チユルゴー全集、巴里一八四四年刊第一卷、第四〇頁)。

(三十七) 『資本論』第一卷、邦譯本第三册第五六頁、註三十二。

アダム・スミスは『諸國民の富』第二部第一章の中に、『種子の全價值も、嚴密の意義に解すれば矢張り一つの固定資本である』と言つてゐる。即ち此場合、資本は資本價値に等しいことになる。それは『固定的』の形態を以つて存在してゐるのである。『種子なるものは、土地と穀倉との間を往復することには云へ、決して所有者を換へることなく、随つて現實的に流通するものではない。小作農業者は、それを販賣することに依つては、寧ろ増大せしむることに依つて、利潤を得るのである』(第一八六頁)。不變資本の價値が新たな形態に再現するといふ、再生産行程の重大なる要素は、ケネーの既に認めてゐた所であるが、スミスは右の叙述の中に此事實を認めずして、寧ろ流通資本と固定資本との區別に對する今一つの、而も虚偽なる例解を認めたと過ぎなかつた。其處に彼れの見解の偏狭なる所以が在る。スミスは『原前貸』及び『年前貸』をば『固定資本』及び『流通資本』に翻譯したの

であるが、この場合『資本』なる語を採用した點は確かに彼れの進歩である。資本なる概念は彼れに依つて普遍化され、重農派の與へた『農業上』の適用部面に對する特殊の考慮から獨立せしめられることになつた。スミスの退歩は、『固定』及び『流通』なる概念をば決定的の區別と見做して固持した點に在る。

(二) アダム・スミス

(I) スミスの一般的見地

アダム・スミスは『諸國民の富』第一部第六章第二頁に述べて言ふ。——『如何なる社會に在つても、各商品の價格は終極に於いて、此等三部分（賃銀、利潤、地代）中の何づれか一つ、又は其全部に歸する。而して如何なる進歩した社會に於いても、此等三部分の總べては、多かれ少なかれ組成分子として極めて大多數の商品の價格に移轉されるものである』(三十八)。或は進んで第六三頁に叙述されてゐる如く『賃銀と利潤と地代とは、總べての收入及び總べての交換價值の本來的な三源泉である。』『商品價格（又は總べての交換價值）の組成分子』に關するアダム・スミスの斯かる所説については、後に尙立ち入つて論究することにする。

(三十八)『極めて大多數の商品の價格』といふ一句の意味につき、讀者の錯誤を避くたため一言して置く。右の叙述は、アダム・スミス自身が此一句をば如何様に説明してゐるかを示すものである。例へば海魚の價格は地代を含まず、賃銀と利潤を含むのみである。又蘇格蘭細石の價格は賃銀を含むのみである。蓋し『蘭格蘭の若干地方における賃民たちは、蘇格蘭細石なる名稱を以つて知られた様々な色の小石を海岸で集めることを營業としてゐる。彫石業者が此小石の代金として彼等に支拂ふ所の價格を構成するものは、彼等の賃銀のみである。地代なり利潤なりは、其價格の何等の部分をも構成するものではないからである。』

彼れは更らに言ふ。——『以上は個別的に見た各單獨の商品について言ひ得ることであるから、各國における土地及勞働の年生産物全體を構成する所の總體として見た一切の商品についても亦、同様のことが言ひ得なくてはならない。かゝる年生産物の總價格、又は交換價值も亦、右と同一の三部分に歸すべきであつて、或は勞働の賃銀、或は資本の利潤、或は又所有地の地代として一國における様々な住民の手に分配されなければならないのである』(前掲第二部第二章第一九〇頁)。

アダム・スミスは斯くの如く、個別的に見た凡らゆる商品の價格、並びに『一國に

おける土地及労働の年生産物の……總價格又は交換價值』をば、賃銀労働者、資本家及び土地所有者の得べき収入の三源泉たる賃銀と利潤と地代とに分解したる後更らに迂路を経て第四の要素——資本なる要素——を密輸入しなければならなかつた。而して此密輸入は、總収入と純收入とを區別することに依つて爲されたのである。即ち『大なる一國における住民全體の總収入は、彼等の土地及労働の年生産物全體を包括するものであり、而して純收入なるものは、第一に固定資本、第二に流通資本の維持費を控除したる後、彼等の手に残存する所の部分、換言すれば彼等が其資本を侵害することなくして消費貯藏の中に加へ、又は自己の生存と慰愉と快樂との爲に支出し、得る所の部分を包括するものである。彼等の現實的な富も亦、總収入には比例せずして、寧ろ純収入に比例するものである』(前掲第一九〇頁)。

これに就き左の叙述を與へて置く。

(一) アダム・スミスが茲に取扱つてゐる所のものは明かに單純なる再生産のみであつて、規模の擴大した再生産即ち蓄積ではない。彼れは運用資本の維持に必

要なる支出についてのみ語つてゐる。『純』収入なるものは、社會なり又は個別的資本家なりの年生産物中『消費基金』に加へられ得る部分に等しい。然し此基金の範圍は運用資本を侵害してはならないのである。かくして個人的並びに社會的なる生産物價值の一部は、賃銀、利潤、又は地代の何づれにも歸せずして、寧ろ資本に歸するものとなるのである。

(二) アダム・スミスは總収入と純収入との區別といふ遁辭に依つて、彼れ自身の學說から逃避してゐる。個々の資本家も、資本家階級全體も、乃至は又謂ゆる國民も、生産上に消費したる資本に換へて商品生産物を受ける。而して斯かる商品生産物の價值——此生産物自身の比例分に依つて表現され得る所の——は、一方に支出資本價值を補償する者であつて、収入(Einkommen)即ち原語通りに言へば *Revenue* を構成することになるのである。然し善く注意せよ！それは資本收入である。他方に又右の商品生産物價值は、『或は労働の賃銀、或は資本の利潤、或は又所有地の地代として、一國における様々な住民の手に分配され』る所の價值部分、即ち通常収入と稱せられてゐる所のものをも補償する。要するに、個々の資本家に

ついで言つても、一國全體について言つても、全生産物の價值は、何人かの手に歸すべき収入を構成することになるのである。然し此價值は、一方には資本収入であり、他方には又それとは異つた収入である。かくて、商品價值を其組成要素に分解することに依つて削除せられる所のは、収入なる語の意義曖昧といふ裏口から更らに運び還へされることになるのである。けれども、生産物價值の中収入として受納せられ得るものは、豫め生産物の中に存在する所の部分のみである。若し資本を収入として受納すべきであるとすれば、それは豫め支出されたものであることを要する。

アダム・スミスは更らに言ふ。——『通例の利潤率の最低限は、各投資の蒙るべき損失を償ふに充分なる程度を常に幾分か超過して居らねばならぬ。純益を代表する所のものは、實に此餘利額のみである。』如何なる資本家が、利潤を以つて必要なる資本支出の意味に解してゐるか？』『總益と稱せられるものは、單に此餘利額のみではなく又右に掲ぐる如き異常なる損失の爲に保留される部分をも含むことは、我々の屢々認める所である』(前掲第一部、第九章、第七二頁)。然し之れは、總益

の一部として見た餘利價值部分が生産上の保險基金を構成しなければならぬこと云ふこと以外に、何事をも意味するものではない。此保險基金は、餘利労働の一部に依つて造り出される。其意味に於いて、此餘利労働部分は直接に資本を生産することになる。換言すれば、再生産上に使用すべき基金を生産することになるのである。また固定資本其他の『維持』に要する支出について言へば(曩の引抄を見よ)、新資本を以つてする消費された固定資本の補償なるものは、何等の新たな資本支出をも意味するものではなく、舊來の資本價值が別個の形態を以つて更新されることを意味するに過ぎないのである。然るにアダム・スミスは、右の維持費の中に固定資本の修繕費をも算入してゐるのであつて、此費用も亦前貸資本の價格の一部を構成することになる。資本家は之れを一時に放下するの要なく、資本機能の持続中漸次に且つ必要に應じて放下するものであり、且つ既に收納した利潤の中からもそれを放下し得るのであるが、かゝる事實は利潤の源泉を些も變化せしむるものではない。此費用の生じ來たる價值部分は、保險基金の場合における如く、修繕基金の場合にも亦、労働者が餘利労働を供給するといふことを證

明するに過ぎないのである。

所でアダム・スミスの語る所に依れば、純収入即ち特殊の意義に於ける収入の範圍から除外せらるべきものは、固定資本の全部と、それから固定資本の維持、修繕及び更新に要する流通資本分の全部とであつて、實際のところ、消費基金たるべき現物形態を採つて居らない一切の資本は、純収入の範圍から除外されることになるのである。

『固定資本の維持に要する金支出が、社會に於ける純収入の範圍から除外されねばならぬことは明かな事實である。産業上の機械及び道具の運轉に要すべき原料も、また此原料を所期の形態に轉化するに必要な労働の生産物も、決して斯かる収入の一部たり得るものではない。勿論、此労働の價格が斯くの如き収入の一部たり得ることは事實である。なせならば此方面に使用される労働者は、其賃銀の全價值をば直接の消費基金に投じ得るからである。然し他の種類の労働に在つては、價格〔換言すれば、此労働の代價として支拂はれる賃銀〕も、生産物〔此労働が體現する所の〕も、共に消費基金の中に移轉される。即ち價格の方は、労働者の

消費基金の中に移轉され、生産物の方は、此労働者の労働に依つて生活と慰愉と快樂とを増進せしめられる他の人々の消費基金の中に移轉されるのである』(前掲第二部第二章第一九〇及一九一頁)。

アダム・スミスは此場合、生産機關の生産に従事する労働者と、消費資料の直接の生産に従事する労働者との間における極めて重要な區別に達著してゐる。前の労働者に依つて造られる商品生産物の價值の中には、労働の總額に等しき、換言すれば、労働力の購買に投せられた資本部分の價值に等しき一成分が含まれてゐる。此價值部分は、其自然體の上から言へば、該労働者に依つて造られた生産機關の一定分として存在するものである。彼れが賃銀として受ける貨幣は、彼れの收入となるものであるが、然し彼れの労働は、彼れ自身にとつても、また他の人々にとつても、消費し得べき生産物を造るものではない。かくて彼れの造る生産物は、社會的消費基金——それ以外のものとしては『純収入』が實現され得ない所の——の供給に充てらるべき年生産部分の何等の要素をも構成しないことになるのである。

以上、勞銀について言つた事は、また生産機關價值の中、利潤及地代なる範疇のもとに、餘剩價值として最初先づ産業資本家の収入を構成する所の部分についても言ひ得る所であるが、アダム・スミスは右の説明に此一事を附け加へることを忘れてゐる。此價值部分も亦消費し得べき物品ではない生産機關として存在してゐるのであつて、それが貨幣化したる後に初めて、第二種の勞働者に依つて生産された消費資料の中から、自己の價格に相應した一分量を確保し、かくして之れを所有者の個人的消費基金の中に移轉せしめることが出来るのである。然し右の一事を附け加へることを忘れたアダム・スミスは、それだけ又著しく次の事實を認むべき筈であつた。即ち年々造られる生産機關の價值の中、此生産機關を造る生産部面の内部に使用される生産機關——即ち生産機關の生産に使用される生産機關——の價值に等しき部分、換言すれば、此生産部面に充用される不變資本の價值に等しき價值部分は、其存在する現物形態に依つてのみではなく、また其資本機能に依つても、収入を構成する各價值部分の範圍から絶對的に除外されるといふ事である。

第二種の勞働者——即ち直接消費資料の生産に従事してゐる勞働者——については、アダム・スミスの言ふ所は必ずしも正確ではない。即ち彼れは言ふ。此種の勞働に於いては、勞働の價格も、生産物も、共に直接の消費基金に移轉される。即ち價格（換言すれば、勞銀として支拂はれる貨幣）の方は、勞働者の消費基金の中に移轉され、生産物の方は、此勞働者の勞働に依つて生活と慰愉と快樂とを増進せしめられる他の人々の消費基金の中に移轉されるのである。』けれども勞働者は其勞働の『價格』換言すれば、其勞銀の依つて支拂はるべき貨幣を消費資料として生活することは出来ない。彼れは消費資料を購買することに依つて、此貨幣を實現するのである。而して此消費資料の一部は、彼れ自身の生産にかゝる商品種類から成り得るものである。他方に於いて、彼れ自身の生産物は、單に勞働搾取者の消費にのみ歸する如き生産物であり得る。

アダム・スミスは斯くの如く、固定資本をば一國における『純收入』の範圍から全く除外したる後、更らに語を續けて言ふ。

『固定資本の維持に要する全費用は、斯く必然的に社會の純收入から除外される

ことになるのであるが、流通資本の維持費についてはさうではない。流通資本を構成する所の四種の部分たる貨幣と、生活資料と、原料と、完成生産物との中、最後の三つは流通資本の中から引き出されて、社會の固定資本なり、直接の消費に充用すべき基金なりに移轉されることを常とするものである事は、既に述べた通りである。消費し得べき物品の中、固定資本の維持に使用されることなき部分は、悉く直接の消費を目的とする基金の中に移轉され、かくして社會における純收入の一部を構成することになるのである。されば社會における純收入の中、流通資本の此等三部分の維持に依つて減損せしめられる分は、固定資本の維持に要する年生産物部分以上に出づるものではない』（前掲第二部第二章第一九二頁）。

以上は要するに、生産機關の生産に役立つことなき流通資本部分は消費資料の生産に移轉されるといふ（換言すれば、社會における消費基金の形成に充用すべき年生産物部分に移轉されるといふ）重語に過ぎないのである。然し其次に説かれてゐる事は重要なものである。

『社會の流通資本は、此點に於いて個々人の流通資本とは異つてゐる。個々人の

流通資本は、個々人の純收入から全く除外されるものであり、決して其一部分たるを得るものではない。それは單に利潤からのみ成り得るのである。所で各個人の流通資本は、彼れを一員とする社會の流通資本の一部を構成することになることは云へ、而も之れが爲め必ずしも絶對的に社會の純收入から除外されるものではなく、寧ろ其一部分たり得るのである。小賣商人の店舗に在る商品は、決して彼れ自身の直接の消費に充用すべき在荷に組み込まれてはならぬものであるが、それでも他の人々の消費基金には屬せしめられ得るのであつて、此等の人々は他の基金を以つて確保した収入に依り、彼れの資本なり、彼等の資本なりを減損せしめずして、彼れのため右の商品の價值と彼れの利潤とを補償し得ることを常とするものである』（同上）。

以上の叙述に依つて、我々は次の事實を教へられる。

(一) 各個別的資本家の固定資本並びに其再生産（其機能のことは、スミスの氣付かなかつた所である）及び維持に必要な流通資本と同様に、消費資料の生産に使用される流通資本も亦、彼れの純收入から除外される。此純收入は、彼れの利

潤からのみ成り得るのである。かくて彼れの資本を補償する彼れの商品生産物部分は、彼れ自身の収入を代表する所の價值部分とはなり得ないことになる。

(二) 各個別的資本家の流通資本は、社會における流通資本の一部となる。此事は各個の固定資本におけると全く同一である。

(三) 社會の流通資本は各個の流通資本の總和に過ぎないとは云へ、個々の資本家の流通資本とは異つた性質を有するものである。個々の資本家の流通資本は決して彼れの収入の一部たり得るものではない。然るに社會の流通資本の一部(即ち消費資料から成る部分)は、同時に又社會の収入の一部となり得るのである。或は又、曩に彼れの述べてゐる如く、此流通資本部分の爲に、社會の純収入は必ずしも年生産物の一部分だけ減損せしめられることを要するものではない。事實に於いて、アダム・スミスが茲に流通資本と名づけてゐるものは、消費資料の生産に従事してゐる資本家たちに依つて年々流通内に投せられる所の、年々生産される商品資本に外ならないのである。彼等に依つて年々生産される斯くの如き商品生産物の全部は、消費し得べき物品から成るものであり、随つて社會における純

収入(勞銀を含む)の實現され支出さるべき基金を構成するものとなる。アダム・スミスは小賣商人の店舗に在る商品を例に採る代りに、寧ろ産業資本家の倉庫に貯藏されてゐる大量の財貨を例に採るべきであつた。

アダム・スミスにして若し、曩には彼れが固定資本と名づけたるもの、攻究、今や又彼れが流通資本と名づくるもの、攻究に際し、其念頭に迫り來たる諸種の思想斷片を總合したとすれば、彼れは蓋し次の結論に達したであらう。――

(I) 社會的年生産物は二つの部類から成る。其一は生産機關を包含し、他は消費資料を包含するものである。而して此雙方は互ひに分離して取扱はなければならぬ。

(II) 生産機關より成る年生産物部分の總價值は、左の如く區分される。即ち第一の價值部分は、此生産機關の生産に消費された生産機關の價值に外ならざるもの。之れは新たな形態を採つて再現した資本價值に過ぎないのである。第二の價值部分は、勞働力の購買に投せられた資本の價值、換言すれば、生産機關を造る生産部面の資本家に依つて支拂はれた勞銀の總額に等しい。而して最後に、第三

の價值部分は、此生産部面における産業資本家の利潤（地代を含む）の源泉たるものである。

第一の價值部分（即ちアダム・スミスに依れば、右の第一部類の生産に使用される個別的資本總體における再生産された固定資本部分）は、個別的資本家なり社會なりの『純収入から明かに除外されるものであつて、決して其一部たるを得るものではない。』此價值部分は常に資本として作用するものであつて、収入として作用することはないのである。其意味に於いて、各個別的資本家の『固定資本』は決して社會の固定資本から區別されるものではない。他方に、生産機關から成る社會の年生産物の他の價值部分——随つて又、此生産機關總量の可除部分として存在する所の價值部分——は、同時に又、生産機關の生産に關與する凡らゆる當事者の収入、即ち労働者の賃銀、資本家の利潤及地代を構成することは事實である。

然し社會の立場から見れば、それは収入を構成するものではなく、寧ろ資本を構成するのである。（尤も社會の年生産物なるものは、其成員たる個別的資本家たちの生産物の總和からのみ成るのである。）かゝる價值部分は、其性質上から既に生産

機關としてのみ作用するものであり、必要な場合消費資料として作用し得べき部分でさへも、新たな生産の原料又は助成材として役立つやうに定められてゐるのである。然しそれが斯くの如きものとして——即ち資本として——作用するは、其生産者の手中に於いて行はれることではなく、寧ろ其使用者の手中に於いて行はれるのである。

(III) 其使用者とは、即ち上記第二部類の資本家たる直接消費資料の生産に従事する人々を謂ふのである。彼等は右の價值部分に依て、消費資料の生産上消費された資本の回収を受ける。（尤も之れは斯かる資本の中、労働力に轉化される部分、即ち第二部類の労働者に支拂はれる賃銀總額に相當した部分については當て嵌らないのである。）それと同時に、此消費された資本——今や消費資料の形で、其生産者たる資本家の手に保留されてゐる所の——は又、社會的の立場から見れば、第一部類の資本家と労働者とが依つて、其収入を實現する所の消費基金たるものである。

アダム・スミスにして若し此點まで分析を續けたとすれば、全問題の解決につい

て缺くる所は殆んど無かつたであらう。彼れは正に問題を解決せんばかりの所に達してゐた。なせならば、彼れは現に次の事實を認めてゐたからである。即ち社會における年生産物の總體を構成する商品資本中の或種のもの（即ち生産機關）の一定の價值部分は、其生産に従事する個々の労働者及び資本家の収入を構成することは事實であるが、然し社會の収入を組成すべき何等の要素ともなるものではなく、同時に又他の種類のもの（即ち消費資料）の一定の價值部分は、其個々の所有者——此投資部面の生産に従事する資本家——の資本價值を構成するものであるが、然しそれは社會的収入の一部たるに過ぎないといふのである。けれども以上説くところに依つて、之れだけの事は明かになる。

第一に、社會的資本なるものは個別的諸資本の總和に等しく、随つて年々造られる社會の商品生産物（商品資本）は、斯かる個別的諸資本の商品生産物の總和に等しいものであり、かくして各個の商品資本について當て嵌るところの、商品價值の其組成諸部分への分解は、全社會の商品資本についても同様に當て嵌らなくてはならず、現實に於いても亦結局は當て嵌ることになるのであるが、それにも拘らず

此等の組成部分が社會的總生産行程の上に表現される現象形態は、異つて來るのである。

第二に、單純なる再生産の基礎上に於いてさへ、單に勞銀（可變資本）及び餘剩價值の生産が行はれるのみでなく、また新たなる不變資本價值の直接の生産も行はれる。（尤も労働日なるものは、労働者が可變資本を再生産し、事實に於いて彼れの労働力の購買價格に對する等價を生産する所の部分と、彼れが餘剩價值なる利潤、地代などを生産する所の部分との二つからのみ成るものである）。蓋し生産機關の再生産に支出され、且つ其價值が勞銀と餘剩價值とに分割される日々の労働は消費資料の生産に支出された不變資本部分に取つて代る所の、新たなる生産機關として實現されることになるからである。

此問題に關する主要の困難——其大部分は、以上の説明に依つて解決されたものであるが——は、蓄積の攻究の際に生ずるものではなく、寧ろ單純なる再生産の攻究の際に生じて來るのである。さればこそ、曩のケネー（『經濟表』）と同様に、アダム・スミス（『諸國民の富』第二部）も亦、社會における年生産物の運動と、流通に依つ

て媒介される此生産物の再生産とを論究するに當り、つねに單純なる再生産から出發することになつたのである。

(2) スミスに依る $x+y$ への交換價値の分解

各個の商品——随つて又社會の年生産物を構成する一切の商品（アダム・スミスは何處に於いても、當然に資本制生産の存在を前提してゐるから）——の價値又は交換價値は、三つの組成部分から成るものであり、換言すれば、勞銀と利潤と地代とに歸するものであるといふアダム・スミスの定説は、商品價値が $x+y$ （即ち前貸可變資本の價値と餘剩價値との和）に等しいといふ主張に約元され得る。而して我々は彼れの公然たる許可を以つて、利潤及地代をば斯く m を以つて示した共通の單位に約元し得るものである事は、左に掲ぐる諸引抄に依つて知られる通りである。これらの引抄に於いては、先づ一切の枝葉事項、なかつく商品價値なるものは専ら $x+y$ を以つて示した要素から成るといふ定説に一致しない一切の外觀的又は現實的事項は、之れを省略することにする。

製造業について言へば、『勞働者が材料の上に加へる價値は……二つの部分に別かれる。其一は勞働者の賃銀に相當するものであり、他は勞働者の雇主が材料及賃銀として前貸した全資本の利潤に相當するものである』（前掲第一部、第六章、第四一頁）。『製造業に従事する勞働者は雇主から賃銀の前貸を受けるとは云へ、雇主は此勞働者の爲に現實上何等の費用をも負擔せしめられるものではない。蓋し此賃銀の價値は、加工を受けた對象の増大せる價値の裡に利潤と合して保存されることを常とするからである』（前掲第二部、第三章、第二二一頁）。『彼れ（雇主）の爲に資本機能を盡した後……生産的勞働の維持に』投せられる資本部分は、『彼等（勞働者）の収入を構成することになるのである』（前掲第二部、第三章、第二二三頁）。

アダム・スミスは右の章の中に明かに述べてゐる。——『各國の土地勞働に依る年生産物の全部は……當然二つの部分に別かれる。其一——而もより、大なることを常とする所の——は、先づ資本を補償し、且つ何等かの資本の中から取り去られた生活資料と原料と完成生産物を更新することに充用されるものであり、

今一つの部分は此資本の所有者の手に歸すべき資本利潤としてなり、又は土地所有者たる他の何人かの手に歸すべき地代としてなり、兎にかく何等かの収入の形成に充用されるものである』(第二二二頁)。曩にアダム・スミスに依つて教へられた如く、資本であると同時に又何人かの収入を構成する所のものは、資本の一部に過ぎない。生産的労働の購買に投せられる所の資本部分が、即ちそれである。此資本部分——可變資本——は、先づ雇主の手中に於いて雇主の爲に『資本機能』を盡くし、次いで生産的労働者自身の爲に『収入を構成する』。資本家は其資本價值の一部を労働力に轉化し、かくすることに依つて又それを可變資本に轉化する。

此轉化に依つてのみ、單に斯様な資本部分ではなく、又彼れの全資本も産業資本たる機能を盡すことになるのである。労働力の販賣者たる労働者は、勞銀の形で其労働力の價值の支拂を受ける。労働力なるものは、彼れの手に在る限り販賣し得べき商品に過ぎず、其販賣に依つて彼れを生活せしむる所の商品に過ぎない。随つて又、それは彼れの収入の唯一の源泉たる商品に過ぎないことになるのである。それが可變資本として作用するは、其購買者たる資本家の手中に於いてのみ

行はれることである。而して資本家に依る其購買價格の前貸は、單なる外觀的事實に過ぎない。なせならば、其價值は豫め労働者に依つて資本家の手に供給されてゐるからである。

アダム・スミスは斯く、製造業に於ける生産物の價值が $\frac{1}{4}$ (四は資本家の利潤) に等しいことを明かにしたる後、更らに論を進めて、農業上の労働者は『彼れ自身の消費額と、彼れの使用する資本〔即ち可變資本〕と、資本家の利潤との總和に等しい價值を再生産する以外に、尙『小作農業者の資本と、其一切の利潤との上に、土地所有者の地代をも再生産することを常とするものである』と説いてゐる。(前掲第二部第五章、第二四三頁)。地代が土地所有者の手に歸するといふ事實は、茲に考察する問題にとつては全く何うでもいいことである。地代なるものは土地所有者の手に移轉される以前、すでに産業資本家たる小作農業者の手中に存在して居ねばならぬ。それは何人かの収入たる以前、すでに生産物價值の一部たることを要するのである。随つてアダム・スミス自身の見地を以つてすれば、地代も利潤も、生産労働者が絶えず自己の勞銀(換言すれば、可變資本の價值)と共に再生産す

る剰余価値の成分に過ぎないことになる。即ち地代も利潤も剰余価値mの部分であつて、アダム・スミスが見る所を以つてすれば、凡らゆる商品の価格は結局 $\frac{1}{10}$ に分解されることとなるのである。

あらゆる商品（随つて又年々造られる商品生産物）の価格が、勞銀と利潤及地代との和に歸するといふ定説は、スミスの述作中此處彼處に撒布されてゐる奧義的主張に於いては次ぎの形態を採つてゐる。即ち各商品（随つて又年々造られる社會の商品生産物）の價值は、勞働力の購買に投せられ、且つ勞働者に依つて絶えず再生産される所の資本價值と、勞働者の勞働に依つて附け加へられる剰余価値との和なる $\frac{1}{10}$ に等しいといふ事である。

アダム・スミスの所論の斯かる終極的結論は、同時に又、（尙後に説くところを見よ）彼れが商品價值の分割され得べき諸要素について與へた偏局的な分析の源泉を示すものである。けれども此等の要素の各個における分量決定と、その全體における價值總額の限界とは、此等の要素が同時に又、生産に従事する異つた階級の、異つた収入源泉を構成するといふ事實の上には何等關係する所がないのである。

る。

アダム・スミスは「勞銀と利潤と地代とが總べての収入及び總べての交換價值の本來的な三源泉であつて、他の如何なる収入も結局は此等の中の一つに淵源するものである」（前掲第一部、第六章第四八頁）と言つたが、此主張の中には種々雑多の錯誤が詰め込まれてゐるのである。

（一）勞働を以つてすると否とを問はず、兎にかく直接生産に従事する事なき一切の社會成員は、最初に生産物を取扱ふ所の階級である勞働者、産業資本家及び土地所有者の手を通しての外は、本來の順序に於いて、年々造られる商品生産物の別け前（即ち彼等の消費資料）を受けけることは出來ない。此意味に於いて、彼等の収入は實質上、勞銀（生産的勞働者の）、利潤及び地代から派生し來たるものであり、随つて此等の本源的収入に對し派生的収入として現はれることになる。けれども一方に又、右の意味に於いて派生的と言ひ得る此等の収入の受領者たちは彼等が或は國王、或は僧侶、或は大學教授、或は又賣淫婦其他の者として盡す社會的職分に依つてそれを受けるのである。かくて彼等は、此等の職分をば自己の収入の本

來的源泉と見做し得るやうになる。

(二) 此點に於いて、アダム・スミスの馬鹿々々しき錯誤は絶頂に達する。彼れは先づ商品の價值諸成分と商品に體化されてゐる價值生産物の總額とについて正確なる決定を與へ、次いで此等の價值成分が如何にそれと同數の種々なる收入源泉となるかを(三十九)論證することから發足したのであるが、彼れは斯様に價值から收入を推論した後、こんどは反對に、『交換價値の成分』であつた收入をば、其『本來的の源泉』たらしむるに至つた。(而して之れは、彼れの支配的見解として存続したものである)。かくて俗學的經濟學に對する門戸は廣く開放されることになつたのである。(我がロツシアーを見よ)。

(三十九) 此句はマルクスの原稿に在る通り逐語的に再録したものであるが、現在の體の聯絡から云ふと、それは前後の叙述と矛盾するやうに見える。この外見的矛盾は進んで第四章(『アダム・スミスの資本及收入觀』)の叙述中に解決されてゐるのである。

(3) 不變資本分

我々は之れよりアダム・スミスが如何に商品資本の中から資本の不變價值分をば魔術的に逐ひ出さうとしてゐるかを見ることにしよう。

『例へば、穀物の價格の一部は、土地所有者の地代に相當する。』此價值部分の起原は、それが土地所有者の手に支拂はれて、地代なる形態のもとに彼れの收入を構成するといふ事實とは關係する所がない。それは丁度、他の價值諸部分が利潤及び勞銀として收入源泉を構成するといふ事實に對し、此等の價值部分の起原が關係する所ないのと同じである。

『いま一つの價值部分は、穀物の生産に使用されてゐる勞働者〔竝に勞働家畜！と彼れは附け加へてゐる〕の賃銀及び生計に相當し、更らに第三の部分は小作業者の利潤に相當する。此等の三部分は、直接又は終極に於いて、穀物の全價格を構成する如く見える〔まことに、さう見えることは事實である〕』(四十)。

(四十) アダム・スミスは此場合特に拙劣な例を選んだ譯であるが、其事は暫く問題外に置く。元來、穀物の價值が勞銀と利潤と地代とに分解されるのは、勞働家畜に依つて消費される榮養資料が勞働家畜の賃銀として表現され、勞働家畜が賃銀勞働者と

して、随つて賃銀労働者は又労働家畜として表現さるゝが故にのみ行はれるのである。

この全價格（換言すれば、全價格の分量決定）は、それが三種の人々の間に配分される事實からは絶対に獨立してゐる。『第四の部分は、小作農業者の資本、又は彼れの労働家畜並びに他の農具の磨滅分を補償する爲に必要であるやうに見えるかも知れない。然し如何なる農具例へば労働用馬の價格も、上記の三部分たる労働用馬を畜養する土地の地代と、此畜養の労働と、斯かる土地の地代並びに斯かる労働の賃銀を前貸する小作農業者の利潤とから成るといふ事實は、茲に考慮を要する所である。かくて穀物の價格なるものは、馬の價格と生存費とを再生産し得るとは云へ、其全價格は、直接、又は終極に於て、同一の三部分たる『地代と、労働（賃銀の意味）と、利潤』とに歸することとなるのである』（第一部、第六章、第四二頁）。

以上は、アダム・スミスが其驚くべき教義の論據として提供した所の一切を逐語的に紹介したものである。彼れの與へた證明なるものは、要するに同一の主張を反覆したものに過ぎない。彼れは例へば、穀物の價格は單に $\frac{1}{4}$ 日から成るのみで

はなく、また穀物の生産上に消費される生産機關の價格、換言すれば、小作農業者が労働力以外のものに投じた資本價值からも成ることを認めてゐる。然し彼れは言ふ。——此總べての生産機關の價格も矢張り $\frac{1}{4}$ 日に分割されるのであつて、此點は穀物の價格に於けると異なる所はない。たゞアダム・スミスは、次の一事を附け加へることを忘れてゐる。それは即ち、生産機關の價格なるものは更に、生産機關その者の生産上に消費された生産機關の價格をも含むといふ事實である。彼れは一つの生産部門から他の生産部門へ、此生産部門から又更に第三の生産部門へと説き及ぼしてゐる。商品の全價格が『直接』又は『終極に於いて』 $\frac{1}{4}$ 日に分解されるといふ主張は、左の論證が與へれた場合にのみ空虚なる遁辭ではなくなるであらう。それは即ち、直接、消費された生産機關の價格 $\frac{1}{4}$ 日に分解される價格を有してゐる商品生産物が、右の『消費された生産機關』をば全部に互つて再生産する所の、而も夫れ自身は單なる可變資本（換言すれば、労働力に投せられる資本）の放下に依つてのみ産出される所の商品生産を通して、結局は補償されるといふ論證である。かくて此後ちの商品生産物の價格は、直接 $\frac{1}{4}$ 日に等しくな

るであらう。随つて又前の商品生産物の価格の $c + v + m$ （ c は不変資本分）も結局は $v + m$ に分解され得ることになるのである。アダム・スミスの與へた蘇格蘭細石蒐集者の實例は、斯様な論證に相當するものであつたが、彼れ自身は其うは信じて居らなかつた。蓋し彼れの見る所に依れば、蘇格蘭細石蒐集者は（一）如何なる種類の餘剩價值をも供給することなく、單に自己の勞銀を生産するのみであり、且つ（二）何等の生産機關をも使用しないからである。（然し事實に於いては、彼等も亦、細石運搬用の籃、囊、其他の容器をば生産機關として使用してゐるのである。）

アダム・スミスは後に自説を顛覆して、而も其矛盾を意識するに至らなかつた事は、我々の既に述べた所である。かゝる矛盾の源泉は、正に彼れの科學的出發點の裡に求められる。勞働に轉化された資本は、それ自身の價值よりも大なる價值を生産する。如何にしてか？即ち生産行程の持續中、勞働者は自己の加工する物件に、其物件自身の購買價格に對する等價のほかに尙ほ勞働者の手に歸せずして其使用者たる人々の手に歸する餘剩價值（利潤及び地代）をも構成する所の價值を印刷することに依つて——と、アダム・スミスは言ふ。けれども勞働者に依つて

爲される所、又爲され得る所は、此一點に盡きてゐるのである。一日の産業勞働について言ひ得る事は、また全資本家階級が一年間に運轉する勞働についても同様に言ひ得る所である。かくて年々造られる社會的價值生産物の總量は、勞働者が自己の購買價格として支出されたる資本價值を補償する所の等價と、それ以上に尙彼れが其使用者の手に供給せねばならぬ追加價值との和である。 $v + m$ 以外のものには分割され得ないことになる。然るに、商品價值の此等兩要素は又同時に、再生産に關與する異つた階級の収入源泉ともなるものである。即ち第一の要素は勞働者の収入たる勞銀を構成し、第二の要素は餘剩價值を構成するものであつて、産業資本家は此餘剩價值の一部をば利潤として自己の手に保留し、他の部分をば土地所有者の収入たる地代として手放すのである。かくの如く、年々造られる價值生産物の中には、 $v + m$ 以外には何等の要素も含まれてゐないことが事實である以上、更らにそれ以外の價值要素なるものは抑も何處から來ることになるのであらう？我々は此場合、單純なる再生産の基礎上に立つてゐるのである。年々支出される勞働の總額は、勞働力に投せられたる資本價值の再生産に必要な勞働と、餘

剰價値の造出に必要な労働とに分解されるものである以上、労働力以外のものに投せられる資本價値を生産すべき労働なるものは、抑も何處から來ることになるであらうか？

問題は次の如くになつてゐる。

(一) アダム・スミスは商品の價値を決定するに、賃銀労働者が労働對象に附け加へる所の労働量を以つてした。彼れは此労働對象をば『材料』と呼んでゐる。蓋し彼れは製造業を取扱つてゐるのであつて、製造業なるものは元來、他の労働の生産物に加工することを特徴とするからである。然し斯かる事實は、問題の上に何等の變化をも與ふるものではない。労働が一つの物に附け加へる（而して此『附け加へる』といふ言葉は、アダム・スミスの言ひ現はしである）價値は、價値を附け加へられる所の斯かる對象が、其附け加への行はれる以前、すでに夫れ自身價値を有してゐたか否かといふ問題からは全く獨立してゐるのである。

要するに、労働者は商品なる形態のもとに一つの價値生産物を造り出すのであつて、アダム・スミスに依れば、此價値生産物の一部は労働者の受くる賃銀の等價た

るものである。随つて此部分の大小は、賃銀の價値範圍の如何に依つて決定されることになる。即ち賃銀の價値範圍が大であるか、小であるかに従つて、労働者が其賃銀に相當した價値を生産又は再生産する爲に附け加へねばならぬ労働量の上にも、大小の差が生じて來るのである。他方に又、労働者は斯くして生ずる限界以上に尙、彼れの雇主たる資本家の爲に餘剩價値を構成する所の労働を附け加へる。而して此餘剩價値の全部が資本家の手に保留されてゐるか、それとも其一部が第三者に譲渡されねばならぬかといふ問題は、賃銀労働者に依つて附け加へられる餘剩價値の質的決定（即ち、それが兎にかく餘剩價値であるといふ事實）の上にも、また量的決定（即ち、大小決定）の上にも、絶對に變化を與ふるものではないのである。餘剩價値なるものは、生産物の他の總ての價値部分と同様に價値である。たゞ異なる所は、労働者は後にも前にも、それに對する何等の等價をも受くることなく、資本家は等價を支拂はずして此價値を占有すると云ふ一事である。商品の總價値は、労働者が其商品の生産上に支出した労働量に依つて決定され、而して此總價値の一部は、それが賃銀の價値に等しいといふ事實、即ち賃銀の等

價であるといふ事實に依つて決定される。随つて、此總價値の第二部分たる餘剰價値も亦、勢ひ同様に決定されることとなる。即ちそれは、生産物總價値の中から勞銀の等價に相當する部分を控除した殘額に等しい。換言すれば、商品生産に依つて造り出された價値生産物の、勞銀に對する等價に相當した價値部分以上に出づる超過分に等しいのである。

(二) 個々の勞働者が個々の産業經營に於いて生産する所の商品について言ひ得ることは、又あらゆる營業部門全體の年生産物についても言ひ得ることであり、個々の生産的勞働者の日勞働について言ひ得ることは、又生産的勞働者階級の全部に依つて實現される年勞働についても同様に言ひ得ることである。斯様な年勞働は、支出された年勞働の量に依つて決定される所の總價値をば年生産物の中に『固定せしめる。』(之れは又スミスの言ひ現はしである)。此總價値は勞働者階級が其年賃銀の等價を造り出すところの年勞働部分(事實に於いては、かゝる賃銀その者)に依つて決定される部分と、勞働者が資本家階級の爲に餘剰價値を造り出すところの追加的年勞働に依て決定される他の部分とに分割される。即ち

年生産物の中に含まれてゐる年々造られる價値生産物なるものは、勞働者階級の受くる年賃銀と、資本家階級の爲に年々供給される餘剰價値との二要素からのみ成るのである。然るに、年賃銀なるものは勞働者階級の収入を構成し、一年間における餘剰價値の總額は資本家階級の収入を構成するものであつて、要するに此雙方は、年消費基金に對する相對的の受分を代表するものであり(かゝる見地は、單純なる再生産を説明する場合には當を得てゐるのである)、年消費基金に於いて實現されるのである。かくて不變資本價値を容るゝ餘地は、生産機關の形で作用する資本の再生産を容るゝ餘地は、何處にも存しなくなるのである。而も収入として作用する一切の商品價値部分が、社會的消費基金に充用さるべき年々造られる勞働生産物に一致することは、アダム・スミスが其著『諸國民の富』の結論中に明言してゐる所である。即ち彼れは言ふ。——『國民の収入とは抑も如何なるものであるか。又は……國民が年々消費する所のものを供給する基金とは、抑も如何なる性質を有するものであるか。これを説明することは、實に本書最初の四部を通じての目的である』(第一二頁)。而して彼れは、此結論の冒頭に早くも次の如く述

べてゐる。——『各國民の年労働なるものは、各國民が一年間に消費し、而して此労働の直接の生産物なり、又は斯かる生産物を以つて他國民から購買した物品なりから成ることを常とする一切の生活資料を最初に供給する所の基金である』(第一一頁)。

所でアダム・スミスの第一の錯誤は、彼れが年々造られる生産物、價值をば年々造られる價值、生産物と同一視した事に在る。後者は其一年間における労働の生産物に過ぎないのであるが、後者はそれ以上に尙、年生産物の生産上に消費される所の、其前年、部分的には、更に、以前の年に生産された、一切の價值要素をも含むのである。即ち前者の中には、單に再現するのみなる生産機關の價值も含まれてゐるのであつて、此價值は其年に支出された労働に依つて生産されたものでもなければ、又再生産されたものでもない。アダム・スミスは右の如き混同に依つて、年生産物の不變價值分を驅逐したのである。而して此混同は又、彼れの根本觀念に於る他の錯誤に基くものである。即ち彼れは、労働をれ自身の二重性質、換言すれば、労働力の支出として價值を造り出すといふ意味の労働と、具體的なる有用労働

として使用對象(使用價值)を造り出すといふ意味の労働との兩面を區別しなかつた。年々造られる諸商品の總價值、随つて年生産物の全部は、其一年間に作用する有用労働の生産物である。社會的に充用される労働が網狀組織に錯綜せる諸種の有用労働として支出されたればこそ、此等すべての商品は存在するに至つたものであり、また斯かる事實に依つてのみ、此等の商品の總價值の中に、その生産上消費された生産機關の價值が新たなる現物形態に再現して保存されることになつたのである。要するに年生産物の總體は、其一年間に支出された有用労働の結果であるが、年々造られる生産物、價值の中、同一年間に造り出されるものは、一部分に過ぎない。而して此部分こそ、即ち同一年間に實現される労働總量を代表する所の、年々造られる價值、生産物なのである。

かくて上記の引抄に示されてゐる『各國民の年労働なるものは、各國民が一年間に消費する……一切の生活資料を最初に供給する所の基金である』といふアダム・スミスの見地は、有用労働なる一面にのみ立脚せるものであることが知られる。此労働こそ、此等一切の生活資料に、消費し得べき形態を與へたものであるこ

とは事實である。然しこれは、以前から年々傳承し來たつた労働要具及び労働對象の協助なくしては不可能なことであり、随つて『年労働』なるものは、價值を構成する方面から觀察すれば、決して此労働に依つて完成せしめられた生産物の全價值を造り出したものではないといふ事實、換言すれば、價值生産物なるものは生産物價值よりも小であるといふ事實は、アダム・スミスの氣付かなかつた所である。

此分析に就いてアダム・スミスが其すべての後繼者に比し、一步も進んだ點に達して居らなかつたことは、非難し得ざる所であるが、而も正確なる解決への一步は既に重農派學者の間に見出されてゐたのである。然し又一方に於いて、彼れは更らに混沌たる状態のもとに陥つてゐた。それは主として、商品價值一般に關する彼れの『大乗的』見解が、絶えず小乗的見解に依つて無効とされた結果である。由來、彼れの思想に於いては、此小乗的見解の方が重きをなしてゐたのであつて、たゞ其間、彼れの科學的本能が時々大乗的の立場を再顯せしめてゐるに過ぎないのである。

(4) アダム・スミスの資本及收入觀

各商品（随つて又年生産物）の價值の中、勞銀の等價たるに過ぎない部分は、資本家が勞銀として前貸する資本（換言すれば、彼れの前貸總資本中の可變分）に等しい。彼れは前貸資本價值の此部分をば、賃銀勞働者が供給する所の商品中に含まれてゐる新たに産出された價值部分に依つて回收するのである。可變資本の前貸なるものは、尙未だ販賣し得る迄に完成されてゐないか、又は完成されても未だ販賣されない生産物中の勞働者の有に歸すべき部分が、貨幣を以つて支拂はれるといふ形を採ることもあり、或は勞働者の供給した商品を販賣することに依り豫め獲得した貨幣を以つて、彼れの受くべき生産物部分を支拂ふこともあり、或は更らに此貨幣が信用に依つて豫め確保されることもあるが、此等のいづれの場合に於いても、資本家は貨幣として勞働者の手に歸すべき可變資本をば支出することになるのである。同時に又、勞働者は其供給する商品の價值の一部を以つて此商品の總價值中彼れ自身の手に歸すべき分を新たに生産するのであつて（換

言すれば、彼れ自身の勞銀の價值を生産するのであつて、資本家から見れば此價值部分は、即ち右の支出資本價值の等價となるのである。此價值部分は、勞働者自身の造つた生産物の現物形態を以つて彼れの手に支拂はれるものではなく、貨幣を以つて支拂はれるのである。かくて資本家は其前貸資本價值中の可變分をば今や商品形態を以つて保有し、勞働者は其販賣勞働力の等價をば貨幣形態を以つて保有することになる。

要するに、勞働力の購買に依つて可變資本に轉化される資本家の前貸資本部分は實現されつゝある勞働力として生産行程その者の内部に作用するものであつて、それは此力の支出に依り商品形態を採つた新價值として新たに生産、換言すれば再生産されることになるのであるが（即ち、前貸資本價值の再生産、換言すれば新らたなる生産が行はれることになるのであるが）、勞働者の方は其販賣勞働力の價值（又は價格）をば、自己の勞働力の再生産要具たる生活資料の爲に支出することとなるのである。可變資本に等しい貨幣額が、勞働者の所得となり収入となるのであつて、此収入は彼れが其勞働力をば資本家の手に販賣し得る期間だけし

か持續しないのである。

賃銀勞働者の商品たる彼れの勞働力其者は、それが資本家の資本に合體され資本たる機能を盡す限りに於いてのみ、商品として作用するのであるが、他方に又、貨幣資本として勞働力の購買に支出された資本家の資本は、勞働力の販賣者たる賃銀勞働者の手中に於いて収入機能を盡すのである。

これに就いては、アダム・スミスに依つて區別されなかつた流通上並びに生産上の種々なる行程が錯綜してゐるのである。

第一に、流通、行程上の諸行爲。勞働者は其商品勞働力をば資本家の手に販賣する。資本家が此商品の購買に使用する貨幣は、彼れの立場から見れば、價值増殖の爲に投ずる貨幣である。即ち貨幣資本である。それは支出されるものではなく前貸されるものである。（此前貸貨幣その者を資本家が何處から得て來るかといふ問題を離れて考へるならば、『前貸』——即ち重農派の所謂アヴァンス——なる語の眞意義は、要するに上述の如くなるのである。資本家が生産行程上の目的の爲に支拂ふ一切の價值は、彼れの立場から見れば前貸されたことになるのである。

つて、かゝる支拂が豫め行はれるか、事後に行はれるかといふことは關係する所がない。いづれにしても、此價值は生産行程その者に向つて前貸されたものとなるのである。此場合には、各商品販賣の場合におけると同一の事實が行はれるに過ぎない。即ち販賣者は使用價值（現在の場合で言へば勞働力）を與へ、其價值を貨幣の形で支拂はれる。（或は其價值を貨幣として實現する）。又購買者は貨幣を與へて、其代りに商品それ自體（現在の場合で言へば勞働力）を受けするのである。

第二に、生産行程の内部に入ると、購買勞働力は運用資本の一部となるのであつて、勞働者自身は今や生産機關なる現物形態を以つて存在する所の資本諸要素から區別したる、資本の特殊の現物形態として作用するに過ぎないものとなる。生産行程の持續中、勞働者は其勞働力を支出することに依つて、彼れが生産物に轉化せしめた生産機關に一つの價值を附け加へる。それは彼れの勞働力の價值に等しいのである。（餘剩價值のことは問題外に置く）。即ち勞働者は、勞銀の形で彼れの手前に前貸されたる、又は前貸さるべき資本部分をば、商品の形で資本家のために

再生産することになる。換言すれば、資本家のために此資本部分の等價を生産するのであつて、要するに勞働力購買のため新たに『前貸』し得べき資本をば、資本家のために生産することとなるのである。

第三に、商品が販賣される時、資本家は其販賣價格の一部を以つて自己の前貸した可變資本を回収する。これに依つて、彼れは新たに勞働力を購買し得るやうになると同時に、また勞働者は新たにそれを販賣し得るやうになるのである。

如何なる商品販賣に於いても、此取引それ自體についてのみ觀察する限り、商品の代價として得た貨幣が販賣者の手中に於いて如何になり、又購買した使用物品が購買者の手中に於て如何になるかといふ事は、全くどうでもよい問題である。随つて單なる流通行程が考慮に入る限り、資本家の購買した勞働力が彼れの資本價值を再生産し、他方に勞働力の購買價格として得られた貨幣が勞働者の収入を構成するといふ事實も亦、全く關係する所なき問題となるのである。勞働者の商品たる勞働力が彼れの『収入』を構成するといふ事實も、また此商品の購買者がそれを使用することに依つて自己の資本價值を再生産するといふ事實も、勞働力な

る商品の價值量に對しては影響するが所ないのである。

労働力の價值——換言すれば、此商品の適當なる販賣價格——は、労働力の再生産に必要な労働量に依つて決定され、此労働量は又労働者の生活必需品の生産（換言すれば、彼れの生存）に必要な労働量に依つて決定されるものであるから、労働銀なるものは結局労働者の依つて生活すべき収入となるのである。

アダム・スミスは『生産的労働の維持に投せられた資本部分なるものは……彼れ「資本家」のために資本機能を盡したる後……彼等「労働者」の収入を構成する』（第二二三頁）と言つてゐるが、之れは全く謬つた見解である。資本家が其購買労働力の代價として支拂ふ貨幣は、此労働力が彼れの資本の物的要素に合體せしめられ、かくすることに依つて初めて彼れの資本が生産資本たる機能を盡し得るやうになる限りに於いて、『彼れのために資本機能を盡す』ものである。我々は次の如く區別する。即ち労働力なるものは、労働者の手に保有されてゐる間は商品であつて資本ではない。而してそれは、労働者が絶えず其販賣を反覆し得る間は、彼れの収入を構成するものである。それは販賣後、資本家の手に入つたとき、生産

行程その者の内部に於いて資本たる機能を盡すことになる。この場合二重に作用するものは労働力である。即ち労働力なるものは、労働者の手中に於いては價值通りに販賣される所の商品として役立ち、それを購買した資本家の手中に於いては、價值及び使用價值を生産する所の力として役立つのである。けれども労働者が資本家から受ける貨幣は、労働力の使用が資本家の手に與へられた後、換言すれば労働力が既に労働生産物の價值として實現された後に初めて支拂はれる。此價值は労働者に支拂はれる以前、すでに資本家の手に保有されてゐるのである。随つて、二重に作用する所のものは貨幣ではない。即ち貨幣は最初に可變資本の貨幣形態として作用し、次に労働銀として作用するものではない。寧ろ労働力の方が、二重に作用するのである。即ちそれは先づ販賣の際に商品として作用し（支拂ふべき労働銀を約定するに當り貨幣は單に觀念的の價值尺度として作用するに過ぎないのであつて、それは此場合まだ資本家の手に保有されることを要しない）次に生産行程の内部に資本として、換言すれば資本家の手に保有されてゐる所の使用價值及び價值の生産要素として作用するのである。労働力は先づ商品形態

を以つて、労働者に支拂はるべき等價を供給するのであつて、資本家は後にそれを貨幣形態を以つて労働者に支拂ふ。要するに、労働者が資本家から支拂を受ける所の財源は、労働者自身に依つて造り出されたものである。然し問題は之れだけで盡きるものではない。

労働者は其收納貨幣をば、自己労働力の保存を目的として、即ち資本家階級と労働者階級との總體について言へば、資本家を資本家たらしめ得る唯一の要具をば、資本家の爲に保存することを目的として支出するのである。

労働力の間斷なき賣買は、かくして一方に労働力をば資本の要具として永存せしめる。これに依つて、資本が商品（即ち價値を有する使用物品）の創造者として現はれると同時に、又労働力を購買する所の資本部分は、労働力自身の生産物に依つて絶えず再生産されることになる。即ち労働者に對する支拂の財源たるべき資本は、絶えず労働者自身に依つて造り出されることになるのである。他方に又労働力の間斷なき販賣は、労働者の絶えず更新される生活源泉となり、かくして彼れの労働力は、彼れに収入を供し生活を與へる所の能力として現はれるのであ

る。茲に謂ふ収入とは、要するに商品（労働力）の間斷なく反覆さるゝ販賣に依つて達成せらるべき價値の占有（而して此價値は又販賣さるべき商品の不斷の再生産に役立つのみである）といふことに過ぎない。

此意味に於いて、アダム・スミスが、労働者自身に依つて造り出された生産物の價値の中、勞銀の形で等價を支拂はれる所のものに相當した部分こそ、即ち労働者の収入源泉たるものであると言つたのは當を得てゐる。けれども此事實は、商品の斯かる價値部分の性質又は大小の上に變化を生せしめるものではない。それは丁度、生産機關が資本價値たる機能を盡せばとて、生産機關の價値に變化が生せしめられるものでなく、又は一つの直線が三角形の底邊もしくは楕圓の直徑となればとて、其直線の性質及び大小の上に變化が生せしめられるものでないのと同様である。いづれにしても、労働力の價値は斯る生産機關の價値と同様に、獨立して決定されるものである。労働力の價値に相當した商品價値部分は、それを構成する所の獨立した一因子としての収入から成るものではなく、また此價値部分が收入に分解してゆくものでもない。労働者に依つて絶えず再生産される此新價値

は、彼れの得べき収入の源泉となるものであるが、反對に彼れの収入は、彼れに依つて生産された新價值の組成分となるものではない。彼れの産出した新價值の中、彼れ自身の手支拂はれる分の大小に依つて、彼れの収入の價值量が決定されるのであつて、其反對の事は行はれないのである。新價值の斯かる部分が彼れの收入を構成するといふ事實は、此價值分が如何に成り行くかといふ事、換言すれば、此價值分の充用の性質を示すに止まり、其形成——他の總ての價值形成における如く——とは關係する所がないのである。毎週予が十ターレルを受けるとして考へて見るに、此十ターレルの價值性質も、價值大小も、毎週斯様な収入が與へられるといふ事實のために何等の變化をも生せしめられるものではない。他の總ての商品における如く、勞働力においても亦、其價值は勞働力なる商品の再生産に必要な勞働量に依つて決定される。此勞働量が勞働者の生活必需品の價值に依つて決定されるといふ事實、換言すれば、それが勞働者の生活條件その者の再生産に必要な勞働に等しいといふ事實は、勞働力なる商品獨特の性質である。然しそれは、駄獸の價值が其生存に必要な生活資料の價值に依つて、換言すれば、か

かる生活資料の生産に要する人間勞働の量に依つて決定されるといふ事實以上に獨特のものではない。

所で、此問題につきアダム・スミスの腦裡に上記の全混亂を生せしめたものは、實に『収入』といふ範疇である。彼れの説く所に依れば、各種の収入は、年々生産される所の新たに生ずる商品價值の『組成部分』たるものであり、而して反對に、此商品價值が資本家の立場から見て、分割される二つの部分、即ち勞働購買のため貨幣形態を以つて前貸される可變資本の等價と、同様に又資本家の物ではあるが、然し彼れに對して何等の費用をも負擔せしめざる他の價值部分——餘剩價值——との雙方は、収入の源泉となるのである。可變資本の等價は、新たに又勞働力を目的として前貸される。其意味に於いて、この等價は賃銀なる形態を以つて勞働者の收入を構成することになるのである。他の價值部分たる餘剩價值の方は、資本家のために何等の資本前貸をも補償するの要なきものであつて、彼れはそれを消費資料（生活必需品並びに奢侈品）の購買に支出することが出来る。換言すれば、それは何等かの種類の資本價值たらしめられることなく、寧ろ彼れの収入として消

費され得るのである。かゝる収入の前提條件たるものは、即ち商品価値その者である。而して此商品価値の組成分は、之れを資本家の立場から見れば、彼れの前貸した可變資本価値の等價たるか、又は其超過分たる限りに於いてのみ、相互に區別されるのである。此兩部分とも、商品生産の進行中に支出された労働力（即ち労働として實現された労働力）以外の何ものからも成るものではない。それは支出——労働支出——から成るものであつて、所得又は収入から成るものではないのである。

商品価値を収入の源泉たらしめずして、寧ろ反對に収入の方を商品価値の源泉たらしめるといふ、斯様な首尾轉倒が行はれた後、商品価値は今や諸種の収入から『成る』ものとして現はれる。此等の収入は相互獨立して決定され、而して商品の總価値は此等の収入の價值量の合計に依つて決定されることになるのである。然し茲に問題となることは、アダム・スミスが商品価値の源泉になると説く此等の収入おの／＼の價值は、そも／＼如何にして決定されるかといふ事である。労働について言へば、其價值は次の如くにして決定される。即ち労働なるものは、労働

者の商品たる労働力の價值であり、而して労働力の價值は又——他の總ての商品の價值と同様に——此商品の再生産に必要な労働に依つて決定されるのである。けれども餘剩價值（或は寧ろ、其兩形態としてスミスの擧げてゐる利潤及び地代）の方は、如何にして決定されるか？ 此問題になると、スミスの説く所は空談に止まつてゐる。彼れは労働及び餘剩價值（もしくは労働及び利潤）をば、商品價值又は價格の組成分として説明してゐるかと思へば、さう言ふ口の下から更らに、之れを商品價格の『分解』されてゆく部分として説明してゐる場合が屢々ある。然し之れは彼れの謂はんとする所とは反對の事實、即ち商品價值なるものは最初に與へられてゐる所のものであつて、此與へられたる價值の各異つた部分は夫々異つた収入となつて、生産行程に關與する各異つた人々の有に歸するといふ事實を意味するものである。之れは、商品價值が三つの『組成分』から成るといふ事實とは決して同一ではない。今、三つの異つた直線を探つて、其各の大きさを別々に決定し、然る後これらの三直線を『組成分』として其合計に等しき第四の直線を造り上げるとすれば、此方法は決して、豫め與へられたる一直線をば何等かの目的のため

め三つの異つた部分に分割（或は『分解』とも云へやう）せしめること、同一ではない。第一の場合における直線の大きさは全く、それを合成する三直線の大きさに従つて變化するものであるが、第二の場合における三直線の大きさは、此等の直線が豫め與へられたる大きさの一直線を構成するといふ事實に依つて、最初より局限されてゐるのである。

けれどもアダム・スミスの所論における正確なる方面、即ち年々造られる社會の商品生産物（各個の商品、或は日々の生産物、毎週の生産物等についても同様であるが）の中に含まれてゐる所の年、労働に依つて新たに造り出された價值は、前貸可變資本の價值（換言すれば、新たな労働力の購買に充用すべき價值部分）と、資本家が——單純なる再生産のもとに立ち、且つ他の事情に變化がないと假定する限り——其個人的消費資料として實現し得る餘剩價值との和に等しいといふ見解を念頭に置き、更らにアダム・スミスが價值を造るものとしての労働、即ち労働力の支出としての労働と、使用價值を造るものとしての労働、即ち一定の目的に適合した有用なる形態を以つて支出される労働との雙方を互ひに混同したといふ

事實を念頭に置くならば、彼れの全見地は、實際のところ各商品の價值、随つて又、年労働の齎らす生産物の價值、もしくは年々造られる社會的商品生産物の價值は、労働の生産物であるといふ一點に歸着する。所が一切の労働は、（一）必要労働、即ち労働力の購買に前貸された資本の等價を再生産するに過ぎぬ労働時間と、（二）餘剩労働、即ち資本家が何等の等價をも支拂はなかつた價值（換言すれば餘剩價值）を彼れの手に供給する所の労働とに歸するものであるから、一切の商品價值は結局此二つの異つた要素にのみ分解され得るものとなり、終極に於いて如何なる商品價值も、労働として労働者階級の収入を構成し、餘剩價值として資本家階級の収入を構成することになるのである。然るに不變資本價值（換言すれば、年生産物の生産を消費された生産機關の價值）について言ふと、此價值が如何にして新生産物の價值に入り込むかは（資本家が商品販賣の際、それを購買者の負擔に歸せしめるといふ主張に依るの外は）説明し得ざる所である。然し終極に於いて、此價值部分も亦、可變資本の等價と餘剩價值との雙方の換言すれば、必要労働と餘剩労働との雙方のみから成るものと見ることが出来る。なせならば、生産機關

それ自身が又労働の生産物であるからである。かゝる生産機關の價值が、其充用者の手中で資本價值たる機能を盡すといふ事實は、此價值が『本來に於いて』又更に根底に溯つて考へるならば、より以前他人の手中に於いて、右に説くところと同様の二價值に（随つて各異つた二つの収入源泉に）分割し得るものであつた事を妨ぐものではない。

以上の見解に於いて當を得てゐる所は、社會的資本（換言すれば、個別的諸資本の總體）の運動といふ立場から觀察する場合、問題は個別的に考へた各資本の立場から觀察する場合（換言すれば、個別的なる各資本家の立場から觀察する場合）とは異つた形に現はれるといふ一點である。個別的資本の場合には、商品價值なるものは（一）不變要素（スミスの謂ゆる第四の要素）と、（二）勞銀及び餘剩價值（換言すれば、勞銀、利潤及び地代）の總額とに分解されるが、社會的資本の立場から觀察すると、スミスが第四の要素と名づけてゐる不變資本價值は消滅することになるのである。

(5) 摘要

勞銀、利潤及び地代なる三種の收入は商品價值の三つの『組成分』を構成するといふ不條理的な公式は、アダム・スミスの場合で言ふと、商品價值なるものは此等の三要素に分解されるといふより、尤もらしい見解に起因するものである。此後ちの見解も亦——假りに商品價值なるものは、消費労働力の等價と此労働力に依つて造り出された餘剩價值とにのみ分割し得るに過ぎないとしても——認つてゐる。然し此場合における錯誤は、より深遠なる合理的基礎に立脚するものである。そも、資本制生産なるものは、生産上の労働者が自己の労働力をば商品として資本家に販賣し、然る後それが資本家の手中に於いて、彼れの生産資本の單なる一要素として作用するといふ事實を基礎とするものである。流通部面に屬する斯様な取引——労働力の賣買——は、單に生産行程の開始を手引きするのみではなく、また包含的に其特殊の性質を決定するものでもある。使用價值の生産は此場合資本家の得べき絶對的餘剩價值並びに相對的餘剩價值を造り出す手段たるに過ぎないのである。（之れは商品の生産についても同様であるが、然し商品の生産なるものは、獨立した生産労働者に依つても行はれ得るものであることを念頭に

置かなければならぬ)。そこで我々は生産行程を分析する際、絶対的剰余価値並びに相対的剰余価値の生産が、如何に(一)日労働行程の持続と、(二)資本制生産行程の社会的並びに技術的形態の全部とを決定するかを見たのである。此生産行程それ自身の内部に於いて、価値(不変資本価値)の單なる保存と、前貸価値(労働力の等價)の現實的再生産と、剰余価値(即ち事の前後を通じて、資本家に依り何等の等價も支拂はれざる價值)の生産との區別が實現されるのである。

剰余価値——資本家に依つて前貸された価値の等價以上に出づる超過価値——の占有は、労働力の賣買に依つて開始せしめられるものであるが、然しそれは生産行程それ自身の内部に行はれる一行爲であり、その本質的一要素たるものである。流通取引を構成する所の發端的取引、即ち労働力の賣買なる事實は、それ自身また社会的生産物の配分の先行條件たり前提たる生産要素の配分を基礎とするものである。換言すれば、それは労働者の商品としての労働力と、非労働者の所有物としての生産機關との相互分離を基礎とするのである。

然し又、資本家が剰余価値を占有するといふ如上の事實もしくは價值生産が右

の如く前貸価値の再生産と、何等の等價をも補償することなき新價值(剰余価値)の生産とに分離されるといふ事實は、價值その者の實體及び商品生産の性質の上に些かの變化をも生せしめるものではない。價值の實體とは支出労働力——即ち特殊の有用的な形態から獨立した労働——以外の何ものでもなく、而して價值生産なるものは、斯くの如き労働力支出の行程に外ならないのである。今、農奴が六日間労働力を支出する場合、換言すれば彼れが六日間労働する場合を採つて見るに、此六日間の中例へば三日間は彼れ自身の爲に、彼れ自身の畑で労働し、他の三日間は領主の爲に領主の畑で労働するとしても、かゝる事實は、彼れが労働力を支出するといふ事實その者の上には何等の影響も及ぼさないのである。彼れ自身の爲の任意的労働も、領主の爲の強制的労働も、労働たる點に變りはない。之れを労働として其産物たる價值又は有用生産物に關聯させて考へる限り、彼れのなす六日間の労働の上には何等の區別も生じないのであつて、區別はたゞ六日間といふ労働期間の各半期中に彼れの労働力の支出を行はしめる所の、相異つた事情についてののみ與へられるのである。以上説くところは、貸銀労働者の必要労働と餘

剰労働についても同様に當て候る。

生産行程は商品の裡に消えて行く。商品の生産に労働力が支出されたといふ事實は、今や、商品が價值を有するといふ物的性質として現はれる。此價值の大小は、支出労働の大小に依つて秤量される。商品價值なるものは、支出労働以外の何ものにも分解されるものではなく、又支出労働以外の何ものからも成るものではない。今、予が一定の大きさを有する一直線を畫いたとすれば、此場合予は先づ、予自身からは獨立した一定の法則に従ふ畫線法に依つて、一直線を（勿論、予が豫め知る所のもの、單なる表徴として）『生産』したことになる。予が若し此直線を三つの斷片（これ又、一定の問題に役立ち得る所の）に分割したとすれば、此等の斷片の各も亦、直線であることに變りはなく、此等の斷片を部分とする所の全線は、斯かる分割のため直線とは異つたもの（例へば何等かの種類の曲線の如きもの）に分解されることはないのである。同様に又、與へられたる大きさの一直線は、其各斷片の合計が分割以前における全直線よりも大となるやうに分割せられ得るものではない。随つて又、分割せられざる全直線の大小は、各斷片線の任意に定めた大

小に依つて決定されるものでもないことになる。反對に、各斷片線の相對的大小は、各斷片線を部分とする全直線の大小に依つて最初より局限されてゐるのである。

資本家のもとに生産される商品は、それ自體としては如何なる點に於ても、獨立した労働者なり、労働者の共同體なり、又は奴隸なりに依つて生産される商品から區別されるものではない。然し當面の場合について言へば、労働生産物と其價值との全部は、資本家の有に屬してゐるのである。他の總ての生産者と同じく、資本家も亦、後に及んで商品を利用し得る爲には、先づ販賣に依つて之れを貨幣に轉化しなければならぬ。彼れはそれを一般的等價の形に轉化しなければならないのである。

貨幣に轉化される以前の商品生産物を考察して見よう。其全部は、資本家の有に屬してゐる。他方に又、有用なる労働生産物即ち使用價值として見れば、其全部は過去における労働行程の生産物である。けれども此生産物の價值は其うではない。其價值の一部は、商品の生産に支出された生産機關の價值が新たなる形態

に再現したものに過ぎないのである。それは此商品の生産行程の進行中に生産されたものではなく、生産機關が此商品の生産行程に關與する以前すでに、右の價值は該行程からは獨立して生産機關の中に含まれてゐたのであつて、生産機關は斯かる價值の負擔者として該行程に關與することゝなつたのである。更新され變化されたものは、此價值の現象形態のみである。商品價值の斯かる部分は、資本家の立場から見れば、商品生産の進行中に消費された彼れの前貸不變資本價值の等價たるものである。それは過去に於いては生産機關として存在し、而して今や新たに生産された商品の價值部分として存在してゐる。此商品が貨幣化されるや否や、今や貨幣となつて存在してゐる右の價值は、其本來の形態——生産行程と右の價值が生産行程内に盡す機能とに依つて決定される所の——である生産機關に再轉化されねばならぬ。商品の價值性質は、價值が資本機能を盡すことに依つて何等の變化をも生せしめられるものではない。

商品の第二の價值部分たるものは、即ち賃銀勞働者が資本家に販賣する勞働力の價值である。而して此價值も亦、生産機關の價值と同様に、勞働力の關與すべき

生産行程からは獨立して決定される。それは勞働力が生産行程に關與する以前勞働力の賣買なる流通取引を通して確立されるのである。賃銀勞働者は其機能——彼れの勞働力の支出——に依り、彼れの勞働力を使用する代價として資本家から支拂はるべき價值に等しき商品價值を生産する。彼れは此價值を商品の形で資本家に交付し、資本家はそれを貨幣の形で彼れの手に支拂ふ。この商品價值部分は、資本家の立場から見れば、勞銀として前貸すべき可變資本の等價に過ぎぬものであるが、然し斯かる事實は、右の價值部分が餘剩價值と同じく生産行程の進行中新たに造り出された商品價值であつて、支出された勞働力以外の何物からも成るものでないといふ事實を變化せしめるものではない。同様に又、資本家が賃銀の形で勞働者に支拂ふ勞働力價值は、勞働者の立場から見れば、収入の形を採るものであり、その結果單に勞働力のみではなく、賃銀勞働者階級それ自身も亦絶えず再生産されることになり、かくして資本制生産全體の基礎が再生産されることになるといふ事情に依つても、右の事實は影響を受けることはないのである。けれども商品價值の全體は、以上二つの價值部分の總計のみから成るものでは

ない。此兩者以上に、尙一つの超過分が残つてゐる。それは即ち剰餘價值である。而して此剰餘價值も亦、勞銀として前貸された可變資本を補償する所の價值部分と同様に、生産行程の進行中勞働者に依つて新たに造り出された價值——凝結したる勞働——である。たゞ剰餘價值の方は、全生産物の所有者たる資本家に何等の費用をも負擔せしめないといふ一點が異なるのみである。かゝる事情のもとに、資本家は剰餘價值の一部をば他の關與者に割讓することを要しない限り（例へば、彼れは土地所有者の手に地代を支拂ふ。この場合には、斯様な剰餘價值分は第三者の収入を構成することになるのである）、事實上その全部を収入として消費することが出来る。右の事情は又、我が資本家をして先づ商品生産に従事せしめたる起動動機となつたものである。然し剰餘價值を確保しようといふ彼れの本來の善意的な意圖も、また其後に及び彼れ自身なり他の人々なりが之れを収入として支出するといふ事實も、剰餘價值その者の上には何等影響する所がないのである。かゝる事實は、剰餘價值が不拂勞働の凝結であることを毫も變化せしむるものではなく、また剰餘價值の大小の上にも何等影響する所はない。蓋し剰餘

價值の大小なるものは、全く別途の條件に依つて決定されるからである。

されどアダム・スミスにして若し——事實彼れが爲してゐる如く——再生産行程總體の上に於いて、商品價值の各異つた部分に如何なる役目が割り當てられるかといふことを、商品價值の考察の際すでに攻究しようとしてゐたものとすれば、商品價值の特殊の部分が收入として作用しつゝある時、他の部分は絶えず資本として作用してゐること、隨つて彼れの論理を以つてすれば、かゝる商品價值部分も同様に、商品價值の組成分又は商品價值が分解されてゆく部分として示さるべき筈であつたことは明かな事實である。

アダム・スミスは商品生産一般を資本制商品生産と同一視してゐる。彼れの見る所に依れば、生産機關は最初より『資本』であり、勞働は最初より賃銀勞働である。隨つて『有用なる生産的勞働者の數は、常に……其雇傭に充用される資本の大小に比例するものである』（結論第一二頁）。約して言へば、勞働行程の種々なる因子（物的竝に人的の）は、最初より資本制生産時代の假面を以つて現はれるといふ事になるのである。隨つて商品價值の分析は、商品價值なるものが一方に於いては